

高く累り、それが傾いてゐて刀か何かで削つたやうに立つてゐる。一體造物者はどんな考で巖の東端に此石を置いたのであらう。表面は滑かで人の足跡もなく、苔が處處に生えて花模様のある紙のやうである。自分は此石の頂に登り、下の深い谷底を見下したが、目はくらみ手足は掉ひ、長く見てゐられなかつた。しかも風が石の下から吹き起つて、我を薄り搏ち、著物は羽をひろげたやうになり、今にも飛びあがりさうになつた。三面の峰が高く聳えて刀剣が集つてゐるやうである。往往白雲が其れに切られて青天を露はすことがある。西北の方を見ると夕日は赤く圓く、緑色の屏風のやうに千里も續く山の外に、丹砂の丸が走り下るやうに沈んで行く。翻つて東南を見ると、夜氣がひろびろと澄み渡り、そこへ明月が現れて、恰も百丈の碧潭の底に黄金の盆が寫つてゐるやうである。藍水の流は藍のやうに綺麗で、夜晝休みなしに潺湲と音立てて、山を遶つて流れてゐる。それを見下すと丁度青い環のやうである。或は平に流れて緩流となり、或は激して奔湍となり、水の澄んで深い處には蛟龍の涎が浮び出てゐる。身を側て藍水の溪谷にはひつて見ると、中天に懸つたやうに石磴があつて甚だ危険である。蘿につかまつたり垂れ下つた木の枝を踏んだりして下つて行くと、谷間に水を飲んでゐた猿が驚いて逃げ出した。又白鷺は雪の飛ぶやうに飛びあがり、赤い鰻は錦を曳くやうに逃げまはつた。騷の靜まるのを待つて手を洗ひ口を漱ぎ、肢體の疲を洗ひ去つた。此川は浅い處も深い處も皆澄み徹つて、人の内臓までも寫るくらゐである。底の底まで見えるのを愛翫するだけで、其源がわか

らないから尋ねて行くことは出来なかつた。東の崖には怪石が多く、青い琅玕が石疊のやうにかさなつてゐる。玉の温潤の氣が外に現れて其間に璵璠といふ寶玉が藏めてゐる。今は卞和のやうな玉を見分ける人がないから、良玉も棄てられて世に現れないが、この石は時に或は光を洩して、夜になると天上の星や月と光を連ねるさうである。中頂の最高峰は天を支へる青玉の竿のやうで、聽鼈でも上れないのだから、自分などには到底登れない。其上に白蓮池があつて、白い花が漣の上を覆つてゐる。その池の名は聞いたが、全く俗界を離れた處で行つて見ることは出来ない。又一尺四方の甌ぐらゐな一箇の大石があつて、崖の中腹に挿つて萬仞の谷の上に懸つてゐる。昔法師が此石の上に坐して無生禪を悟得したといふ。此石は定心石と名づけられ、此寺の長老が代語り傳へてゐる。更に此處から上つて仙人の祠に參詣した。あたりには蔓草が一面に生えてゐる。聞けば昔王氏の子が仙人になつて天に升つた所なさうだ。其西に藥を曬した臺があつて、今でも藥草島に對してゐる。時時明月の夜には、仙人の乗つた黄鶴の聲が聞えるさうだ。次の畫龍堂を尋ねた。鬚や髮の白毛交りになつた二人の老翁が描いてゐる。自分は此老翁が法話を聞いた時に、歡喜に滿ち戒壇に向つて禮拜し、又地下の穴に下り蜿蜒たる龍と化したといふ話を想ひ浮べた。堂の階段の前に石の孔があつて、雨の降らうとする時には白い煙が出るといふ。又昔經文を寫す僧があつたが、雲外に飛んでゐる鶴が其僧の靜專に感じ、千匹も羣り飛んで、巖下の泉を吸つて來ては、經を寫す硯の水を添へ、一日に三回往復して、

いつも時節を違へなかつたといふ。其經が出来あがつて此僧は聖僧の名を取つた。其弟子に揚難といふ者があつて、此聖僧の蓮花の偈を誦すること百億千の數に滿ち、體は壞れても口は壞れず、舌が紅蓮のやうに赤くなつたといふ。其等の頭骨は今見ることが出来ないが、死骸を入れた石の函は今でも残つてゐる。又白壁には吳道子の書いた畫があつて、昔のままの色彩を存してゐる。又白い屏風には褚遂良の書がある。墨色が今書いたばかりのやうである。以上述ぶる如く靈境と異跡と、残らず見盡した。ここに來て五晝夜を經、いざ返らうとは思ふけれども、何となく立ち去りかねて暫く徘徊した。我はもと山中に生れた者であるが、誤つて時代の習俗に引きずられ、無理やりに書を読ませられ、又他人の推挽によつて官吏にせられた。既に校書郎となり、又左拾遺に任せられて君を諫める職に就いたが、愚直な性分だから時勢と合はず、何の功益も立て得ず、給料の只取りをしてゐると同じであつたから、いつも此事を憂へて心に樂がなかつた。かくて成す所もなく心力盡き、まだ老いたといふほどでもないのに身體が損はれてしまつた。此頃官職を退いて始めて重荷を卸したやうに感ずる。且つ今ここへ來て山水の遊をなし、愈、我が疎頑の性を縦にすることが出来た。丁度野の鹿が絆を離れて自由に行走することが出来、池の魚が海に放たれて復と池に還らないのと同じである。これからは身には處士の服をまとひ、手には莊子を持ち、永く此山に住んで俗縁を絶ちたいものだ。今自分には年四十餘であるが、是からは一生閑で暮らさうと思ふ。假に七十まで生きるとすれば、また三十年

此山で樂むことが出来る。

【餘論】唐宋詩醇に、洋洋灑灑、一氣讀み去りて、千巖秀を競ひ萬壑流を争ふに幾く、目、賞するに給せず。其中に就いて細かに之を尋ねれば則ち步驟井然、一絲紊れず。首四句寺に遊ぶに因りて山に登るを點清し、竝に年月日俱に細叙す。去山四五里より置寺於其間に至るまで、寺外の景を寫し、曲折靈異、迥に塵世を隔て、仙境に入るが如し。妙は回首寺門望の四句を以て一頓挫を作すにあり。遂に心神の蕩漾を覺ゆ。宛も是れ初めて到る神情。入門無三平地の一句提筆を作し、聞之似寒蟬に至るまで、寺中路徑の透迤、樹木の蒼鬱を敘す。首憩賓位亭より可三以降靈仙に至るまで、細かに寺中歴る所の境と相傳の法物とを叙し、北戸を開きて前行し、又回顧して來路を見る。是れ多寶塔に對するを以てなり。玉像殿、觀音堂、皆寺の西界。是時秋方中より竟夕不欲眠に至るまで、夜中の景を摹寫し、八月上弦の一句と相映じて又一束となす。曉尋南塔路より欲返仍盤桓に至るまで、連日遊ぶ所の境を歴敘し、變化して之を出す。南よりして東、而して中、而して上。北を言はざるものは、寺門に入りしより大抵皆北に向つて行けばなり。其間神像あり、峰巖あり、水あり、怪石あり、白蓮あり、祠あり、臺あり、畫あり、書あり。細細寫し出す。日落ち月上る。復た次日晝より夜に入るの景を帶敘し、更に拖沓せず。寫經僧、誦經弟子は、只虛寫し、傳聞上にありて敘出し、靈境與三異跡の四句、一總束と作す。一遊五晝夜、又八月上弦と照應す。我本山中人より末に至るまで、遊

字の意を收足す。四十餘、三十年、又元和九年と照應す。全詩を細玩すれば、分明に記序を作るの筆を以て之を詩に用ふ。韓愈の南山の詩は奇肆を以て勝り、此は秀折を以て勝る。匹敵と謂ふべし。謝靈運が山に遊ぶの詩、柳宗元が山水の記、素より奇構と稱す。彼を以て此に方ふれば廣狹の別なくんばあらず」と評してある。

又甌北詩話には「唐人の五言古詩大篇、少陵の北征、昌黎の南山に如くは莫し。二詩の優劣は黄山谷已に嘗て之を言へり。然れども香山にも亦遊王順山悟真寺一首あり。多きこと一千三百字に至る。世顧つて未だ言及する者あらず。今其詩を以て南山と相校するに、南山の詩は但儻侗として山景を摹寫し、數十の或の字を用ひて極力刻畫す。而も之を以て移して他山を寫すも亦通用すべし。悟真寺の詩は、則ち先づ山に入るを寫し、次に寺に入るを寫し、先づ賓位に憩ひ、次に玉像殿に至り、次に觀音巖、この夕寺中に宿し、明日又南塔の路より藍谷を過ぎ、其巔に登り、又藍水環流の處に到り、中頂の最高峰に上り、尋で一片石、仙人祠に謁し、廻りて畫龍堂を尋ね、吳道子の畫、褚河南の書あるを點明し、總べて登歷凡て五日を結び、層次既に清楚を極む。且つ一處は一處の景物を寫し、他處に移易すべからず。南山の詩に較ぶれば更に之に過ぐるに似たり。又北征、南山、皆仄韻を用ふ。故に氣力健舉なり。此れ但平韻を用ひて逐層鋪敘し、沛然として餘あり、一語の冗弱なし。更に難きを覺ゆるなり。而るに詩人知らず、則ち香山に長恨、琵琶諸大篇の人口に膾炙するあるを以て、遂に

此詩を不問に置くのみ」と評してある。

酬張十八訪宿見贈

自後詩、爲二贊善大夫一時作

張十八が訪宿して贈らるるに酬ゆ 此より後の詩は贊善大夫たりし時作る

昔我爲近臣。君常稀到門。
今我官職冷。唯君來往頻。
我受狷介性。立爲頑拙身。
平生雖寡合。合卽無緇磷。
況君秉高義。富貴視如雲。
五侯三相家。眼冷不見君。
問其所與遊。獨言韓舍人。
其次卽及我。我媿非其倫。
胡爲謬相愛。歲晚逾勤勤。

昔我近臣たりしとき、君常に稀に門に到る。
今我官職冷なり、唯君來往すること頻なり。
我狷介の性を受け、立ちて頑拙の身と爲る。
平生合ふこと寡しと雖も、合へば卽ち緇磷無し。
況んや君高義を秉り、富貴視ること雲の如きをや。
五侯三相の家、眼冷にして君を見ず。
其の與に遊ぶ所を問へば、獨言ふ韓舍人と。
其次は卽ち我に及ぶ、我愧づらくは其倫に非ざるを。
胡爲ぞ謬りて相愛する、歲晩れて逾勤勤たり。

落然頽簷下。一話夜達晨。
 牀單食味薄。亦不嫌我貧。
 日高上馬去。相顧猶逡巡。
 長安久無雨。日赤風昏昏。
 憐君將病眼。爲我犯埃塵。
 遠從延康里。來訪曲江濱。
 所重君子道。不獨愧相親。

落然たる頽簷の下、一話して夜晨に達る。
 牀單にして食味薄きも、亦我が貧を嫌はず。
 日高くして馬に上り去る、相顧みて猶ほ逡巡す。
 長安久しく雨無く、日赤くして風昏昏たり。
 憐む君が病眼を將つて、我が爲に埃塵を犯すを。
 遠く延康の里より、來りて曲江の濱を訪ふ。
 「みならず、重んずる所は君子の道なり、獨り相親むことを愧づるの」

【字解】【一】近臣。天子の近臣。左拾遺となつたこと。【二】狷介。守る所堅く、他と和合せぬこと。【三】緇磷。緇は黒く、磷は薄くなること。論語に、不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇とある。【四】五侯三相。貴顯の人。【五】韓舍人。韓は姓、舍人は官名。【六】落然。凋落の貌。【七】昏昏。暗き貌。【八】曲江。長安に在る池の名。

【題義】張十八（張は姓、十八は排行）が白樂天の居を訪うて遂に一宿し、詩を作つて樂天に贈つたので、樂天がそれに酬いた詩である。これから後の詩は樂天が年四十三、太子左贊善大夫に任ぜられたから作つたものである。

【詩意】昔余が天子の近臣であつた頃は、君は余を訪ふことが稀であつたが、今は余の官職が卑いので、君は度度余を訪ふやうになつた。余は狷介で人と相容れない性質であつたが、遂に頽拙の身となつた。それゆゑ人と合はないが、いざ合つたとなると容易に節を屈げて人に雷同するやうなことはない。まして君は高義の人で富貴を視ること浮雲の如くである。されば富貴の人は君を親愛しない。因つて與に遊ぶ所の人を君に問へば、先づ第一が韓舍人、其次は余だといふ。余の如きは君の朋輩たるに足らぬ者であるが、何の誤で君に親愛されるやうになつたのか、年を取るに隨つて益親愛の度を増し、落然たる破屋に宿し、一晚中語り明し、寢牀の粗末なことも食物のまづいことも敢て厭はない。翌朝日が高くなるのぼつてから馬に上つて歸るに方り、又互に顔を見合せて別を惜んだ。今や長安は久しく雨が降らないので、日がかんかん照つて風が砂塵を捲きあげる。君は眼病を患へてゐるのに、余の爲に此砂塵を犯して、延康里から遠く余を曲江の濱に訪問してくれたことを感謝する。余は君の君子の道あることを尊敬する者で、ただ獨り君の親愛を辱うすることを愧づるのみではない。

朝歸書寄元八

朝より歸り書して元八に寄す

進入閣前拜。退就廊下餐。
 歸來昭國里。人臥馬歇鞍。

進んで閣前に入りて拜し、退いて廊下に就いて餐す。
 歸り來る昭國里、人臥して馬鞍を歇む。

却睡至日午。起坐心浩然。

却つて睡りて日午に至り、起坐して心浩然たり。

況当好時節。雨後清和天。

況んや好時節に當り、雨後清和の天。

柿樹綠陰合。王家庭院寬。

柿樹綠陰合し、王家庭院寬し。

瓶中鄠縣酒。牆上終南山。

瓶中鄠縣の酒、牆上終南の山。

獨眠仍獨坐。開襟當風前。

獨り眠りて仍ほ獨り坐し、襟を開いて風前に當る。

禪僧與詩客。次第來相看。

禪僧と詩客と、次第に來りて相看る。

要語連夜語。須眠終日眠。

語らんと要すれば夜を連ねて語り、眠るべくして終日眠る。

除非奉朝謁。此外無別牽。

朝謁に奉ずることを除非して、此外別に牽かるる無し。

年長身且健。官貧心甚安。

年長じて身且つ健なり、官貧にして心甚だ安し。

幸無急病痛。不至苦飢寒。

幸に急病の痛み無く、飢寒に苦しむに至らず。

自此聊以適。外緣不能干。

此より聊か以て適す、外緣干す能はず。

唯爲靜者信。難爲動者言。

唯靜者の爲に信せられ、動者の爲に言ひ難し。

臺中元侍御。早晚作郎官。

臺中の元侍御、早晚郎官と作らん。

未作郎官際。無人相伴閑。

未だ郎官と作らざる際は、人の相伴つて閑なる無し。

【字解】 臺中 臺は御史臺。役所の名。

【題義】 朝廷から退いて昭國里の官宅に歸り、元侍御に寄せた詩である。

【詩意】 晨に宮門に入りて拜謁し、退いて廊下で朝食を賜はり、それから昭國里に歸つて來て、吾も馬も休息し、眞晝頃まで睡つて起きると氣が晴晴とする。まして雨あがりの清和の時節で、王家の廣い庭には柿の樹の綠陰が深く、瓶の中には鄠縣の酒があり、牆上には終南山を望むことが出来るのであるから。睡から覺めて獨り坐し、襟を開いて風を入れてゐると、禪僧だの詩人だのが次第に訪ねて來て、語りたければ夜どほしでも語り明し、眠むければ一日中でも眠つてゐて、朝謁を除く外には別に拘牽するものはない。年取つても健康で官は卑くとも心は甚だ安く、病氣の苦痛もなければ飢寒の心配もない。これからは悠悠自適して、俗縁の爲に心を干されることのないやうにしたいものだ。かかる事は唯靜寂を愛する人のみに理解されることで、心の躁妄な人には言ふことは出来ない。君は早晚郎官となるであらうから其時は此樂を共にしたいものだ。まだ郎官にならないうちは相伴つて閑遊することは出来ないが。

酬吳七見寄

吳七が寄せらるるに酬ゆ

曲江有病客。尋常多掩關。
 又聞馬死來。不出身更閒。
 聞有送書者。自起出門看。
 素緘署丹字。中有瓊瑤篇。
 口吟耳自聽。當暑忽翛然。
 似漱寒玉水。如聞商風絃。
 首章歎時節。末句思笑言。
 懶慢不相訪。隔街如隔山。
 嘗聞陶潛語。心遠地自偏。
 君住安邑里。左右車徒喧。
 竹藥閉深院。琴樽開小軒。
 誰知市南地。轉作壺中天。

曲江に病客有り、尋常多くは關を掩ふ。
 又聞く馬死してより來、出でずして身更に閒なりと。
 書を送る者有りと聞き、自ら起ちて門を出でて看る。
 素緘丹字を署し、中に瓊瑤の篇有り。
 口に吟じて耳自ら聽き、暑に當りて忽ち翛然たり。
 寒玉の水に漱ぐに似たり、商風の絃を聞くが如し。
 首章時節を歎じ、末句に笑言を思ふ。
 懶慢して相訪はず、街を隔てて山を隔つるが如し。
 嘗て聞く陶潛が語、心遠くして地自ら偏なり。
 君は安邑里に住す、左右車徒喧し。
 竹藥深院を閉ち、琴樽小軒を開く。
 誰か知らん市南の地、轉た壺中の天と作すを。

君本上清人。名在石堂間。
 不知有何過。謫作人間仙。
 常恐歲月滿。飄然歸紫煙。
 莫忘蜉蝣內。進士有同年。

君は本上清の人、名は石堂の間に在り。
 知らず何の過有りてか、謫せられて人間の仙と作る。
 常に恐らくは歲月滿ちて、飄然として紫煙に歸らんことを。
 忘るる莫かれ蜉蝣の内、進士同年有るを。

【字解】【一】曲江。長安に在る池の名。【二】尋常。平生なり。【三】素緘。白い封書。丹字は赤文字。【四】瓊瑤篇。玉の如き詩。【五】翛然。疾く飛ぶ貌。【六】商風。秋風。【七】首章。一篇の發端。【八】陶潛。陶淵明。【九】壺中天。別世界の意。漢書方術傳に、費長房は汝南の人なり。曾て市掾となる。市中に老翁あり藥を賣る。一壺を肆頭に懸け、市罷むに及べば輒ち跳りて壺中に入る。長房往いて再拜す。翁乃ち俱に壺中に入る。ただ玉堂の嚴麗なるを見る云云とある。【一〇】上清。道家三清の一。【一一】石堂。石室に同じ。神仙傳に、廣成子崆峒の山、石室の中に居るとある。【一二】紫煙。天上神仙の居る處。【一三】蜉蝣。かげるふ。俗世間に喩ふ。【一四】同年。同じ年に進士の試験に及第した人。

【題義】吳七（吳は姓、七は排行）が白樂天に詩を寄せたので、樂天が其れに酬いた詩である。

【詩意】曲江に病夫（白樂天自ら謂ふ。樂天が曲江の邊に住んでゐたことは、前の酬張十八訪宿見贈の詩にある）があつて、平生多くは門を掩うて閑居してゐる。殊に近頃馬が死んでからは、全く外出しないで閑で暮してゐる。折しも手紙を持つて來た者があると聞いて、門外に出て使者を見、赤文字で署名した白い封書を受取つて、開いて見ると中に一篇の詩があつた。自分で吟じて自分で聽

けば、忽ち暑氣が退散してしまつた。冷い水で口を漱ぎ秋風の音を聞いたやうである。其詩の發端には時節を嘆じ、末の方には君と笑言したいといふやうなことが述べてある。その癖自分は人を訪問するに懶く、街を隔ててゐるのをば、山でも隔ててゐるやうに思つてゐる。陶淵明の詩句に、心遠くして地自ら偏なりとあるが、君は安邑里に住んでゐる。その近所は車馬の音が騒がしい。然るに君は深院を閉ぢて竹や芍薬などを植ゑ、小軒を開いて琴酒を樂み、市の南方に獨り別天地を構へてゐる。君はもと仙界の人であるのに、何の罪を以て人間界に謫せられたのであらう。自分は年限が満ちたら又紫煙を逐うて天上に去るのではないかと常に恐れてゐる。どうか俗世間に同年の友があることを忘れぬやうにしてもらひたい。

昭國閑居

昭國の閑居

貧閑日高起。門巷晝寂寂。
 時暑放朝參。天陰少人客。
 槐花滿田地。僅絶人行跡。
 獨在一牀眠。清涼風雨夕。

貧閑にして日高くして起き、門巷晝寂寂たり。
 時暑にして朝參を放され、天陰りて人客少なり。
 槐花田地に滿ち、僅ど人行の跡を絶つ。
 獨り一牀に在りて眠る、清涼たる風雨の夕。

勿嫌坊曲遠。近即多牽役。
 勿嫌祿俸薄。厚即多憂責。
 平生尚恬曠。老大宜安適。
 何以養吾真。官閑居處僻。

嫌ふ勿れ坊曲の遠きを、近ければ即ち牽役多し。
 嫌ふ勿れ祿俸の薄きを、厚ければ即ち憂責多し。
 平生すら尚ほ恬曠、老大宜しく安適すべし。
 何を以てか吾が真を養ふ、官閑にして居處僻なり。

【字解】【一】昭國 長安の里の名。前の朝歸書寄三元八に見ゆ。【二】朝參 朝廷に出勤すること。【三】坊曲 町なり。

【題義】昭國里の官宅に閑居する情趣を述べた詩である。

【詩意】貧にして且つ閑であるから、日が高くのぼつてから始めて起きる。あたりは晝でも静かである。丁度暑い氣節なので休暇を賜はつて朝もせず、陰り勝ちの天氣だから來り訪ふ客も少く、槐の花が一面に散り敷いて殆ど人の足跡をも埋めるばかりだ。この清涼な風雨の夕に獨り靜に眠つてゐる。住む町の僻遠なことは敢て厭はない。若し近ければ却つて色色な役目が増すであらうから。又俸祿の薄いことも敢て厭はない。厚ければ隨つて責任も重くなるから。少い時ですら安佚を好んだのであるから、老いては益安適を好まざるを得ない。で、何を以て吾が天真を養ふかといふに、官が閑で居處の僻遠なことである。

喜陳兄至

陳兄の至るを喜ぶ

黃鳥啼欲歇。青梅結半成。

黃鳥啼いて歇めんと欲し、青梅結んで半成る。

坐憐春物盡。起入東園行。

坐到憐む春物の盡くるを、起つて東園に入りて行く。

攜觴嬾獨酌。忽聞叩門聲。

觴を攜ふるも獨り酌むに嬾し、忽ち聞く門を叩く聲。

閒人猶喜至。何況是陳兄。

閒人だも猶ほ至るを喜ぶ、何ぞ況んや是れ陳兄なるをや。

從容盡日語。稠疊長年情。

從容として盡日語り、稠疊たり長年の情。

勿輕一杯酒。可以話平生。

輕んずる勿れ一杯の酒、以て平生を語る可し。

【字解】 一 閒人 ひまな人。 二 稠疊 繁冗なこと。 三 長年は老年。

【題義】 陳某の來り訪ひしを喜んで作つた詩である。

【詩意】 今や黃鳥も啼き歇まんとし、青梅も半熟せんとする時節になつた。春景色の盡きんとするを惜みつつ、起つて東園を歩いて見た。獨りでは酒を酌む氣にもなれずにある所へ、忽ち門を叩く聲を聞いた。こんな時はどんな暇人でも來てくれるのは嬉しいものだが、まして陳兄とあつては尙更に嬉しい。因つて從容として一日を語り盡した。話のくどいのは年寄りの常情で仕方がない。何のあ

いそもないが、一杯の酒を輕んぜずに平生を語るがよい。

贈杓直

杓直に贈る

世路重祿位。栖栖者孔宣。

世路祿位を重んず、栖栖たる者は孔宣。

人情愛年壽。天死者顏淵。

人情年壽を愛す、天死する者は顏淵。

二人如何人。不奈命與天。

二人は如何なる人ぞ、命と天とを奈んともせず。

我今信多幸。撫己愧前賢。

我今信に幸多し、己を撫して前賢に愧づ。

已年四十四。又爲五品官。

已に年四十四、又五品の官と爲る。

況茲知足外。別有所安焉。

況んや茲足るを知るの外、別に安んずる所有り。

早年以身代。直赴逍遙篇。

早年には身代を以て、直に逍遙の篇に赴く。

近歲將心地。廻向南宗禪。

近歲には心地を將つて、廻つて南宗の禪に向ふ。

外順世間法。內脫區中緣。

外は世間の法に順ひ、内は區中の緣を脱す。

進不厭朝市。退不戀人寰。

進んで朝市を厭はず、退いて人寰を戀はず。

自吾得此心。投足無不安。

吾此心を得てより、足を投じて安んぜざる無し。

體非道引適。意無江湖閒。

體は道引に非ずして適ひ、意は江湖無くして閒なり。

有興或飲酒。無事多掩關。

興有れば或は酒を飲み、事無ければ多く關を掩ふ。

寂靜夜深坐。安穩日高眠。

寂靜にして夜深けて坐し、安穩にして日高けて眠る。

秋不苦長夜。春不惜流年。

秋は長夜を苦まず、春は流年を惜まず。

委形老小外。忘懷生死間。

形を老小の外に委し、懷を生死の間に忘る。

昨日共君語。與余心膺然。

昨日君と共に語り、余と心膺のごとく然り。

此道不可道。因君聊強言。

此道道ふ可からず、君に因りて聊か強ひて言ふ。

【字解】

【一】 栖栖 遑遑に同じ、東奔西走して忙しき貌。論語に、丘何爲是栖栖者。與云云とある。孔宣は孔子なり、孔子は開元二十七年に文宣王と追諡せられた。【二】 五品 五位なり。【三】 身代 身世に同じ。【四】 逍遙篇 莊子に逍遙遊篇あり。【五】 心地 心をいふ。【六】 南宗禪 禪宗は五祖より後分れて南北二宗となる。南頓北漸の別あり。【七】 區中 俗世間。【八】 道引 按摩の如き術。【九】 流年 歲月の流るるが如きをいふ。【一〇】 心膺 膺は背なり。書經君牙篇に股肱心膺とある。

【題義】

李杓直（卷七に秋日懷杓直と題する詩がある）に贈つて己の興懷を述べた詩である。

【詩意】

世間の人は皆祿位を重んずる。所が孔子は祿位を得ず栖栖として東西に奔走した。人情は長

命を好む。所が顔淵（孔子の弟子、名は回）は天死してしまつた。孔子も顔淵も天命なれば如何ともすることが出来なかつたのである。然るに余は何の幸か、前賢に劣る身でありながら、已に四十四まで長生きして且つ五品の官にもなつた。そして唯足るを知るばかりでなく、別に心に安んずる所もある。年少い時から身を以て逍遙遊篇の旨意に叶はんことを期し、近頃は心を以て南宗の禪に向け、外は世間の習俗に順つてゐるが、心は俗縁を超越し、進んで朝市を厭はず、退いて世間を戀はざる境地に達した。既に此悟を得てからは、一舉一動安んぜざる所はない。されば道引に依らずとも體胖に、江湖に居なくとも心が穩である。興が湧けば酒を飲み、閑居して門を出でず、夜のふけるまで靜に坐し、日の高くなるまで安眠し、秋は夜の長きを厭はず。春は日の過ぎ易きを惜まず、老小生死の界を超越してゐる。昨日君と語り合つて見た所に據れば、君の考も全く余と符節を合せたやうに一致する。この道は言葉に現すことは出来ないが、君の爲に強ひて言つて見たのである。

寄張十八

張十八に寄す

飢止一簞食。渴止一壺漿。

飢ゑては一簞の食に止まり、渴しては一壺の漿に止まる。

出入止一馬。寢興止一牀。

出入は一馬に止まり、寢興は一牀に止まる。

此外無長物。於我有若亡。

此外長物無し、我に於いて有れども亡きが若し。

胡然不知足。名利心違違。

胡ぞ然く足るを知らず、名利に心違違たる。

念茲彌懶放。積習遂爲常。

茲を念うて彌懶放し、積習遂に常と爲る。

經旬不出門。竟日不下堂。

旬を經れども門を出でず、竟日堂を下らず。

同病者張生。貧僻住延康。

病を同じうする者は張生なり、貧僻にして延康に住す。

慵中每相憶。此意未能忘。

慵中毎に相憶ふ、此の意未だ忘るる能はず。

迢迢青槐街。相去八九坊。

迢迢たる青槐の街、相去ること八九坊。

秋來未相見。應有新詩章。

秋來未だ相見ず、應に新詩章有るべし。

早晚來同宿。天氣轉清涼。

早晚來りて宿を同じうせよ、天氣轉た清涼なり。

【字解】【一】一簞食。一かこの飯。【二】寢興。れると、おきると。【三】長物。餘計な物。【四】違違。あくせくと奔走すること。【五】竟日。終日。【六】延康。長安の里の名。【七】慵中。ものうい時。【八】迢迢。遙なる貌。青槐は街路樹なり。【九】坊。町なり。【一〇】早晚。早く。

【題義】張十八に寄せて來宿を促した詩である。

【詩意】飢を醫するには一簞の飯を食ひ、渴を療するには一壺の漿を飲み、出入には一匹の馬に乗り、

寢るには一個の寢臺を用ひる。この外には餘計な物は何も無い。我に取つては有つても無いと同じである(別に必要を感じないから)。世間の人はなせ足ることを知らないのであらうか、名利の爲に常に東奔西走してゐる。吾は之を念うて愈放埒になり、それが習慣になつて、十日間も門を出ず、終日堂を下らない。張君も余と病癖を同うする人で延康里に貧居してゐる。自分は常に君を憶うて忘れることが出来ない。槐の竝木を隔てること八九坊ではあるが、秋になつてからまだ逢はないけれども、多分新作の詩も出來てゐるであらうから早く宿りがけに來るがよい。天氣も清涼であるから。

題玉泉寺

玉泉寺に題す

湛湛玉泉色。悠悠浮雲身。

湛湛たる玉泉の色、悠悠たる浮雲の身。

閒心對定水。清淨兩無塵。

閒心定水に對す、清淨にして兩ながら塵無し。

手把青筇杖。頭戴白綸巾。

手に青筇の杖を把り、頭に白綸の巾を戴く。

興盡下山去。知我是誰人。

興盡きて山を下り去る、知る我は是れ誰人ぞ。

【字解】【一】湛湛。水の平なる貌。【二】悠悠。閑暇の貌。【三】青筇竹。青い竹の杖。【四】白綸巾。白い綸子で作つた頭巾。【五】知。不知の意。

【題義】玉泉寺の壁に題した詩である。

【詩意】此寺の境内には湛湛として靜に湛へた玉泉がある。此泉に對して立つ我は、悠悠として浮雲の如き無心無欲の人である。この閒心と靜水とは共に清淨無垢である。手に青い竹の杖を持ち、頭に白い綸子の頭巾をかぶつて、飽くまで境内を漫歩し、興が盡きれば山を下つて歸る。その時は殆ど己の何人であるかをも忘れてしまふ。

朝回遊城南

朝より回りにて城南に遊ぶ

朝退馬未困。秋初日猶長。

朝より退いて馬未だ困まず、秋初日猶ほ長し。

回轡城南去。郊野正清涼。

轡を回して城南に去れば、郊野正に清涼。

水竹夾小徑。縈廻繞川崗。

水竹小徑を夾み、縈廻して川崗を繞る。

仰看晚山色。俯弄秋泉光。

仰いで晚山の色を看、俯して秋泉の光を弄す。

青松繫我馬。白石爲我牀。

青松に我が馬を繫ぎ、白石を我が牀と爲す。

常時簪組累。此日和身忘。

常時簪組の累、此日身に和して忘る。

且隨鷓鷯末。暮遊鷓鷯傍。

且に鷓鷯の末に隨ひ、暮に鷓鷯の傍に遊ぶ。

機心一以盡。兩處不亂行。

機心一に以て盡き、兩處行を亂さず。

誰辨心與跡。非行亦非藏。

誰か心と跡とを辨せん、行に非ず亦藏に非ず。

【字解】【一】簪組 簪は冠をとめるカンザシ。組は印綬。官職に喩ふ。【二】和身 身と併せて。【三】鷓鷯 朝官の行列をいふ。鷓と鷯との整齊にして序あるが如くなる故。【四】機心 巧詐の心。莊子天地篇に、機事ある者は必ず機心ありとある。【五】心與跡 跡は行事なり。【六】非行亦非藏 行は出でて道を行ふこと、藏は退いて隠るること。論語に「之ヲ用フレバ則チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ藏ル」とある。

【題義】朝廷を退出してから城南に遊びに行つたことを述べた詩である。

【詩意】朝廷から退けて來てもまだ馬が疲れてもゐず、秋の初でまだ日も長いので、手綱を回して城南にでかけたが、野邊の景色が如何にも清涼である。近くには小流や竹林が小徑を夾み崗を繞つてゐるのを見、遠くは仰いで山の夕景色を看、俯して秋泉の光を賞し、青松に馬を繫ぎ白石に腰を下して休息してゐると、平生の宦情も我が身の累も忘れてしまつた。かくて朝には官列に加はつて鷓鷯と伍を成し、夕には此處に來て鷓鷯と遊び、巧詐の心が全く盡きて官吏としても野人としても其行を亂さない。誰か吾が心跡を辨知するであらう。吾が心跡は即ち行にもあらず亦藏にもあらず、行藏を超越したものである。

白樂天詩集 卷七

閒適三 古調詩凡六十一首

舟行江州路上作

自此後詩、爲江州司馬時作。

舟行、江州路上の作 此より後の詩は、江州司馬たりし時作る

帆影日漸高。閑眠猶未起。

帆影日漸く高く、閑眠猶未だ起きず。

起問鼓柁人。已行三十里。

起きて柁を鼓する人に問へば、已に行くこと三十里。

船頭有行竈。炊稻烹紅鯉。

船頭行竈有り、稻を炊ぎて紅鯉を烹る。

飽食起婆婆。盥漱秋江水。

飽食起つて婆婆、盥漱す秋江の水。

平生滄浪意。一旦來遊此。

平生滄浪の意、一旦來りて此に遊ぶ。

何況不失家。舟中載妻子。

何況んや家を失はず、舟中妻子を載するをや。

閒適 舟行江州路上作

【字解】【一】鼓棹 舟をこぐ。【二】船頭 舟のへさき。【三】行竈 自由に持ちあるくことの出来る竈。【四】婆娑 舞ふ貌。【五】盥漱 手を洗ひ、口をすすぐ。【六】滄浪 川の名、漢水ともいふ。楚辭漁父篇に、漁父莞爾而笑、鼓枻而去、歌曰、滄浪之水清兮、可三以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可三以濯吾足、云々とある。

【題義】 貶謫せられて江州（江西省潯陽郡）に行く舟中の作である。唐宋詩醇に、遷謫せられて遠行するの、絶えて憂愁不平の語を吐かないのは見地が高いとほめてゐる。

【詩意】 舟の中に寝て日が高くなるまで起きずにゐた。起きて船頭に聞いて見ると己に三十里も走つたとの事である。舳の方に持ち運びの出来る竈があつて、飯をたいたり鯉を烹たりしてゐる。食事が終つてから立ちさまようて、川の水で手を洗ひ口を漱いだ。平生浮世をよそに舟遊びでもしたいと思つてゐたが、一旦此に遊んで宿志を果すことが出来た。まして一家眷族相率ゐて舟中に在るのは誠に愉快である。

潯陽早冬

潯陽の早冬

潯陽孟冬月。草木未全衰。

潯陽孟冬の月、草木未だ全く衰へず。

祗抵長安陌。涼風八月時。

祗に抵る長安の陌、涼風八月の時。

日西溢水曲。獨行吟舊詩。

日は西す溢水の曲、獨行して舊詩を吟ず。

蓼花始零落。蒲葉稍離披。

蓼花始めて零落し、蒲葉稍離披す。

但作城中想。何異曲江池。

但城中の想を作す、何ぞ曲江の池に異ならんや。

【字解】【一】溢浦 溢水といふ川が長江に入る處、江西省九江縣の西に在る。【二】潯陽 郡の名。江州なり。孟冬は初冬。【三】長安 唐の都。陝西省に在る。陌は巷なり。【四】離披 ひらき盡すこと。【五】曲江 長安に在る池の名。白樂天は、もと其近所に住んでゐた。

【題義】 潯浦の邊の初冬の景を述べた詩である。

【詩意】 潯陽郡では初冬でも草木が未だ全く凋衰しない。丁度長安の涼風八月頃に相當してゐる。日の西に傾いた時、溢水の邊を舊詩を吟じながら獨り歩いてゐると、蓼の花は落ち蒲の葉は開き、とどりの風情がある。だから此處に居れば長安の曲江の邊に居ると少しも變りはない。

江州雪

江州の雪

新雪滿前山。初晴好天氣。

新雪前山に滿ち、初めて晴れて天氣好し。

日西騎馬出。忽有京都意。

日西にして馬に騎りて出づれば、忽ち京都の意有り。

城柳方綴花。簷冰纔結穗。

城柳方に花を綴り、簷氷纔に穗を結ぶ。

閒適 潯陽早冬 江州雪

須臾風日暖。處處皆飄墜。須臾にして風日暖かに、處處皆飄墜す。
 行吟賞未足。坐歎銷何易。行吟賞未だ足らず、坐歎銷何ぞ易き。
 猶勝嶺南看。雰雰不到地。猶ほ嶺南の看に勝れり、雰雰として地に到らず。

【字解】【一】嶺南。五嶺（大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽をいふ）の南の地方。【二】雰雰。雪の降る貌。

【題義】江州の雪景を述べた詩である。

【詩意】前方の山に一面に雪が積つて、しかも好晴の天気になった。因つて日の西に傾く頃馬に乗つて雪見に出かけ、ふと長安にゐるやうな氣持がした。柳は皆白い花を綴り、氷柱は穂のやうに垂れてゐたが、須臾して暖になると、處處はげて來た。まだ十分賞翫しないうちに銷えてしまふのは惜いが、併し嶺南地方のやうに、チラチラ降つても地に届かないうちに消えてしまふよりは勝つてゐる。

題潯陽樓

潯陽樓に題す

常愛陶彭澤。文思何高玄。常に愛す陶彭澤、文思何ぞ高玄なる。
 又怪韋江州。詩情亦清閑。又怪む韋江州、詩情亦清閑。

今朝登此樓。有以知其然。今朝此樓に登り、以て其の然るを知る有り。
 大江寒見底。匡山青倚天。大江寒くして底を見し、匡山青くして天に倚る。
 深夜溢浦月。平旦鑑峯煙。深夜溢浦の月、平旦鑑峯の煙。
 清輝與靈氣。日夕供文篇。清輝と靈氣と、日夕文篇に供ふ。
 我無二人才。孰爲來其間。我二人の才無し、孰爲ぞ其間に來る。
 因高偶成句。俯仰愧江山。高きに因りて偶句を成し、俯仰して江山に愧づ。

【字解】【一】陶彭澤。陶淵明をいふ。淵明は今の江西省潯陽道彭澤縣の縣令になつたから。【二】文思。詩情なり。【三】韋江州。韋應物をいふ。韋應物は建中三年比部員外郎に拜せられ、出されて滁州刺史となり、久うして江州に調せられ、貞元中蘇州刺史となつた。故に普通に韋蘇州といふ。【四】大江。揚子江。【五】匡山。廬山なり。【六】溢浦。前の溢浦早冬に見ゆ。【七】鑑峯。廬山の香鑪峯。

【題義】潯陽樓の壁に題した詩である。

【詩意】自分は常に陶淵明の詩の高玄の風あるを愛し、又韋應物の詩の清閑の趣あるを賞する者であるが、今朝この樓に登つて見て、二人の詩の妙は江山の助に由るものであることを知つた。長江は澄んで底までも見え、廬山は青く天上に聳え、深夜には溢浦の月の賞すべきあり、平旦には香鑪峯の煙

の縷縷たるあり、その清き光と靈氣とは朝に夕に詩料を提供してゐる。さて自分は二人の才力がないから、ここに來ても何の益もない。高樓に登つて此詩を作つては見たが、誠に江山に對して愧ぢざるを得ない。

【餘論】白樂天が陶淵明や韋應物に私淑してゐたことは卷六の自吟二拙什一因有所懷の所で述べたとほりである。

訪陶公舊宅 并序

陶公の舊宅を訪ふ 并に序

予夙慕陶淵明爲人。往歲涓上閑居。嘗有效陶體詩十六首。今遊廬山。經柴桑。過栗里。思其人。訪其宅。不能默默。又題此詩云。

【訓讀】予夙に陶淵明の人と爲りを慕ふ。往歲涓上に閑居せしとき、嘗て陶が體に效ふ詩十六首有り。今廬山に遊び、柴桑を經、栗里を過ぎ、其人を思つて、其宅を訪ひ、默默たる能はず。又此詩を題すと云ふ。

垢塵不汚玉。靈鳳不啄羶。

嗚呼陶靖節。生彼晉宋間。

心實有所守。口終不能言。

永惟孤竹子。拂衣首陽山。

夷齊各一身。窮餓未爲難。

先生有五男。與之同飢寒。

腸中食不充。身上衣不完。

連徵竟不起。斯可謂眞賢。

我生君之後。相去五百年。

每讀五柳傳。目想心拳拳。

昔嘗詠遺風。著爲十六篇。

今來訪故宅。森若君在前。

不慕樽有酒。不慕琴無絃。

慕君遺榮利。老死此丘園。

柴桑古村落。栗里舊山川。

不見籬下菊。但餘墟中煙。籬下の菊を見ず、但墟中の煙を餘す。
 子孫雖無聞。族氏猶未遷。子孫聞ゆる無しと雖も、族氏猶ほ未だ遷らず。
 每逢姓陶人。使我心依然。陶を姓とする人に逢ふ毎に、我をして心依然たらしむ。

【字解】【一】渭上。渭水のほとり。【二】柴桑。縣名。陶淵明此に家す。【三】栗里。淵明の故居のあつた處。【四】種。履き物。【五】陶靖節。世人陶淵明を稱して靖節先生といふ。【六】孤竹。國の名。伯夷・叔齊は孤竹君の子である。【七】五柳傳。陶淵明の宅邊に五柳樹あり。因つて自ら五柳先生傳を作る。【八】拳拳。奉持して忘れないこと。【九】依然。思慕する貌。

【題義】陶淵明の舊宅を訪ひ、其の人と爲りを慕つて作つた詩である。

【詩意】塵垢は玉を汚すことは出來ず、鳳鳥は腥い物などは食はない。彼の陶先生は晉宋篡奪の世に生れ、口にくそ言はなかつたが心には晉室に對して臣節を持し、常に孤竹君の子なる伯夷・叔齊が、殷を滅した周室に仕へずして首陽山に隠れたことを慕つてゐた。伯夷・叔齊は各一人者であつたから、困窮餓死するも、まだ大層難い事では無い。先生には五人の男子があつて、皆飢寒を俱にし、連に天子の徵召を蒙つたが竟に出でて仕へなかつたのは、實に難い事で、眞の賢者と謂ふべきである。我は先生に後ること五百年に生れ、五柳先生傳を讀む毎に目に想ひ心に慕つてゐる。嚮に其遺風を詠じて十六篇の詩を作つたが、今その舊宅を訪へば、先生が儼然として吾が前に立つてゐるやうに思ふ。

樽に酒のあること。琴に絃のないことなどは慕はないが、(淵明の歸去來辭に、有酒盈樽とあり、又昭明太子の陶潛傳に、淵明不解音律、而蓄無絃琴一張、每酒適輒撫弄以寄其意とある)先生の榮利を遺れて此地に老死したのを慕つてゐる。今柴桑や栗里の跡を訪へば、籬の菊は見えないが(淵明の飲酒二十首に採菊東籬下、悠然見南山とある)墟中の煙は今も残つてゐる(淵明の歸園田居に、曖曖遠人村、依依墟里煙とある)。子孫は名聲は高くないが、遺族は今も此地に住んでゐるので、陶といふ姓の人に逢ふ毎に、何となく思慕の情に堪へない。

北亭

北亭

廬宮山下州。溢浦沙邊宅。廬宮山下の州、溢浦沙邊の宅。
 宅北倚高岡。迢迢數千尺。宅北高岡に倚る、迢迢たり數千尺。
 上有青青竹。竹間多白石。上に青青たる竹有り、竹間に白石多し。
 茅亭居上頭。豁達門四闕。茅亭上頭に居る、豁達門四に闕く。
 前楹捲簾箔。北牖施牀席。前楹に簾箔を捲き、北牖に牀席を施す。

江風萬里來。吹我涼淅淅。

江風萬里より來り、我を吹いて涼淅淅たり。

日高公府歸。巾笏隨手擲。

日高くして公府より歸り、巾笏手に隨つて擲つ。

脫衣恣搔首。坐臥任所適。

衣を脱いで搔首を恣にし、坐臥適する所に任す。

時傾一盃酒。曠望湖天夕。

時に一盃の酒を傾け、曠しく湖天の夕を望む。

口詠獨酌謠。目送歸飛翮。

口に獨酌の謠を詠じ、目に歸飛の翮を送る。

慙無出塵操。未免折腰役。

慙づらくは出塵の操無く、未だ腰を折る役を免れざるを。

偶獲此閑居。謬似高人跡。

偶此閑居を獲、謬つて高人の跡に似たり。

【字解】【一】廬宮山 廬山記によれば、周の威王の時匡俗廬君あり。此山に居る。因つて廬山といふ。【二】溢浦 前の溢浦早冬を見よ。【三】迢迢 高き貌。【四】上頭 頂上。【五】豁達 ほからかに開く。【六】簾箔 すだれ。【七】北牖 北の窓。【八】浙浙 風の聲。【九】公府 役所。【一〇】巾笏 冠やシヤク。【一一】搔首 髪を搔く。【一二】湖天 湖と天と相接すること。湖は鄱陽湖なり。【一三】出塵操 脱俗の心。【一四】折腰 膝を屈して服従すること。【一五】高人 心を高尚にして仕へざる者の稱。

【題義】江州司馬として北亭に坐臥する興趣を述べた詩である。

【詩意】廬山の下、溢浦の邊に我が宅がある。宅の北は數千尺も高い岡に倚つてゐる。岡の上には青

い竹が生えてゐて、竹の間には白い石が多くある。頂上に茅屋があつて四方に門が開けてゐる。前の楹には簾を捲きあげ北の牖には寢臺を設けてある。江風が萬里のさきから吹いて來て非常に涼しい。余は日のまだ高いうちに役所から歸り、冠も笏もなげすて、著物を脱ぎ髪を搔いて、心の欲する儘に任せて坐臥し、一杯の酒を傾けて遙に湖天の夕景色を眺め、詩などを吟じながら飛鳥の時に歸るのを見送つて楽しんでゐる。未だ俗塵を超脱することが出來ず、腰を折つて上官に事へざるを得ない身ではあるが、偶此閑居を得たので、やや高士の倅を具へてゐるやうにも見える。

泛溢水

溢水に泛ぶ

四月未全熟。麥涼江氣秋。

四月未だ全く熟からず、麥は涼し江氣の秋。

湖山處處好。最愛溢水頭。

湖山處處好し、最も愛す溢水の頭。

溢水從東來。一派入江流。

溢水東より來り、一派江に入りて流る。

可憐似縈帶。中有隨風舟。

可憐む可し縈帶に似たるを、中に風に隨ふ舟有り。

命酒一臨泛。捨鞍揚棹謳。

酒を命じて一たび臨み泛べ、鞍を捨てて棹謳を揚ぐ。

放廻岸傍馬。去逐波間鷗。

岸傍の馬を放廻し、波間の鷗を去逐す。

煙浪始渺渺。風襟亦悠悠。

煙浪始めて渺渺、風襟亦悠悠。

初疑上河漢。中若尋瀛洲。

初河漢に上るかと思ひ、中ごろ瀛洲を尋ぬるが若し。

汀樹綠拂地。沙草芳未休。

汀樹綠地を拂ひ、沙草芳未だ休まず。

青蘿與紫葛。枝蔓垂相樛。

青蘿と紫葛と、枝蔓垂れて相樛まる。

繫纜步平岸。回頭望江州。

纜を繫いで平岸に歩し、頭を回らして江州を望む。

城雉映水見。隱隱如蜃樓。

城雉水に映じて見え、隱隱として蜃樓の如し。

日入意未盡。將歸復少留。

日入れども意未だ盡きず、將に歸らんとして復少らく

到官行半歲。今日方一遊。

官に到りて行くゆく半歲、今日方に一遊す。留まる。

此地來何暮。可以寫吾憂。

此地來ること何ぞ暮き、以て吾が憂を寫く可し。

【字解】一 溢水 川の名、源は江西省瑞昌縣の清溢山より出で、東流して九江縣城の下を經、又北流して大江に入る。二 江氣 一に江風に作る。夢は初夏に熟する故、陰曆四月を麥秋といふ。三 榮帶 腰をめぐる帶。四 棹謳 舟をこぐ人の歌。五 渺渺 ひろびろしてゐる貌。六 悠悠 心のびのびする貌。七 河漢 あまのがは。八 瀛洲 東海中の仙山。九 城雉 城の石垣。一〇 隱隱 分明ならざる貌。蜃樓は蜃氣樓。

【題義】 溢水に舟を泛べて遊んだことを述べた詩である。

【詩意】 四月麥秋の頃は熱からず寒からず、湖を見ても山を見ても、よい景色であるが、余は最も溢水の邊の景色を好む。溢水は東から流れて來て長江に注ぐ川で、帶のやうにめぐり、中に舟が風のまにまに漂つてゐるのもよい。因つて酒を命じて舟を泛べ、馬を捨てて漕ぎ出した。煙の如き浪路が渺渺として廣く、襟を撫でて吹く風も心地よい。初めは天河を上るかと思はれ、中ごろは仙境に遊ぶかと思はれた。岸に近づけば汀の樹は地を拂つて綠に、沙洲の草は香氣を放ち、青い蘿や紫の葛が蔓を垂れて茂つてゐる。纜を繫いで平な岸を歩き、頭を回らして江州を見ると、城の石垣が水にうつつて蜃氣樓のやうに、ぼんやりと見え、日が暮れても歸る氣になれない。余は江州司馬になつて此地に來てから、やがて半年になるが、今日始めて溢水に遊んだ。かくも吾が憂を齎らすことが出来るならば、もつと早く來ればよかつた。

故人對酒歎。歎我在天涯。

答故人

故人に答ふ

故人酒に對して歎ず、我が天涯に在るを歎ず。

故人酒に對して歎ず、我が天涯に在るを歎ず。

見我昔榮遇。念我今蹉跎。

我が昔の榮遇を見、我が今の蹉跎たるを念ふ。

問我爲司馬。官意復如何。

問ふ我れ司馬と爲りて、官意復如何と。

答云且勿歎。聽我爲君歌。

答へて云ふ且く歎する勿れ、我が君が爲めに歌ふを聽け、

我本蓬華人。鄙賤劇泥沙。

我は本蓬華の人、鄙賤泥沙よりも劇し。

讀書未百卷。信口嘲風花。

書を讀んで未だ百卷ならざるに、口に信じて風花を嘲る。

自從筮仕來。六命三登科。

筮仕してより來、六たび命せられ三たび登科す。

顧慙虛劣姿。所得亦已多。

顧みて慙つ虚劣の姿、得る所亦已に多し。

散員足庇身。薄俸可資家。

散員も身を庇ふに足り、薄俸も家を資く可し。

省分輒自愧。豈爲不遇耶。

分を省みて輒ち自ら愧づ、豈に不遇と爲さん耶。

煩君對杯酒。爲我一咨嗟。

煩はす君が杯酒に對し、我が爲に一たび咨嗟するを。

【字解】【一】故人 舊友。【二】蹉跎 つまづくこと。江州司馬に貶せられたことないふ。【三】蓬華 蓬戸華門、貧賤の人の居る所。【四】筮仕 初めて仕ふること。【五】六命 六たび君命を受くること。登科は試験に及第すること。【六】散員 閑散な官員。【七】咨嗟 嘆息する。

【題義】ある舊友が白樂天の江州司馬に貶せられたことを嘆いたのに答へた詩である。

【詩意】友人が酒を酌みながら我が天涯萬里の江州に貶せられたことを嘆き、司馬になつた心持はどうだと弔問の詞を寄せた。余は詩を以て此に答へよう。我はもと貧賤の身である。書を讀むこと百卷

に足らぬ淺學でありながら、口に任せて花鳥風月を嘲弄し、官に就いてから以來、六たび君命を辱うし三たび及第の榮譽を荷つた。謫劣の身に取つては實に分外の利得と謂はねばならない。たとひ閑散の職にもせよ身を庇ふに足り、俸祿は薄くとも家の資となすに足りる。司馬となつてゐることは分に過ぎた幸福と思つてゐるので、決して不遇とは思つてゐない。君が折角の酒興を妨げて、我が爲に嘆いてくれたことは感謝に堪へない。

官舍内新鑿小池

官舍の内、新に小池を鑿つ

簾下開小池。盈盈水方積。

簾下に小池を開く、盈盈として水方に積る。

中底鋪白沙。四隅甃青石。

中底に白沙を鋪き、四隅に青石を甃む。

勿言不深廣。但取幽人適。

言ふ勿れ深廣ならずと、但幽人の適を取る。

泛灑微雨朝。泓澄明月夕。

泛灑たり微雨の朝、泓澄たり明月の夕。

豈無大江水。波浪連天白。

豈に大江の水無からんや、波浪天に連りて白し。

未如牀席間。方丈深盈尺。

未だ如かず牀席の間、方丈深さ尺に盈つるに。

清淺可_レ狎弄。昏煩聊_レ漱滌。最_レ愛曉暝時。一片秋天碧。清淺狎弄す可く、昏煩聊か漱滌す。最も愛す曉暝の時、一片秋天碧なり。

【字解】【一】盈盈。清淺の貌。【二】泛濫。水波の上に及ぶ貌。【三】泓澄。水の清き貌。【四】方丈。一丈四方。【五】曉暝。朝暮。

【題義】官舎内に小池を鑿つたことを述べた詩である。

【詩意】簾の下に小池を鑿ち、なみなみと水を湛へた。底には白沙を敷き、四方の隅には青石を疊んだ。深廣とはいへないが幽人の心を慰むるには十分である。微雨の降りそそぐ時の小波の風情、明月の夜の澄み切つた様も面白い。大江の水の波浪天を打つのもわるくはないが、この臥牀の前の一丈四方の小池の趣には及ぶまい。この小池の水は清淺で手に抱み弄ぶことも出来れば、心身の煩累を濯ふことも出来る。殊に朝晩の秋の空のやうに碧色を湛へた趣は最も愛すべきものである。

宿簡寂觀

簡寂觀に宿す

巖白雲尙屯。林紅葉初隕。秋光引閒歩。不知行遠近。巖白くして雲尙ほ屯り、林紅にして葉初めて隕つ。秋光閒歩を引き、行の遠近を知らず。

夕投_二靈洞_一宿。臥覺塵機_レ泯。名利心既忘。市朝夢亦盡。暫來尙如此。況乃終身隱。何以療_二夜飢_一。一匙雲母粉。夕に靈洞に投じて宿し、臥して塵機の泯ぶるを覺ゆ。名利は心既に忘れ、市朝は夢亦盡く。暫く來るも尙ほ此の如し、況んや乃ち身を終るまで隱。何を以てか夜の飢を療さん、一匙雲母の粉。

【字解】【一】簡寂觀。道觀(道教の寺)の名。【二】靈洞。道觀をいふ。【三】塵機。塵俗の心。【四】一匙。ひとさじ。雲母粉は仙藥の名。

【題義】簡寂觀といふ道觀に宿つたことを述べた詩である。

【詩意】巖頭に白雲が集まり紅葉がちらほら散る秋の風情が自然と吾が閒歩を引き、道の遠きをも忘れしめた。夕に簡寂觀に投宿したが、忽ち俗氣が消滅したやうに感じ、心に名利を忘れ、夢に市朝を見なかつた。暫く來てさへ此の通りだから、終身ここに隱居してゐたらば如何ばかり高潔の身になるであらう。さて夜中になると一匙の雲母粉を以て飢を醫するのであるから、それも其筈である。

讀謝靈運詩

謝靈運の詩を讀む

吾聞達士道。窮通順_二冥數_一。吾聞く達士の道は、窮通冥數に順ふ。

閒適 宿簡寂觀 讀謝靈運詩

通乃朝廷來。窮即江湖去。

通じては乃ち朝廷に來り、窮しては即ち江湖に去る。

謝公才廓落。與世不相遇。

謝公才廓落として、世と相遇はず。

壯志鬱不用。須有所洩處。

壯志鬱して用ひず、須く洩らす所の處有るべし。

洩爲山水詩。逸韻諧奇趣。

洩らして山水の詩を爲る、逸韻奇趣に諧ふ。

大必籠天海。細不遺草樹。

大にしては必ず天海を籠め、細にしては草樹を遺さず。

豈惟翫景物。亦欲攄心素。

豈に惟景物を翫ぶのみならんや、亦心素を攄べんと欲す。

往往即事中。未能忘興諭。

往往事中に即き、未だ興諭を忘る能はず。

因知康樂作。不獨在章句。

因つて知る康樂の作、獨り章句に在るのみならざることを。

【字解】

【一】達士 事理に通達した人。【二】冥敷 天命なり。冥冥として測知すべからず。故にいふ。【三】廓落 廣大の貌。

【題義】

謝靈運の詩を讀んで所感を述べた詩である。

【詩意】

達人は窮通を天命に委し、通じては朝廷に升つて天下に號令し、窮しては江湖に去つて風月を樂む者であるが、謝靈運は廣大の才を抱いて、而も不遇であつた。空しく胸中に鬱積して用ひな

つた所の壯志が發して山水の詩となり、皆自然の奇趣に諧ひ、大は天海をも籠め、小は草木をも遺さなかつた。然も唯自然の景物を寫すのみならず、己の本心をも述べて、事に就いて興諭することを忘れなかつた。されば彼の作は唯獨り文字章句の末に於てすぐれてゐるばかりではない。

北亭獨宿

北亭の獨宿

悄悄壁下床。紗籠耿殘燭。

悄悄たる壁下の床、紗籠殘燭耿なり。

夜半獨眠覺。疑在僧房宿。

夜半獨り眠り覺め、疑ふらくは僧房に在りて宿するかと。

【字解】

【一】悄悄 靜な貌。【二】紗籠 紗のきれを張つた行燈。【三】僧房 寺院。

【題義】

例の北亭に獨り宿した時の詩である。

【詩意】

靜な壁の下の寢臺に臥してゐると、紗のきれで張つた雪洞が特に明るく見える。夜中に目が覺めて、寺にでも寝てゐるやうに思はれた。

約心

心に約す

黑鬢絲雪侵。青袍塵土澆。

黑鬢絲雪侵し、青袍塵土澆す。

閒適 北亭獨宿 約心

兀兀復騰騰。江城一上佐。

兀兀復た騰騰、江城一たび佐に上る。

朝就高齋上。薰然負暄臥。

朝には高齋の上に就き、薰然として暄を負うて臥す。

晚下小池前。澹然臨水坐。

晚には小池の前に下り、澹然として水に臨んで坐す。

已約終身心。長如今日過。

已に終身の心に約す、長く今日の如く過さんと。

【字解】【一】絲雪。しらが。【二】青袍。司馬の服。【三】兀兀。動かざる貌。騰騰は盛なる貌。【四】佐。刺史を輔佐する役。司馬。【五】負暄。ひなたぼっこ。【六】澹然。安靜の意。

【題義】自ら心に約束したことを述べた詩。

【詩意】黒い鬢の毛が段段白くなり、青い袍も塵によれた。併しあつばれ江州司馬として自ら收りかへつてゐる。朝には晴れやかな書齋を擇んで、ひなたぼっこをして臥し、暮には小池の前におり立つて、水に對して心を鎮める。永く吾が心に約し、今日のやうにして一生を終らうと決定した。

晚望

晚望

江城寒角動。沙洲夕鳥還。

江城寒角動き、沙洲夕鳥還る。

獨坐高亭上。西南望遠山。

獨り高亭の上に坐し、西南遠山を望む。

【字解】【一】江城。江邊の町。江州を指す。角は軍中で吹く笛。

【題義】江邊の城下には寒空に角聲が響きわたり、沙濱には時に歸る鳥が飛んでゐる。自分は獨り高亭の上に坐して、西南に連る遠山を飽かず眺めた。

早春

早春

雪消氷又釋。景和風復暄。

雪消えて氷又釋け、景和して風復暄かなり。

滿庭田地濕。薺葉生牆根。

滿庭田地濕ひ、薺葉牆根に生ず。

官舍悄無事。日西斜掩門。

官舎は悄として事無く、日西にして斜に門を掩ふ。

不開莊老卷。欲與何人言。

莊老の卷を開かずんば、何人と言はんと欲する。

【字解】【一】悄。靜かなる貌。【二】莊老。莊子、老子。

【題義】初春の光景情趣を述べた詩である。

【詩意】雪も氷も既に解け、景色も和らぎ風も暖かである。庭は一面に濕つて薺の芽が垣根に生えた。自分は官舎に閑居し、夕陽に對して獨坐してゐる。老子や莊子でも讀むより外には、物言ふ相手もない。

春寢

春 寢

何處春暄來。微和生血氣。何處よりか春暄來り、微和血氣に生ず。
 氣薰肌骨暢。東窗一昏睡。氣薰じ肌骨暢び、東窗一たび昏睡す。
 是時正月晦。假日無公事。是時正月晦、假日公事無し。
 爛熳不能休。自午將及未。爛熳として休する能はず、午より將に未に及ばんとす。
 緬思少健日。甘寢常自恣。緬に思ふ少健の日、甘寢常に自ら恣にす。
 一從衰疾來。枕上無此味。一たび衰疾してより來、枕上此味無し。

【字解】【一】春暄。春の暖かさ。【二】假日。休暇の日。【三】爛熳。熟眠の貌。【四】甘寢。快よく眠ること。

【題義】春の暖かい日に晝寢をしたことを述べた詩である。

【詩意】春の暖かさが何處からともなくやつて來て、血氣が自然と調和を得たやうに感じ、氣も骨ものびのびとして、東の窓の下に睡つてしまつた。丁度正月の晦で、休暇で役向の仕事もない所から、午頃から未の刻(午後二時)まで前後不覺に熟睡した。今から思へば、年の少い達者な頃は、いつも愉快に睡つたものであつたが、老衰してから後は、あんな快い睡味は得られない。

睡起晏坐

睡 起 晏 坐

後亭晝眠足。起坐春景暮。後亭晝眠足り、起坐春景暮る。
 新覺眼猶昏。無思心正住。新に覺めて眼猶ほ昏く、思無くして心正に住す。
 淡寂歸一性。虛閑遺萬慮。淡寂一性に歸し、虛閑萬慮を遺る。
 了然此時心。無物可譬喻。了然たる此時の心、物の譬喩す可き無し。
 本は無有鄉。亦名不用處。本は無有の郷、亦不用の處と名く。
 行禪與坐忘。同歸無異路。行禪と坐忘と、歸を同じうして異路無し。

【字解】【一】了然。よく心に悟ること。【二】無有鄉。莊子にある無何有郷に同じ。自註に、道書に無何有の郷といひ、禪經に不用處といふ、二者名を殊にして歸を同うすとある。【三】坐忘。思慮なきこと。莊子に、肢體を墮し聰明を黜け、形を離れ知を去り、大道に同うす。此を坐忘といふとある。

【題義】晝寢の夢が覺めて夕方閑坐してゐる時の感興を述べた詩である。

【詩意】後亭に晝寢して睡が覺め、夕暮の春景に對して坐すれば、眼はまだぼんやりとしてゐるが、心は何の屈託もなく安住し、淡淡として自然の性に復歸し、一切の思慮が消盡した。この時の心持は何物も譬へようがない。或は無何有郷といひ或は不用處といふ。禪定も坐忘も、名こそ違ふが歸趣は

同じである。

詠懷

盡日松下坐。有時池畔行。
行立與坐臥。中懷淡無營。
不覺流年過。亦任白髮生。
不爲世所薄。安得遂閒情。

詠懷
盡日松下に坐し、時有りて池畔に行く。
行立と坐臥と、中懷淡として營み無し。
覺えず流年過ぎ、亦白髮の生ずるに任す。
世の薄んずる所と爲らずんば、安んぞ閒情を遂ぐるこゝ

【字解】【一】盡日 終日。【二】中懷 心の中。【三】流年 歲月の去るのが早いこと。

【題義】胸中の懷を述べた詩である。

【詩意】終日松の樹の下に坐し、或は時に池の畔をさまよふ。行き立つも坐し臥すも、心の中には何等の營みもなく、全く無心で、歲月の移るをも忘れ、白髮の生ずるに任せて暮してゐる。世間から棄てられてゐるからこそ、閒情を遂げることが出来るので、若し世に時めいてゐたら、かくは閒情を遂げることは出来まい。結局世に重んぜられないのが嬉しい。

春遊西林寺

下馬西林寺。翛然進輕策。
朝爲公府吏。暮作靈山客。
二月匡廬北。冰雪始消釋。
陽叢抽茗芽。陰竇洩泉脈。
熙熙風土暖。藹藹雲嵐積。
散作萬壑春。凝爲一氣碧。
身閑易飄泊。官散無牽迫。
緬彼十八人。古今同此適。
是年淮寇起。處處興兵革。
智士勞思謀。戎臣苦征役。
獨有不才者。山中弄泉石。

春西林寺に遊ぶ

春西林寺に遊ぶ
馬より下る西林寺、翛然として輕策を進む。
朝に公府の吏となり、暮に靈山の客と作る。
二月匡廬の北、冰雪始めて消釋す。
陽叢茗芽を抽き、陰竇泉脈を洩らす。
熙熙として風土暖かに、藹藹として雲嵐積る。
散じて萬壑の春と作り、凝りて一氣の碧と爲る。
身閑にして飄泊し易く、官散にして牽迫無し。
緬なる彼の十八人、古今此適を同うす。
是年淮寇起り、處處兵革を興す。
智士は思謀に勞し、戎臣は征役に苦しむ。
獨り不才の者有り、山中に泉石を弄す。

【字解】【一】西林寺 廬山に在る寺の名。【二】脩然 疾く飛ぶ貌。輕策は輕い杖。【三】靈山 廬山を指す。【四】匡廬 廬山は一に匡山ともいふ。【五】陰窻 日かげの小流。【六】熙熙 やはらぐ貌。【七】藹藹 盛なる貌。【八】飄泊 さまよふこと。【九】官散 官職の閑なこと。【一〇】十八人 自註に、昔永達・宗雷等十八賢、同じく西林寺に隱るとある。【一一】淮寇 元和十年、吳元濟淮蔡に據りて反す、十二年、裴度之を平定す。【一二】兵革 戰亂。【一三】戎臣 武臣。【一四】不才者 自樂天自ら謂ふ。

【題義】春廬山の西林寺に遊んで作つた詩である。

【詩意】西林寺の門外で馬から下り、杖を曳いて境内にはひつた。時恰も二月のことで氷や雪も既に解け、日向の叢には茶の芽が生え、日陰の小流にも泉が流れてゐる。雲氣風物皆和らぎ、春が山中に満ちて碧を凝らしてゐる。身に暇があるから到處にさまよふことが出来、官職も閑散だから何の拘束もない。昔から十八人の賢者が此山に隱れて悠悠自適したのを羨ましく思つた。今年には淮蔡地方に賊が起つて、それが四方にはびこり、智士は謀略に勞し武臣は征戰に苦んでゐるが、僕のやうな無能な者は吞氣に山中に遊んで、泉石を賞玩してゐる。

出山吟

出山吟

朝詠遊仙詩。暮歌采薇曲。朝には遊仙の詩を詠じ、暮には采薇の曲を歌ふ。

臥雲坐白石。山中十五宿。雲に臥し白石に坐し、山中に十五宿す。

行隨出洞水。回別緣巖竹。行いては洞を出づる水に隨ひ、回りは巖に緣る竹に別る。

早晚重來遊。心期瑤草綠。早晚重ねて來り遊ばん、心に期す瑤草の綠ならんことを。

【字解】【一】遊仙詩 晉の何劭、郭璞、皆遊仙詩を作つた。【二】采薇曲 伯夷・叔齊、首陽山に隱れ、采薇曲を作つた。【三】早晚 いつか。【四】瑤草 仙草なり。

【題義】廬山に遊んで歸る時に詠んだ詩である。

【詩意】朝には遊仙の詩を詠じ、暮には采薇の曲を歌ひ、雲に臥し石に坐し、此山に來て十五日ほど宿つた。今洞窟を出づる水に隨ひ巖に緣る竹に別れて歸途に就くのであるが、仙草の綠なる頃を期して又再び此山に遊ばうと思ふ。

歲暮

歲暮

已任時命去。亦從歲月除。已に時命の去るに任せ、亦歲月の除するに従す。

中心一調伏。外累盡空虛。中心一に調伏し、外累盡く空虛。

名宦意已矣。林泉計何如。名宦意已みぬ、林泉計何如。

擬近東林寺。溪邊結一廬。東林寺に近く、溪邊一廬を結ばんと擬す。

【字解】【一】時命 時運。【二】調伏 佛語、心口意の三業を調和して諸惡を制伏すること。【三】外累 外界の煩累。【四】名宦 名譽ある官職。【五】東林寺 廬山に在る山の名。

【題義】 歲暮の感想を述べた詩である。

【詩意】 已に時運の去るに任せ、亦年月の改まるに任せて敢て惜まない。吾が心は十分調伏せられ、外界の煩累をも盡く超脱した。名宦に登らうといふ野心もなく、ただ林泉の計を立て、東林寺の近くの溪間に、庵を結びたいものだと思つてゐる。

聞早鶯

早鶯を聞く

日出眠未起。屋頭聞早鶯。

日出づるも眠りて未だ起きず、屋頭早鶯を聞く。

忽如上林曉。萬年枝上鳴。

忽ち上林の曉、萬年枝上に鳴くが如し。

憶爲近臣時。秉筆直承明。

憶ふ近臣たりし時、筆を秉りて承明に直す。

春深視草暇。且暮聞此聲。

春深くして視草の暇、且暮此聲を聞く。

今聞在何處。寂寞潯陽城。

今聞く何の處に在る、寂寞たる潯陽城。

鳥聲信如一。分別在人情。

鳥聲信に一なるが如し、分別人情に在り。

不作天涯意。豈殊禁中聽。

天涯の意を作さずんば、豈に禁中の聽に殊ならんや。

【字解】【一】上林 天子の園林。【二】萬年 祝福の詞。【三】承明 承明廬は漢時侍從の臣の居る處。【四】視草 翰林學士の詔書を草すること。【五】分別 區別、差別。

【題義】 鶯の聲を聞いて感想を述べた詩である。

【詩意】 日が出てはまだ起きずに寝てゐて、屋根のあたりで鶯の啼くの聞き、忽ち天子の御庭の玉樹の枝で啼くやうに思つた。嘗て天子の近臣となり筆を持つて承明廬に宿直してゐた頃、詔を草する暇に朝晩此聲を聞いたものであつたが、今は寂寞たる此潯陽城で聞くことになつた。鳥の聲はどこで聞いても變りのある筈はないが、聞く人の感情に由つて相違が生ずるのである。されば天涯の貶客たるを悲む心さへ起さなければ、禁中で聽くと同じである。

栽杉

杉を栽う

勁葉森利劍。孤莖挺端標。

勁葉森として利劍あり、孤莖挺として端標あり。

纔高四五尺。勢若干青霄。

纔に高きこと四五尺、勢青霄を干すが若し。

移栽東窓前。愛爾寒不凋。

東窓の前に移し栽ゑ、爾か寒くして凋まざるを愛す。

病夫臥相對。日夕閒蕭蕭。

病夫臥して相對し、日夕閒にして蕭蕭たり。

昨爲山中樹。今爲簷下條。

昨は山中の樹と爲り、今は簷下の條と爲る。

雖然遇賞翫。無乃近塵囂。

然く賞翫に遇ふと雖も、乃ち塵囂に近く無からんや。

猶勝澗谷底。埋沒隨衆樵。

猶ほ勝れり澗谷の底、埋沒して衆樵に隨はんには。

不見鬱鬱松。委質山上苗。

見ずや鬱鬱たる松、質を山上の苗に委するを。

【字解】【一】森 森嚴なる貌。【二】挺 高く立つ貌。端標は正しきしるし。【三】青霄 青空。【四】蕭蕭 風の聲。

【題義】 山中の杉を簷の下に移し植ゑ、己の感想を述べた詩である。

【詩意】 杉の勁い葉は利劍のやうに森嚴で、孤立してゐる幹は高尚な風趣があり、高さは纔に四五尺でも、青空をも凌がんとする勢がある。之を東窓の前に移し栽ゑたのは冬になつても凋衰しない所が氣に入つたからである。余は今病に臥して朝晩風に吹かるる聲を聞いてゐる。先日までは山に在つたのが、今は吾が簷の下に植ゑられ、賞翫されるのはよいが、それだけ俗塵に近づくことになつたわけで、其點は感服しないであらうが、併し澗間に埋もれて樵人の相手をしてゐるよりは勝つてゐよう。見よ彼の鬱鬱と茂つた松でも山の雜草に身を任せて困められてゐるではないか。

過李生

李生に過る

蘋小蒲葉短。南湖春水生。

蘋小にして蒲葉短く、南湖春水生ず。

子近湖邊住。靜境稱高情。

子は湖邊に近く住み、靜境高情に稱ふ。

我爲郡司馬。散拙無所營。

我は郡の司馬と爲り、散拙にして營む所無し。

使君知性野。衙退任閒行。

使君性の野なるを知り、衙より退けば閒行するに任す。

行攜小榼去。逢花輒獨傾。

行くに小榼を攜へて去り、花に逢へば輒ち獨り傾く。

半酣到子舍。下馬叩柴荆。

半酣にして子が舍に到り、馬より下りて柴荆を叩く。

何以引我步。繞籬竹萬莖。

何を以てか我が歩を引く、籬を繞る竹萬莖。

何以醒我酒。吳音吟一聲。

何を以てか我が酒を醒ます、吳音吟一聲。

須臾進野飯。飯稻茹芹英。

須臾にして野飯を進む、稻を飯ひ芹英を茹はしむ。

白甌青竹箸。儉潔無羶腥。

白甌青竹の箸、儉潔にして羶腥無し。

欲去復徘徊。夕鴉已飛鳴。

去らんと欲して復た徘徊すれば、夕鴉已に飛鳴す。

何當重遊此。待君湖水平。

何か當に重ねて此に遊び、君を待つて湖水平なるべき。

【字解】(一)使君 郡の太守をいふ。(二)衙 役所。閑行は閑歩なり。(三)小榼 小さい酒樽。(四)半酣 半酔なり。(五)柴荆 わびしき住居。(六)白甌 白い皿。(七)羶腥 なまぐさき物。

【題義】李生の宅を訪ひて作つた詩である。

【詩意】蘋は小さく蒲の葉はまだ短いが南の湖には春水が増した。湖の近所の君の家は閑静な場所。君の高情にふさはしい。我は九江郡司馬の職に在るが無能で何の爲す所もなく、太守も吾が野情に富んでゐるのを知つてゐるから、役所から退けてからは自由に閑歩することを許してある。行くには必ず酒樽を攜へ、花に對して獨りで傾け、半酔ふと君の家を訪れる。君の家の籬を繞る澤山の竹が我を引きつける爲でもあり、又君の吳音の吟聲を聽いて酔を醒まさうと思ふからでもある。須臾すると米の飯に芹などを添へて御馳走になる。白い皿や竹の箸も清らかに、腥い物などは少しもない。今日も覺えず時を移して夕の鴉が鳴く頃になつた。いつか又ここに来て、湖上の水が漫漫と湛へた時に君に伴つて遊びたいと思ふ。

詠意

意を詠ず

常聞南華經。巧勞智憂愁。

常て南華の經を聞くに、巧なるは勞し智あるは憂愁す。

不如無能者。飽食但遨遊。

如かず無能の者、飽くまで食ひ但遨遊するに。

平生愛慕道。今日近此流。

平生愛して道を慕ふ、今日此流に近し。

自來潯陽郡。四序忽已周。

潯陽郡に來りしより、四序忽ち已に周る。

不分物黑白。但與時沈浮。

物の黑白を分たず、但時と沈浮す。

朝飧夕安寢。用是爲身謀。

朝に飧ひ夕に安寢し、是を用つて身の爲に謀る。

此外即閑放。時尋山水幽。

此外即ち閑放、時に山水の幽を尋ぬ。

春遊慧遠寺。秋上庾公樓。

春は慧遠の寺に遊び、秋は庾公が樓に上る。

或吟詩一章。或飲茶一甌。

或は詩一章を吟じ、或は茶一甌を飲む。

身心一無繫。浩浩如虛舟。

身心一も繫がる無く、浩浩として虚舟の如し。

富貴亦有苦。苦在心危憂。

富貴も亦苦有り、苦は心の危憂に在り。

貧賤亦有樂。樂在身自由。

貧賤も亦樂有り、樂は身の自由に在り。

【字解】(一)南華經 莊子をいふ。唐の天寶元年、莊子を號して南華真人となした。(二)遨遊 遊も亦遊なり。(三)潯陽郡 即ち江州。(四)四序 四時、春夏秋冬なり。(五)慧遠 晉の高僧。業を道安に受け、太元中、東林寺を廬山に立て、慧永、宗炳等と白蓮社を結んで念佛す。十八賢の目あり。(六)庾公樓 江西省九江縣治に在り。晉の庾亮江州を鎮せし時建つる所。(七)一甌

一椀なり。【八】浩浩 廣き貌。

【題義】己の胸懷を述べた詩である。

【詩意】莊子の言ふ所によれば、巧智の人は苦勞し憂愁するゆゑ、無能にして飽食遨遊する者に如かずとあるが、自分も從來道を慕ひ來つた結果、今日此流儀に近くなつて來た。この潯陽郡司馬に貶謫せられてから既に一周年になるが、事の正否をも辨せず、ただ時と浮沈し、眠食の安きを求めて朝夕を送るを何よりの謀となし、此外は萬事なげやりにして、時に山水の幽勝を探り、春は慧遠のゐた寺に遊び、秋は庾公の樓に月を賞し、詩を吟じ茶を啜り、心身ともに何等の繫累なく、殆ど波上に漂ふ虚舟のやうである。富貴の人にも苦痛がある、苦痛とは心の憂である。貧賤の身にも樂はある、その樂は身の自由なことだ。

食笋

笋を食ふ

此州乃竹郷。春笋滿山谷。

此州は乃ち竹郷、春笋山谷に滿つ。

山夫折盈抱。抱來早市鬻。

山夫折りて抱に盈つ、抱き來りて早市に鬻ぐ。

物以多爲賤。雙錢易一束。

物は多きを以て賤しと爲す、雙錢一束に易ふ。

置之炊甑中。與飯同時熟。

之を炊甑の中に置けば、飯と同時に熟す。

紫籜拆故錦。素肌擘新玉。

紫籜故錦を拆き、素肌新玉を擘く。

每日遂加飧。經旬不思肉。

毎日遂に飧を加へ、旬を経れども肉を思はず。

久爲京洛客。此味常不足。

久しく京洛の客と爲り、此味常に足らず。

且食勿踟躕。南風吹作竹。

且つ食うて踟躕する勿れ、南風吹いて竹と作さん。

【字解】【一】竹郷 竹の名産地。【二】雙錢 二枚の錢。【三】紫籜 紫色の竹の皮。【四】京洛 長安洛陽地方。【五】踟躕 躊躇なり。

【題義】笋を食ふことを述べた詩である。

【詩意】此地は笋の本場で春になると山谷の間に澤山生える。田舎爺が一抱持つて來て市場で賣る。すべて品が多ければ價は賤いもので、錢を二枚も出せば一束の笋が買へる。これを甑の中に入れて置くと飯と一緒に煮える。古錦のやうな皮を拆き、新玉のやうな白い肌を擘き、毎日これをたべてゐるが、十日を経ても肉が食ひたいなどとは思はない。都に居た頃は笋がないので食べられなかつたが、今はいくらでも食べられる。まあ躊躇せず食ふとしよう。南風が吹くに隨つて竹になつてしまふから。

遊石門澗

石門澗に遊ぶ

石門無舊徑。披榛訪遺跡。

石門舊徑無し、榛を披いて遺跡を訪ふ。

時逢山水秋。清輝如古昔。

時に山水の秋に逢ふ、清輝古昔の如し。

嘗聞慧遠輩。題詩此巖壁。

嘗て聞く慧遠の輩、詩を此巖壁に題すと。

雲覆莓苔封。蒼然無處覓。

雲覆うて莓苔封じ、蒼然覓むる處無し。

蕭疎野生竹。崩剝多年石。

蕭疎たる野生の竹、崩剝せる多年の石。

自從東晉後。無復人遊歷。

東晉より後、復人の遊歷する無し。

獨有秋澗聲。潺湲空旦夕。

獨り秋澗の聲有り、潺湲空しく旦夕。

【字解】【一】榛 草木の藪。【二】慧遠 前の詠意に見ゆ。【三】莓苔 こけ。【四】蒼然 青黒く古めかしきこと。【五】蕭疎 まばらに生えてゐること。【六】潺湲 泉流の音。

【題義】石門澗は廬山に在る。六朝時代に慧遠等の詩僧の遊んだ處である。此詩は形勝依然として其人無きを弔したのである。汪立名曰く、按ずるに石門澗二處あり。一は江州にあり。太平寰宇記に云ふ、石門澗は廬山の西にあり、懸崖對聳、形關の如く、雙石の間に當り、懸流數丈、一石あり、二

十許人を坐せしむべしと。一は杭州の西湖にあり。咸淳臨安志に云ふ、武林山石門澗。陸羽の二寺記に云ふ、南に巉巖あり。舊臥龍石、横澗石あり、慈雲法師松を此に種うと。然れども詩中に慧遠題詩の語あり。自らはれ江州の作。西湖志に亦此を收むるは誤れりと。

【詩意】石門には古い徑もないので、榛莽をおし披いて遺跡を尋ねた。丁度秋のことで山水が昔ながらの清輝を呈してゐた。ここの巖壁には東晉の聖僧慧遠が詩を題したと傳へてあるが、今來て見ると雲覆ひ苔封じて、どこが其れやら捜すことも出来ない。ただ疎に生えてゐる竹や、崩れかけた古石があるばかりだ。東晉から後には遊賞する人もないと見えて、澗川の水が朝から晩まで音立てて流れてゐるばかりだ。

招東鄰

東鄰を招く

小榼二升酒。新篔六尺床。

小榼二升の酒、新篔六尺の床

能來夜話否。池畔欲秋涼。

能く來りて夜話するや否や、池畔秋涼ならんと欲す。

【字解】【一】小榼 小さい酒樽。【二】新篔 新しい竹の席。

【題義】東鄰の友を招待する詩である。

【詩意】 小さい酒樽には二升の酒があり、新しい簾を敷いた六尺の床もある。池の畔は大分涼味が饒になつたが、一晩話しに來ては如何。

題元十八溪亭

亭在廬山東南五老峯下

元十八の溪亭に題す

亭は廬山の東南、五老峯下に在り

怪君不喜仕。又遊煙霞里。

怪む君が仕を喜ばず、又煙霞の里に遊ぶを。

今日到幽居。了然知所以。

今日幽居に到り、了然として所以を知る。

宿君石溪亭。潺湲聲滿耳。

君が石溪の亭に宿すれば、潺湲として聲耳に滿てり。

飲君螺盃酒。醉臥不能起。

君が螺盃の酒を飲めば、醉臥して起つ能はず。

見君五老峯。益悔居城市。

君を五老の峯に見、益城市に居るを悔ゆ。

愛君三男兒。始歎身無子。

君が三男兒を愛し、始めて歎身に子無きを。

余方鑑峯下。結室爲居士。

余鑑峯の下に方り、室を結んで居士と爲る。

山北與山東。往來從此始。

山北と山東と、往來此より始まらん。

【字解】 一 煙霞里 山水の景色のよい處。 二 了然 明に悟ること。 三 潺湲 泉流の聲。 四 螺盃 貝で作つた杯。

【五】 五老峯 廬山の最高峯。 【六】 鑑峯 廬山の北峯の名、香鑑峯。 【七】 居士 處士なり。 任官せぬ人。

【題義】 元十八（元は姓、十八は排行）の溪亭に遊び、その壁に題した詩である。

【詩意】 君は仕官を好まず山水の勝を探つて遊んでゐるが、今日君の幽居に來て見て、始めて其眞意がわかつた。君の溪亭に宿ると泉流の音が耳を洗ひ、君の貝の杯で酒を飲むと起てないほど酔つてしまふ。君を五老峯に訪ひて、益都會に住むのがいやになり、君が三人の男の子を愛するのを見て、自分が子のないことを嘆息した。今から自分も香鑑峯下に庵を結んで處士となり、廬山の北と廬山の東と互に往來して君と遊びたいものだ。

香鑑峯下新置草堂即事詠懷題於石上

香鑑峯下、新に草堂を置き、事に即き懷を詠じ、石上に題す

香鑑峯北面。遺愛寺西偏。

香鑑峯の北面、遺愛寺の西偏。

白石何鑿鑿。清流亦潺潺。

白石何ぞ鑿鑿たる、清流亦潺潺たり。

有松數十株。有竹千餘竿。

松有り數十株、竹有り千餘竿。

松張翠傘蓋。竹倚青琅玕。

松は翠の傘蓋を張り、竹は青き琅玕を倚す。

閒適 題元十八溪亭 香鑑峯下新置草堂即事詠懷題於石上

其下無人_二居_一。悠哉_二多歲年_一。
 其下人の居る無し、悠なる哉多歳の年。
 有時_二聚_一猿鳥。終日_二空_一風煙。
 時有りて猿鳥を聚め、終日風煙を空しうす。
 時_二有_一沈冥子。姓_二白_一字_二樂天_一。
 時に沈冥の子有り、姓は白、字は樂天。
 平生_二無_一所好。見_二此_一心_二依然_一。
 平生好む所無し、此を見て心依然たり。
 如_レ獲_二終老地_一。忽乎_二不知_一還。
 終老の地を獲たるが如く、忽乎として還るを知らず。
 架_レ巖_二結_一茅宇。斲_レ壑_二開_一茶園。
 巖に架して茅宇を結び、壑を斲りて茶園を開く。
 何以_二洗_一我_レ耳。屋頭_二飛_一落泉。
 何を以てか我が耳を洗ふ、屋頭に落泉飛ぶ。
 何以_二洗_一我_レ眼。砌下_二生_一白蓮。
 何を以てか我が眼を洗ふ、砌下に白蓮生ず。
 左手_二攜_一一壺。右手_二挈_一五絃。
 左手に一壺を攜へ、右手に五絃を挈ふ。
 傲然_二意_一自足。箕踞_二於_一其間。
 傲然として意自ら足り、其間に箕踞す。
 興_二酣_一仰_二天歌_一。歌中_二聊_一寄言。
 興酣にして天を仰いで歌ふ、歌中に聊か言を寄す。
 言_二我_一本_二野夫_一。誤_レ爲_二世網_一牽。
 言ふ我は本野夫なり、誤りて世網に牽かる。
 時來_二昔_一捧_レ日。老去_二今_一歸_レ山。
 時來りて昔日を捧げ、老去りて今山に歸る。

倦鳥得_二茂樹_一。涸魚反_二清源_一。

倦鳥茂樹を得、涸魚清源に反る。

捨此_二欲_一焉往。人間_二多_一險難。

此を捨てて焉にか往かんと欲する、人間險難多し。

【字解】【一】香鑪峯 廬山の北峯の名。【二】遺愛寺 香鑪峯に在る寺の名。【三】鑿鑿 鮮明の貌。【四】潺潺 泉流の聲。【五】琅玕 石の玉に似たるもの。【六】悠哉 遠き貌。【七】沈冥子 おろかもの。【八】依然 思慕する貌。【九】砌下 みぎりの下。【一〇】五絃 五絃琴。【一一】箕踞 兩足を伸べてすわること。【一二】捧日 日を以て帝王に喩ふ。天子を翊戴すること。

【題義】香鑪峯の下に新に草堂を構へ、感懷を述べて石に題した詩である。

【詩意】香鑪峯の北の遺愛寺の西邊は、白い石が鮮明で清流が潺潺と流れ、松が數十本、竹が千餘本あつて、松は翠の蓋を張り、竹は青い玉を簞やかしてゐる。其下に人住まぬこと幾百年、ただ猿や鳥が聚り風煙が罩めてゐるばかりである。時に白樂天といふ愚物があつて、平生これといふ好みもないが、此景を見て始めて思慕の情を起し、終老の地を得たものの如くに喜んで還るのも忘れ、茅屋を結び茶園を開いた。屋頭から迸る泉は我が耳を洗ひ、砌の下に白蓮は我が目を洗ふに足る。左手に一壺の酒を攜へ、右手に五絃の琴を挈へ、傲然として得意になり兩脚を伸べてすわり、興が湧いて歌ひ、中に己の感懷を寄せた。我はもと野人であるが誤つて世間の累にひかれ、一時は天子に奉仕したが、今は老いて山に歸つた。謂はば遊びあきた鳥が茂樹を得、涸あがつた魚が清流に反つたやうなものだ。自分は此處を捨てて更に何處にも往きはしない。世路は險難であるから。

【餘論】唐宋詩醇に、草堂の結構、四圍の景致、記中（白樂天の作つた草堂記）に詳なり。此詩淡

淡寫し去りて自ら朴老の致を具ふと評してゐる。今左に草堂記を掲げて參考に供しよう。
匡廬の奇秀は天下の山に甲たり。山北の峯を香鑪といひ、峯北の寺を遺愛寺といふ。峯寺の間に介
まり、其境勝絶、又廬山に甲たり。元和十一年秋、太原の人白樂天見て之を愛し、遠行の客の故郷
を過ぎて戀戀去る能はざるが如し。因て峯に面し寺に腋して草堂を作爲す。明年春草堂成る。三間
兩柱二室四牖、廣袤豐殺一に心力に稱ふ。北戸を洞し陰風を來すは徂暑を防ぐなり。南甍を敞かにし
陽日を納るるは、祁寒を慮るなり。木は斲するのみ。丹を加へず。墻は圻するのみ。白を加へず。
城階石を用ひ、罽毼紙を用ひ、竹簾紵幃率是に稱ふ。堂中に木榻四、素屏二、漆琴一張、儒道佛
書各三兩卷を設く。樂天既に來りて主となり、仰いで山を觀、俯して泉を聽き、傍ら竹樹雲石
を睨す、辰より酉に及び接應暇あらず。俄にして物誘ひ氣隨ひ、外適し内和し、一宿體寧く、再宿
心恬かに、三宿の後頽然嗒然、其然るを知らずして然り。自ら其故を問ひ、答へて曰く、是居や前
に平地あり、輪廣十丈。中に平臺あり、平地に半す。臺の南に方池あり、平臺に倍す。池を環りて
山竹野卉多し。池中に白蓮白魚を生ず。又南石澗に抵る。澗を夾みて古松老杉あり。大いさ僅と十
人圍、高さ幾百尺なるを知らず。修柯雲に憂り、低枝潭を拂ひ、幢の堅つが如く、蓋の張るが如く、
龍蛇の走るが如し。松下に灌叢蘿葛多く、葉蔓駢織、日月を承翳して光地に到らず。盛夏の風氣八

九月の時の如し。下に白石を鋪きて出入の道となす。堂北五步層崖に據り、石を積み空に嵌し、瑤
塊雜木異草其上を蓋覆し、綠陰濛濛、朱實離離、其名を識らず。四時一色。又飛泉あり。茗を植ゑ、
就て以て烹煇す。好事の者見て以て日を永うすべし。堂東に瀑布あり。水懸ること三尺。階隅に瀉
ぎ石渠に落つ。昏曉は練色の如く、夜中は環珮琴筑の聲の如し。堂西は北崖の右趾に倚り、剖竹を
以て空に架し、崖上の泉を引き、脈分れ綫懸り、簷より砌に注ぎ、纍纍貫珠の如く、霏微雨露の如
く、滴瀝飄灑、風に隨うて遠く去る。其四傍耳目杖履の及ぶべきもの、春は錦繡谷の花あり。夏は石
門澗の雲あり。秋は虎谿の月あり。冬は鑪峯の雪あり。陰晴顯晦、昏旦含吐、千變萬狀、殫く紀
し靦縷して言ふべからず。故に云ふ、廬山に甲たるものと。噫。凡そ人一屋を豊にし一簣を華にし
て其間に起居するも、尙驕穩の態あるを免れず。今我是物の主となり、物至りて知を致し、各類
を以て至る。又安んぞ外適し内和し體寧く心恬ならざるを得んや。昔永遠宗雷輩十八人、同じく
此山に入り、老死して反らず。我を去ること千載、我其心を知る是を以てなる哉。矧んや予自ら思
ふ。幼より老に迫るまで、若くは白屋、若くは朱門、凡そ止まる所、一日二日と雖も、輒ち簣土を
覆うて臺となし、拳石を聚めて山となし、斗水を環らして池となす。其の山水を喜ぶ、病癖此の如
し。一旦蹇剝來りて江郡に佐たり。郡守優容を以て我を撫し、廬山靈勝を以て我を待つ。是れ天我
に時を與へ、地我に所を與へ、卒に好む所を獲。又何を以て求めん。尙元員の羈する所を以て、餘累

未だ盡きず。或は往き或は來り、未だ寧處に違あらず。予が異時弟妹婚嫁畢り、司馬の歲秩滿つるを待ちて、出處行止、以て自ら遂ぐるを得ば、則ち必ず左手に妻子を引き、右手に琴書を抱き、斯に終老し以て我が平生の志を成就せん。清泉白石實に此言を聞け。時に三月二十七日、始めて新堂に居り、四月九日、河南の元集虛、范陽の張允中、南陽の張深之、東西二林寺の長老湊朗滿晦堅等凡て二十有二人と、齋を具し茶果を施し、以て之を落す。因て草堂の記を爲る。

草堂前開一池養魚種荷日有幽趣

草堂の前に一池を開き、魚を養ひ荷を種う、日に幽趣有り

淙淙三峽水。浩浩萬頃陂。

淙淙たり三峽の水、浩浩たり萬頃の陂。

未如新塘上。微風動漣漪。

未だ如かず新塘の上、微風漣漪を動かすに。

小萍加汎汎。初蒲正離離。

小萍加す汎汎たり、初蒲正に離離たり。

紅鯉二三寸。白蓮八九枝。

紅鯉二三寸、白蓮八九枝。

遠水欲成徑。護堤方挿籬。

水を遠りて徑を成さんと欲し、堤を護りて方に籬を挿む。

已被山中客。呼作白家池。

已に山中の客に、呼んで白家の池と作さる。

【字解】【一】荷。蓮なり。【二】淙淙。水の聲。三峽は長江の險處。瞿塘峽。巫峽。西陵峽をいふ。【三】浩浩。廣大なる貌。【四】漣漪。さざ波。【五】小萍。小きうきくさ。汎汎はうかぶ貌。【六】初蒲。若い蒲。離離は繁茂する貌。【七】白家。白氏といふが如し。

【題義】草堂の前に池を鑿ち魚を養ひ蓮を種え、日に日に幽趣の加はることを述べた詩である。

【詩意】淙淙たる三峽の水、浩浩たる萬頃の池も、吾が草堂の前の池の、微風に漣の立つ風情には及ぶまい。春のこととして小さい萍が日増に殖え、若い蒲が繁茂し、中には鯉を養ひ蓮を植えてある。水を圍んで徑を作り、又堤を護る爲に籬を設けようと思つてゐる。既に山の中の人からは白氏の池などと名までつけられるやうになつた。

白雲期 黃石巖 下作

白雲期 黃石巖 下の作

三十氣太壯。胷中多是非。

三十氣太だ壯なり、胷中是非多し。

六十身太老。四體不支持。

六十にして身太だ老ゆ、四體支持せず。

四十至五十。正是退閒時。

四十より五十に至る、正に是れ退閒の時。

年長識命分。心慵少營爲。

年長じて命分を識り、心慵くして營爲少し。

閒適 草堂前開一池養魚種荷日有幽趣 白雲期

見酒興猶在。登山力未衰。酒を見て興猶ほ在り、山に登りて力未だ衰へず。
吾年幸當此。且與白雲期。吾が年幸に此に當る、且く白雲と期す。

【字解】【一】四體。四肢なり。手足。【二】命分。天命。論語に、「五十ニシテ天命ヲ知ル」とある。【三】營爲。事を經營すること。

【詩意】三十ぐらゐの時は氣力が壯で、心中に是非の葛藤が多い。六十となると最早老境に入つて手足も自由がきかなくなる。四十から五十までは、正に心も落ち著き、天命を自覺するやうにもなり、何事にも進んで當らうとしなくなる。併し酒を見ては興を催し、山に登るぐらゐの元氣はある。自分は今丁度その年配になつた。因つて酒を攜へ山に登つて白雲と交會を結ばうと思ふ。

登香爐峯頂

香爐峯の頂に登る

迢迢香爐峯。心存耳目想。迢迢たる香爐峯、心に存し耳目に想ふ。
終年牽物役。今日方一往。年を終るまで物役に牽かれ、今日方に一たび往く。
攀蘿蹋危石。手足勞俯仰。蘿を攀ちて危石を蹋み、手足俯仰に勞す。
同遊三四人。兩人不敢上。同遊三四人、兩人は敢て上らず。

上到峯之頂。目眩心悅。上りて峯の頂に到れば、目眩めき心悅たり。

高低有萬尋。濶狹無數丈。高低萬尋有り、濶狹數丈無し。

不窮視聽界。焉識宇宙廣。視聽の界を窮めずんば、焉んぞ宇宙の廣きを識らん。

江水細如繩。溢城小於掌。江水は繩如りも細く、溢城は掌よりも小し。

紛吾何屑屑。未能脫塵鞅。紛として吾何ぞ屑屑たる、未だ塵鞅を脱する能はず。

歸去思自嗟。低頭入蟻壤。歸り去り思ひて自ら嗟く、頭を低れて蟻壤に入るを。

【字解】【一】迢迢。高き貌。香爐峯は前に見ゆ。【二】悅。自失する貌。【三】高低。高さの意。低は意味なし。【四】濶狹。ひろさ。狹は意味なし。【五】溢城。潯陽なり。今の江西省九江縣治。【六】屑屑。煩細なり。【七】塵鞅。俗事に羈束せらるること。【八】蟻壤。蟻穴なり。

【題義】香爐峯の頂に登り、四方を眺望した感想を述べた詩である。

【詩意】高く聳ゆる香爐峯は、いつも我が心目の間にちらつてゐるが、一年中職責に拘束せられて登る機會がなかつたが、今日始めて目的を果した。蘿を攀ち危石を蹋み、手足は俯仰に疲れた。同行者は三四人あつたが、其中の二人は途中でへたばつてしまつた。絶頂に到ると目が眩み心が失はれる。高さは萬尋もあるのに濶さは僅か數丈に足らない尖峯であるから、それも其筈である。併し絶頂に登

つて遠く四方を見窮めると始めて宇宙の廣大なことがわかる。長江は繩よりも細く潯陽の町は掌よりも小さく見える。常に俗事に牽かれて齟齬としてゐる身は、今此山から歸り去るに就いて、又頭を低れて蟻穴にも比すべき俗世間にはひるのかと思ふと自然と溜息が出る。

答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩

崔侍郎、錢舍人の書問に答へ、因つて繼ぐに詩を以てす

日暮兩蔬食。日中一閑眠。日暮に兩たび蔬食し、日中に一たび閑眠す。

便是了一日。如此已三年。便ち是れ一日を了す、此の如きこと己に三年。

心不擇時適。足不揀地安。心は時の適するを擇ばず、足は地の安きを揀まず。

窮通與遠近。一貫無兩端。窮通と遠近と、一貫して兩端無し。一貫しきを思ふ。

常見今之人。其心或不然。常に今の人を見るに、其心或は然らず。

在勞則念息。處靜已思喧。勞に在れば則ち息はんことを念ひ、靜に處しては已に

如是用身心。無乃自傷殘。是の如く身心を用ふ、乃ち自ら傷殘する無からんや。

坐輸憂惱便。安得形神全。坐して憂惱の便を輸さば、安んぞ形神の全きを得ん。

吾有二道友。藹藹崔與錢。吾に二道友有り、藹藹たり崔と錢と。

同飛青雲路。獨墮黃泥泉。同じく青雲の路に飛び、獨り黃泥の泉に墮つ。

歲暮物萬變。故情何不遷。歲暮れて物萬變す、故情何ぞ遷らざる。

應爲平生心。與我同一源。應に平生の心を爲し、我と一源を同じうすべし。

帝鄉遠於日。美人高在天。帝郷は日よりも遠く、美人は高くして天に在り。

誰謂萬里別。常若在目前。誰か謂ふ萬里の別と、常に目前に在るが若し。

泥泉樂者魚。雲路遊者鸞。泥泉に樂む者は魚なり、雲路に遊ぶ者は鸞なり。

勿言雲泥異。同在逍遙間。言ふ勿れ雲泥異なりと、同じく逍遙の間に在り。

因君問心地。書後偶成篇。君が心地を問ふに因りて、書後偶篇を成す。

慎勿說向人。人多笑此言。慎みて人に説く勿れ、人多くは此言を笑はん。

【字解】【一】蔬食。菜食なり。【二】傷殘。損傷なり。【三】形神。身心なり。【四】藹藹。盛なる貌。【五】青雲路。高位高官に喩ふ。【六】黃泥泉。貶謫に喩ふ。【七】故情。もとの情。【八】帝郷。帝都長安。【九】美人。天子をいふ。【一〇】心地。我が貶謫せられた心持。【一一】書後。返事の手紙を書いた後。【一二】說向人。向は於に同じ、人に説くなり。

【題義】崔侍郎と錢舍人とが手紙を以て白樂天の貶謫を弔問した返事を出し、更に此詩を作つたので

開適 答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩

ある。

【詩意】朝晩二回菜食して日中に一回晝寝をする。かうして一日を終り、己に三年を経た。時の快適を求めず、地の安定を求めず、身の窮通、地の遠近の如きは、一樣に視て差別を其間に立てない。今の世の人を見るに、多くは此の如くならず、勞に居りては休息を求め、靜に處りては喧を冀ふ。これは自ら身心を傷ける態度である。坐して憂惱の侵すに任せてれば身心の安全は保たれないにきまつてゐる。吾に二人の道友がある。即ち崔侍郎と錢舍人とである。二人とも榮位にのぼつたが、僕だけは貶謫に遇つた。併し歳も改まつて萬物皆一變したのであるから、我を憐むの情も遷改して然るべきである。平生のやうな心持になり、僕と同様になるがよい。帝都は遠く離れ、天子を拜することは出来ないが、常に目前に在るやうに思つてゐるので、相去ること萬里などとは思つてゐない。泥水の中に樂む魚も青雲の間に遊ぶ鸞も、雲と泥との違こそあれ、其樂は同じである。君が僕を吊問せられたに因つて、返書を認めて後偶然此詩を作つた。併し此事は人には言はないでくれ。人が聞いたら負惜みを謂ふと笑ふであらう。

烹葵

葵を烹る

昨臥不夕食。今起乃朝飢。

昨臥して夕食せず、今起きて乃ち朝飢す。

貧厨何所有、炊稻烹秋葵。

貧厨何の有る所ぞ、稻を炊ぎ秋葵を烹る。

紅粒香復軟、綠英滑且肥。

紅粒香しく復た軟かに、綠英滑にして且つ肥えたり。

飢來止於飽、飽後復何思。

飢る來れば飽くに止まる、飽いて後復た何をか思はん。

憶昔榮遇日、迨今窮退時。

昔榮遇の日を憶ひ、今窮退の時に迨ぶ。

今亦不凍餒、昔亦無餘資。

今亦凍餒せず、昔亦餘資無し。

口既不減食、身又不減衣。

口既に食を減せず、身又衣を減せず。

撫心私自問、何者是榮衰。

心を撫して私に自ら問ふ、何者か是れ榮衰。

勿學常人意、其間分是非。

常人の意を學んで、其間是非を分つこと勿れ。

【字解】【一】朝飢 詩經に怒如調飢とある。調は朝なり。【二】秋葵 野菜の名。【三】綠英 綠の葉。

【題義】葵を烹て食ひ、因つて所感を述べた詩である。

【詩意】昨日は寢てゐたので夕飯を食はなかつた爲に、今朝起きて見ると大分腹が減つてゐた。勝手元が不如意で何もなから、米の飯に葵を烹て食へることにした。薄紅色の飯は香氣があつて軟で、綠色の葵葉は滑で肥えてゐる。飢ゑては飽くまで食ひ、飽けば外に何の屈託もない。昔榮遇を受けた

頃ころから今いま貶へんた謫たくせられてゐる時ときまでの事ことを追憶ついきすれば、今いまも凍餒とうたいの患うれがあるわけでもなく、昔むかしも財政さいせいに餘裕よゆうがあつたわけでもない。随したがつて著きたり食くつたりに格別かくべつの相違さうゐはない。因よつて獨ひとり胸むねを打うつて自みづか問とうて見た。どちらが榮えいでどちらが衰すいなのであるかと。要えうするに世よの常つねの人のやうに、盛衰せいすいの間あひだに是非ひを置いて盛せいを是ぜとし衰すいを非ひとするやうな考かんがはしない。盛衰せいすいを一ひと如にとする考かんがである。

小池二首

小池二首

晝倦ひる前齋ぜんさい熱あつ。晚愛くれ小池せうち清きよ。

晝ひるは前齋ぜんさいの熱あつきに倦うみ、晚くれには小池せうちの清きよきを愛あいす。

映林はやし餘景えいけい没ぼつ。近水みづ微涼びりやう生しやう。

林はやしに映えいじて餘景えいけい没ぼつし、水みづに近ちかく微涼びりやう生しやうす。

坐把ざ蒲葵扇ぼきせん。閒吟かんぎん三兩聲さんりやうせい。

坐ざして蒲葵扇ぼきせんを把とり、閒吟かんぎんす三兩聲さんりやうせい。

【字解】【一】餘景 夕日。【二】蒲葵 葉の椶櫚に似てゐる常緑喬木。その葉で扇を作る。

【題義】亭前ていぜんの小池せうち（官舎内新鑿しんくわん小池せうちの詩卷七に見ゆ）の涼味りやうみを述べた詩である。

【詩意】晝ひるは前座敷ぜんざしきの熱あつきに倦うみ疲つかれるが夕方ゆふがたになると小池せうちの清澄せいじやうが誠まことによい。林はやしに映えいする夕日ゆふひもいづししか没ぼつすると、そろそろ涼味りやうみが湧わいて来る。蒲葵扇ぼきせんを手に持ち、坐ざして微吟びぎんするのも趣味しゆみが深ふかい。

〔二〕

〔二〕

有意いあ不在ない大。湛湛たんたん方丈餘ほうぢやうよ。

意い有りて大だいに在あらず、湛湛たんたんたり方丈餘ほうぢやうよ。

荷側かそはだ瀉せいろ清露せいろう。萍開へいひら見游魚みいうぎよ。

荷側かそはだつて清露せいろうを瀉そぎ、萍開へいひらいて游魚いうぎよを見る。一を憶おもふ。

每一ひとごと臨此りんし坐。憶歸おぼも青溪居せいけいきよ。

一ひとたび此こゝに臨のぞんで坐ざする毎ごとに、青溪せいけいの居きよに歸かへらんこと。

【字解】【一】湛湛 水のたたへること。方丈は一丈四方。【二】荷 蓮の葉。【三】萍 うちきくさ。

【詩意】敢あへて大だいなるに意いあるにあらず、僅わずかに一丈四方せうぢやうほうばかりの小池せうちに水みづが湛たへてゐる。蓮はすの葉かたはが傾かたむいて清きよい露つゆがこぼれ、萍らうきが開ひらいて游およいでゐる魚うなが見みえる。一ひとたび此こゝ池いけに對たいして坐ざする毎ごとに、青溪せいけいの居きよに歸かへりたいと思おもふ。

閉關

關を閉づ

我心わがこころ忘わす世久よひさ。世亦よまた不な我干わがみか。

我わがが心こころ世よを忘わすること久ひさし、世よ亦また我わがを干みかさす。

遂成つひ一無事いことな。因得よ長掩關ながくわんを。

遂つひに一ひとに事こと無なきを成なし、因よつて長ながく關くわんを掩おほふを得えたり。

掩關くわんを來こ幾時このかた。髣髴はうふつ二三年ねん。

關くわんを掩おほひて來こ幾時このかたぞ、髣髴はうふつたり二三年ねん。

著書しよ已盈帙あらかち。生子こ欲能言よ。

書しよを著あはして已まに帙ちゆうに盈みち、子こを生うんで能よく言いはんと欲ほつす。

始悟身易老。復悲世多艱。始めて身の老い易きを悟り、復た世の艱多きを悲む。
 廻顧趨時者。役役塵壤間。廻顧す時に趨る者、塵壤の間に役役たり。
 歲暮竟何得。不如且安閑。歳暮れて竟に何をか得る、且く安閑なるに如かず。

【字解】【一】髣髴 分明ならぬこと。【二】趨時者 世の勢利を逐ひ求むる者。【三】役役 勞苦する貌。

【題義】門關を閉ぢて閑居することを述べた詩である。

【詩意】我が心は久しく世を忘れ、世も亦我を棄てて顧みない。遂に何の爲す事もなく門を閉ぢて閑居することが出来る。閑居してから夢のやうに二三年を過ぎ、其間に書を著して帙に盈ち、子を生んで其子が物を言ふやうになつて來た。吾が身の追追老境に入ることを悟り、復た世路の艱難を悲む。世間に奔走して勢利を逐ふ者を見るに、皆塵土の間に勞苦してゐるが、老年になつて果して何を獲るか。何物も獲ないのが世の常である。そんな馬鹿な苦勞をするよりは、安閑と閑居してゐる方が遙によい。

弄龜羅

龜羅を弄す

有姪始六歲。字之爲阿龜。姪有り始めて六歲、之に字して阿龜と爲す。

有女生三年。其名曰羅兒。

女有り生れて三年、其名を羅兒と曰ふ。

一始學笑語。一能誦歌詩。

一は始めて笑語を學び、一は能く歌詩を誦す。

朝戲抱我足。夜眠枕我衣。

朝に戯れて我が足を抱き、夜眠りて我が衣を枕す。

汝生何其晚。我年行已衰。

汝生ること何ぞ其れ晚き、我年行くゆく已に衰ふ。

物情小可念。人意老多慈。

物情は小にして念ふ可く、人意は老いて慈多し。

酒美竟須壞。月圓終有虧。

酒美にして竟に須く壞るべし、月圓にして終に虧くる。

亦如恩愛緣。乃是憂惱資。

亦恩愛の緣の如き、乃ち是れ憂惱の資。

舉世同此累。吾安能去之。

世を舉げて此累を同じうす、吾安んぞ能く之を去らん。

【字解】【一】物情 人情なり。

【題義】阿龜と羅兒との二兒を戲弄するについて感想を述べた詩である。

【詩意】姪の阿龜は六歲、吾が女の羅兒は三歲。一人は笑つたり語つたりが出来、一人は詩歌を誦することが出来る。朝は吾が足を抱いて戯れ、夜は吾が衣を枕にして眠る。ああ汝等は何故晚く生れたか。汝等は皆幼少であるのに我はもう老衰した。人情の常として小さい者に對しては彼此と心配し、

年老いと慈愛が増すものである。酒の美なるは人を壞り月圓なれば虧けると同じく、恩愛の縁は即ち煩惱の本である。世間皆この累を免れないが、吾も世間なみの恩愛の情に惱まされる。

截樹

樹を截る

種樹當前軒。樹高柯葉繁。樹を種ゑて前軒に當る、樹高くして柯葉繁る。

惜哉遠山色。隱此蒙籠間。惜しい哉遠山の色、此蒙籠の間に隱る。

一朝持斧斤。手自截其端。一朝斧斤を持し、手自ら其端を截る。

萬葉落頭上。千峰來面前。萬葉頭上に落ち、千峰面前に來る。

忽似決雲霧。豁達觀青天。忽ち雲霧を決して、豁達として青天を觀るに似たり。

又如所念人。久別一欸顏。又念ふ所の人に、久しく別れて一たび欸顏するが如し。

始有清風至。稍見飛鳥還。始めて清風の至る有り、稍飛鳥の還るを見る。

開懷東南望。目遠心遼然。懷を開いて東南を望めば、目遠くして心遼然たり。

人各有偏好。物莫能兩全。人各偏好有り、物能く兩ながら全きこと莫し。

豈不愛柔條。不如見青山。

豈に柔條を愛せざらんや、青山を見んには如かず。

【字解】【一】柯葉 枝葉。【二】蒙籠 枝葉のおほひかぶさること。【三】斧斤 をの、まさかり。【四】欸顏 親しく顔を合せること。【五】偏好 かたよつた好み。【六】柔條 柔かな枝。

【題義】木の枝を截つて青山を眺めることが出来るやうにした悦を述べた詩である。

【詩意】樹を軒の前に植ゑた所が、段段そだつて、遠山の色が枝葉に遮られて見えなくなつてしまつた。因つて斧で其端を截つた。頭上にはばらばらと葉が落ちたが、おかげで羣峰が面前に現れて來た。恰も雲霧を披いて青天を仰ぎ、久しく別れてゐた懇親の人に遇つたやうである。始めて清風がよく透るやうにもなり、飛鳥の還るのも見えるやうになつた。東南の方を遙に眺望すると心も隨つて廣廣とする。人には皆偏好があり、物には兩全を許さない。余も樹の柔い枝を好まぬのではないが、青山を見る方がもつと好きだ。

望江樓上作

望江樓上の作

江畔百尺樓。樓前千里道。

江畔百尺の樓、樓前千里の道。

憑高望平遠。亦足舒懷抱。

高きに憑りて平遠を望むも、亦懷抱を舒ぶるに足る。

閒適 截樹 望江樓上作

驛路使憧憧。關防兵草草。

驛路使憧憧。關防兵草草。

及茲多事日。尤覺閒人好。

茲多事の日に及んで、尤も閒人の好きを覺ゆ。

我年過不惑。休退誠非早。

我年不惑を過ぐ、休退誠に早きに非ず。

從此拂塵衣。歸山未爲老。

此より塵衣を拂ひ、山に歸るも未だ老いたりと爲さず。

【字解】【一】憧憧。絶えず往來する貌。【二】關防。關所。草草は、いそがしきさま。【三】閒人。閑居する人。【四】不惑。四十歳。

【題義】望江樓に登つて作つた詩である。

【詩意】江の邊に百尺も高い樓があつて、千里のさきまで見晴すことが出来る。高い所から遠方を眺めるのも氣を霽すことが出来て大によい。今や驛路の使者は頻頻と往來し、關所を守る兵士は防戦に忙がしい。この多事の時に於ては殊に閒人生活が好い。自分は年四十であるから今引退してもそんなに早いわけてもない。今から塵衣を脱ぎ棄てて老朽ちてしまはないうちに山に歸つて閑居しよう。

題座隅

座隅に題す

手不任執爰。肩不能荷鋤。

手は爰を執るに任へず、肩は鋤を荷ふ能はず。

量力揆所用。曾不敵一夫。

力を量り所用を揆るに、曾て一夫にも敵せず。

幸因筆硯功。得升仕進途。

幸に筆硯の功に因り、仕進の途に升るを得たり。

歷官凡五六。祿俸及妻孥。

官を歷ること凡そ五六、祿俸妻孥に及ぶ。

左右有兼僕。出入有單車。

左右に兼僕有り、出入に單車有り。

自奉雖不厚。亦不至飢飭。

自ら奉ずること厚からずと雖も、亦飢飭に至らず。

若有人及此。傍觀爲何如。

若し人の此に及ぶ有らば、傍より觀て何如と爲す。

雖賢亦爲幸。況我鄙且愚。

賢と雖も亦幸と爲す、況んや我鄙にして且つ愚なるをや。

伯夷古賢人。魯山亦其徒。

伯夷は古の賢人なり、魯山も亦其徒なり。

時哉無奈何。俱化爲餓殍。

時なる哉奈何ともする無し、俱に化して餓殍と爲る。

念彼益自愧。不敢忘斯須。

彼を念うて益自ら愧づ、敢て忘るること斯須もせず。

平生榮利心。破滅無遺餘。

平生榮利の心、破滅して遺餘無し。

猶恐塵妄起。題此於座隅。

猶ほ塵妄の起らんことを恐れ、此を座隅に題す。

【字解】【一】爰。兵器の名。長さ一丈二尺、刃なし。【二】妻孥。妻子なり。【三】兼僕。二三人の召使。【四】單車。一乗の

車。【五】飢勑 飢と苦勞。【六】魯山 自註に、元魯山は山居して水に阻てられ、食絶えて終るとある。【七】餓殍 餓死者。

【八】斯須 しばらく。須臾に同じ。【九】塵妄 榮利の心。

【題義】自ら警めて塵心の起らないやうに座隅に題した詩である。

【詩意】吾が手は武器を執るに任へず、吾が肩は鋤を荷ふに堪へない。自ら己の力を量るに、一人前には足りない男だ。幸にも學問文章の功を以て官職に就くことが出来て、既に五六の官に歴任し俸祿を得て妻子をも養ふことが出来、身のまはりには二三人の召使もあり、出入には車もある。たとひ豊かな生活は出来なくとも飢餓に迫るほどではない。人が傍觀したならば定めて羨むであらう。こんな境遇にあるのは賢者でさへ幸とするに足るのである。まして我のやうな鄙にして愚なる者に取つては、非常な幸福と謂はねばならない。伯夷や魯山は皆古の賢人であるが、時命の然らしむる所奈何ともすることが出来ないで俱に餓死した。吾は大に彼等に對して愧づべきであつて、暫くも忘れたことはない。それが爲に榮利を求める心も消滅して跡形もなくなつた。が、猶ほ榮利の心の兆さんことを恐れて此詩を座隅に書きつけて置く。

昔與微之在朝日同蓄休退之心。迨今十年。淪落老大。追尋前約。且結後期。

昔微之と朝に在りし日、同じく休退の心を蓄ふ。今に迨んで十年、淪落老大なり。前約を追尋し、且つ後期を結ぶ。

往子爲御史。伊余忝拾遺。往に子は御史と爲り、伊れ余拾遺を忝うす。

皆逢盛明代。俱登清近司。皆盛明の代に逢ひ、俱に清近の司に登る。

余繫玉爲珮。子曳繡爲衣。余は玉を繫いで珮と爲し、子は繡を曳いて衣と爲す。

從容香煙下。同侍白玉墀。香煙の下に從容し、同じく白玉の墀に侍す。

朝見寵者辱。暮見安者危。朝に寵ある者の辱めらるるを見、暮に安き者の危きを見る。

紛紛無退者。相顧令人悲。紛紛として退く者無し、相顧みて人をして悲ましむ。

宦情君早厭。世事我深知。宦情君早く厭ひ、世事我深く知る。

常於榮顯日。已約林泉期。常て榮顯の日に於て、已に林泉の期を約す。

況今各流落。身病齒髮衰。況んや今各流落し、身病みて齒髮衰ふ。

不作臥雲計。攜手欲何之。雲に臥す計を作さず、手を攜へて何にかんと欲する。

待君女嫁後。及我官滿時。君が女の嫁する後を待ち、我が官の滿つる時に及び、

開適 昔與微之在朝日同蓄休退之心迨今十年淪落老大追尋前約且結後期

稍無骨肉累。粗有漁樵資。

稍骨肉の累無く、粗漁樵の資有らん。

歲晚青山路。白首期同歸。

歲晚れて青山の路、白首同じく歸らんことを期す。

【字解】【一】休退。官を退くこと。【二】後期。後日の約束。【三】御史。官名。【四】拾遺。官名。【五】清近司。天子に近く奉侍する官職。【六】白玉墀。宮殿なり。【七】紛紛。数の多いこと。退者は無事に退引する者。【八】林泉。隱遁なり。【九】臥雪。前に同じ。【一〇】歲晚。年老ゆ。

【題義】嘗て元微之と朝廷に仕へてゐた時は、早く官を退いて隱居しようとして約束したが、十年を経た今日になつても、引退もし得ないで俱に淪落老衰してゐるのは、感慨無量である。因つて昔の約束を追懐し、更に後日の約束を結ぶといふ意である。

【詩意】昔君は御史となり僕は拾遺となつて、同じく盛明の御宇に遇ひ側近に奉侍し、僕は玉の珮を垂れ君は錦繡の衣をまとうて金殿の上に仕へた。その頃君寵のあつた者が忽ち其寵を失ひ、安泰の地位にゐた者が忽ち失脚することが多く、無事に引退の出来る者は殆ど無いのを見て、君は宮仕がつくづくいやになり、僕も世事の恃み難いことを痛感した。因つて足下の明るうちに早く引退しようとして約束した。まして今日は、各、貶謫の憂目に遇ひ、身は病み形は老いた。今にして歸隱の計を立てないで何としようぞ。君の女が人に嫁し我が任期の満つる頃には、骨肉の厄介もなくなり、漁樵の資力も出来るであらうから、白髮の老人が二人相攜へて青山に歸ると致さう。

垂釣

釣を垂る

臨水一長嘯。忽思十年初。

水に臨んで一たび長嘯し、忽ち思ふ十年の初。

三登甲乙第一入承明廬。

三たび甲乙の第に登り、一たび承明廬に入る。

浮生多變化。外事有盈虛。

浮生變化多く、外事盈虛有り。

今來伴江叟。沙頭坐釣魚。

今來りて江叟に伴ひ、沙頭坐して魚を釣る。

【字解】【一】甲乙第。進士に甲乙の二科あり。進士の試験に及第したこと。【二】承明廬。漢代に侍從の臣のゐた役所。【三】浮生。定めなき人生。

【題義】魚釣に往き感慨を起して作つた詩である。

【詩意】水に臨んで嘯き、忽ち十年間の事を思ひ出した。自分は三たび進士の試験に及第し、一たび侍從の臣となつたが、人生には變化が多く、世事には盈虚があるもので、今は年老いた漁夫に伴つて、この濱邊に釣をしてゐる。變れば變る浮世である。

晚燕

晚燕

百鳥乳雛畢。秋燕獨蹉跎。

百鳥乳雛畢り、秋燕獨り蹉跎たり。

閒適 垂釣 晚燕

去社日已近。銜泥意如何。

社を去ること日已に近し、泥を銜む意如何。

不悟時節晚。徒施工用多。

時節の晚きを悟らず、徒に工用を施すこと多し。

人間事亦爾。不獨燕營窠。

人間の事も亦爾り、獨り燕の窠を營むのみならず。

【字解】【一】乳雞 雛をかへすこと。子を生むこと。【二】蹉跎 時を失ふこと。【三】社 立秋の後第五の戌の日を秋社といふ。燕は秋社の頃に南國に移る習である。【四】窠 燕の巢。

【題義】燕が程なく南國に歸らねばならぬにも拘らず、子を生む爲に其巢を作るのを見て、自己の境遇と酷似してゐることを述べた詩である。

【詩意】他の鳥は皆子を生み畢つたが、燕は此れから子を生む爲に、社日も近くなつて、程なく南國に歸らねばならぬにも拘らず、泥を銜んで巢を作り、時節の晚いのも悟らずに、頻に工力を用ひてゐる。人も此れと同じだ。ただ獨り巢を作る燕ばかりではない。

贖雞

雞を贖ふ

清晨臨江望。水禽正誼繁。

清晨江に臨んで望めば、水禽正に誼繁なり。

鳧雁與鷗鷺。游颺戲朝噉。

鳧雁と鷗鷺と、游颺して朝噉に戲る。

適有鷺雞者。挈之來遠村。

適雞を鷺ぐ者有り、之を挈へて遠村より來る。

飛鳴彼何樂。窘束此何冤。

飛鳴して彼れ何をか樂む、窘束すること此れ何ぞ冤なる。

喔喔十四雛。單縛同一樊。

喔喔たり十四雛、單縛す同一の樊。

足傷金距踏。頭搶花冠翻。

足傷みて金距踏まり、頭搶きて花冠翻る。

經宿廢飲啄。日高詣屠門。

宿を経て飲啄を廢し、日高くして屠門に詣る。

遲廻未死間。飢渴欲相吞。

遲廻して未だ死せざる間、飢渴して相呑まんと欲す。

常慕古人道。仁信及魚豚。

常に慕ふ古人の道、仁信魚豚に及ぶを。

見茲生惻隱。贖放雙林園。

茲を見て惻隱を生じ、贖ひて雙林園に放つ。

開籠解索時。雞聽我言。

籠を開き索を解く時、雞雞我が言を聽け。

與爾鐵三百。小惠何足論。

爾に鐵三百を與ふ、小惠何ぞ論ずるに足らん。

莫學銜環雀。崎嶇謾報恩。

學ぶ莫れ環を銜む雀の、崎嶇として謾に恩に報いしことを。

【字解】【一】誼繁 聲かまびすし。【二】游颺 およいだり、飛びあがつたりする。朝噉は旭日。【三】窘束 拘束されること。【四】喔喔 雞の鳴く聲。【五】樊 鳥籠。【六】金距 けづめ。【七】經宿 前の晩から。宵越しに。【八】屠門 肉市なり。

【九】遲廻 徘徊なり。【一〇】魚豚 易經に、信及魚豚とある。【一一】惻隱 憐愍の情。【一二】鐵 錢貫なり。【一三】

銜環雀。續齊諧記に、楊寶年九歳、華陰山北に至り、一黃雀の鳴鼻の搏つ所となり、樹下に墜つるを見る。寶取り歸り黃花を食はしむること百餘日。毛羽成り乃ち飛び去る。其夜黃衣童子あり寶に向つて再拜して曰く、我は西王母の使者なりと。白環四枚を以て寶に與へて曰く、君の子孫をして位三公に登らしむること當に此環の如くなるべしと、とある。【二四】崎嶇 困難すること。設とは、やたらにの意。

【題義】 雞を買つて放してやつたことを述べた詩である。

【詩意】 朝江上を望むと水禽が喧しく鳴き、鳧雁や鷓鴣が朝日を受けて飛んだり遊んだりして戯れてゐる。折しも雞屋が雞を持つて遠方の村から賣りに來た。かの水禽は飛んだり鳴いたりして何を樂んでゐるであらう。それとは打つて變つて此雞は氣の毒なことに、籠の中に十四羽一緒に拘束されて足が傷いて距が縮まり、頭がつかへて雞冠がゆがみ、宵から飲まず食はずに押込められてゐて、晝になれば肉屋の店に並べられるのだ。籠の中に徘徊してゐる中も腹が減つて共食ひもしかねない有様である。余は常に古人の道の、無智の豚魚をも感動せしめる仁信を慕ふ者である。此を見て忽ち憐愍の情を起し、此雞を買つて雙林園に放してやつた。籠を開き索を解く時に、雞どもに次のやうに申渡した。俺は汝等に三百錢を與へたが、それは誠に小惠で論ずるに足らないのだから、彼の環を銜んで御禮をした雀のまねをして、やたらに恩報じなどをするには及ばぬぞよと。

秋日懷杓直

時杓直出 牧澧州

晚來天色好。獨出江邊步。
憶與李舍人。曲江相近住。
常云遇清景。必約同幽趣。
若不訪我來。還須覓君去。
開眉笑相見。把手期何處。
西寺老胡僧。南園亂松樹。
攜持小酒榼。吟詠新詩句。
同出復同歸。從朝直至暮。
風雨忽消散。江山眇回互。
潯陽與潯陽。相望空雲霧。
心期自乖曠。時景還如故。
今日郡齋中。秋光誰共度。

開適 秋日懷杓直

秋日杓直

時杓直懷杓直 澧州牧

晚來天色好。獨出江邊步。
憶與李舍人と、曲江に相近く住せり。
常に云に清景に遇へば、必ず幽趣を同うせんことを約す。
若し我を訪うて來らずんば、還つて須く君を覓めて去
眉を開いて笑つて相見、手を把つて何の處にか期する。
西寺の老胡僧、南園の亂松樹。
小酒榼を攜持し、新詩句を吟詠す。
同じく出でて復同じく歸り、朝より直に暮に至る。
風雨忽ち消散し、江山眇に回互す。
潯陽と潯陽と、相望めば空しく雲霧。
心期自ら乖曠し、時景還つて故の如し。
今日郡齋の中 秋光誰と共にか度らん。

【字解】【一】李舍人 舍人は官名。李杓直なり。【二】曲江 長安に在る池の名。白樂天は嘗て曲江の畔に住んだ。【三】酒榼 酒樽。【四】潯陽 白樂天の貶せられてゐる處。江西省の江州郡。【五】潯陽 即ち潯州。今の湖南省武陵遺縣。【六】心期 心の約束。【七】郡齋 郡の役所。

【題義】秋、李杓直を懷うて作つた詩である。此時杓直は潯州刺史であつた。

【詩意】夕方になつて天氣が好くなつたので獨りで江邊を散步し、嘗て李舍人と共に曲江の近所に住んでゐた時の事を回想した。あの頃は好景に遇へば必ず幽賞を共にし、君が我を訪はなければ、我が必ず君を訪ひ、手を把つて相喜び、寺の胡僧を訪ねたり、園の亂松を眺めたり、酒を酌んだり、新作を吟じたりして、行動を俱にしたものであつた。それが今は風雨の東西に分散し、江山の遙に對峙するが如く、一は潯陽に在り、一は潯陽に在りて、空しく雲霧を隔て、見る所の景色は昔のままであるが、兩人の親交は阻隔せられ、共に郡官に貶せられ、相攜へて秋色を賞することも出来ない。

食後

食罷一覺睡。起來兩甌茶。

食罷んで一たび睡より覺め、起き來れば兩甌の茶あり。

舉頭看日影。已復西南斜。

頭を舉げて日影を看れば、已に復た西南に斜なり。

樂人惜日促。憂人厭年除。

樂む人は日の促きを惜み、憂ふる人は年の除なるを厭ふ。

無憂無樂者。長短任生涯。

憂も無く樂も無き者は、長短生涯に任す。

【字解】【一】兩甌 二椀。

【題義】食後晝寢の夢が覺めた後の感想を述べた詩である。

【詩意】食事が終つてから一睡し、睡が覺めて二椀の茶を飲んで心を澄まし、頭を舉げて太陽を見れば、已に西南に傾いて今日も復た暮れる。樂のある人は日の短いのを惜み、憂のある人は日の長いのを厭ふものであるが、自分のやうに憂もなければ樂もない者は、長くとも短くとも成行に任せて生涯を送つてゐる。

齊物二首

物を齊うす二首

青松高百尺。綠蕙低數寸。

青松高きこと百尺、綠蕙低きこと數寸。

同生大塊間。長短各有分。

同じく大塊の間に生じ、長短各分有り。

長者不可退。短者不可進。

長き者も退く可からず、短き者も進む可からず。「けん」

若用此理推。窮通兩無悶。

若し此理を用つて推さば、窮通兩ながら悶ふること無し。

【字解】【一】綠蕙 蕙は香草の名。【二】大塊 天地。

【題詩】 莊子に齊物論あり、萬物を同一視して差別を其間に置くべからざることを説いた。この篇も莊子と同じ意味である。

【詩意】 松は高さが百尺もあるが、蕙は僅に數寸に過ぎない。同じく天地の間に生じても、此の如き長短の相違がある。長い者は退けて之を短くすることは出来ず、短い者は進めて之を長くすることは出来ない。長短各その用があるのである。若し此理を推究すれば、窮するも通ずるも敢て憂ふべきではない。

〔二〕

〔二〕

椿壽八千春。槿花不經宿。

椿壽は八千の春、槿花は宿を經ず。

中間復何有。冉冉孤生竹。

中間復何か有る、冉冉たる孤生の竹。

竹身三年老。竹色四時綠。

竹身は三年に老ゆ、竹色は四時に綠なり。

雖謝椿有餘。猶勝槿不足。

椿の餘有るに謝すと雖も、猶ほ槿の足らざるに勝れり。

【字解】 〔一〕 椿壽 莊子逍遙遊篇に、上古有二大椿者、以三八千歲爲春、八千歲爲秋とある。〔二〕 槿花 むくげの花。朝咲いて夕に萎む。經宿は宵を越すこと。〔三〕 冉冉 漸く進む貌。〔四〕 謝 讓る。劣る。

【詩意】 大椿は八千歲を以て春となし、槿花は宵を越すを待たずして萎む。その中間に位するものは

竹であらう。竹の身は三年たてば老いるが、色は四季常に變らない。大椿の長さに比すれば劣つてゐるが、槿花の忽ち萎むに比すれば勝つてゐる。

山下宿

山下に宿す

獨到山下宿。靜向月中行。

獨り山下に到りて宿し、靜に月中に向つて行く。

何處水邊碓。夜春雲母聲。

何處の水邊の碓ぞ、夜雲母を舂く聲あり。

【字解】 〔一〕 碓 からうす。〔二〕 雲母 礦物の名。仙藥に用ふ。卷七の宿三箇寂觀一を見よ。

【題義】 山の下に宿して作つた詩である。

【詩意】 獨り山の下に宿し、靜に月下を歩行した。何處の川邊の水車か知らぬが、雲母を舂く聲が聞える。さては仙術を修業する人が住んでゐると見える。

題舊寫眞圖

舊眞を寫せる圖に題す

我昔三十六。寫貌在丹青。

我昔三十六、貌を寫して丹青に在り。

我今四十六。衰頓臥江城。

我今四十六、衰頓して江城に臥す。

閒適 山下宿 題舊寫眞圖

豈止十年老。曾與衆苦并。

豈に止だ十年老ゆるのみならんや、曾ち衆苦と并す。

一照舊圖畫。無復昔儀形。

一たび舊圖畫に照らすに、復た昔の儀形無し。

形影默相顧。如弟對老兄。

形影默して相顧みれば、弟の老兄に對するが如し。

況使他人見。能不味平生。

況んや他人をして見しめば、能く平生に味からざらんや。

義和鞭日走。不爲我少停。

義和日の走るに鞭ち、我が爲めに少くも停まらず。

形骸屬日月。老去何足驚。

形骸日月に屬す、老去何ぞ驚くに足らんや。

所恨凌煙閣。不得畫功名。

恨む所は凌煙閣に、功名を畫くを得ざるを。

【字解】【一】丹青 畫なり。【二】衰頹 老衰する。江城は江州。【三】義和 日輪の御者。【四】凌煙閣 唐の太宗が功臣の像を畫させた閣の名。

【題義】十年前に書いた肖像畫を見て感慨を述べた詩である。

【詩意】我は昔三十六の時肖像畫を畫かせて置いた。今は四十六になり、老衰して江州に病臥してゐる。ただ十年だけ老けたばかりでなく、色の難儀もして來たので、今もとの肖像畫と實物とを照し合せて見ると、全く昔の儀はない。實物と畫と默して相顧ること、弟の老兄と相對する如くである。まして他人に見せたらば同じ人とは認めぬであらう。歲月はどんどん走つて暫くも停らず、形骸

は歲月に伴つて變るものだから老衰するのは怪むに足らないが、功名を立てて凌煙閣上に畫かれな
いのが残念である。

閒居

閒居

肺病不飲酒。眼昏不讀書。

肺病みて酒を飲まず、眼昏くして書を讀まず。

端然無所作。身意閒有餘。

端然として作す所無く、身意閒にして餘有り。

棲雞籬落晚。雪映林木疎。

雞棲んで籬落晚れ、雪映じて林木疎なり。

幽獨已云極。何必山中居。

幽獨已に云に極まる、何ぞ必ずしも山中に居らんや。

【字解】【一】端然 正しくすわること。【二】雞棲 雞が埒にはひること。籬落は垣根。

【題義】閒居の情趣を述べた詩である。

【詩意】肺の病に罹つて酒を廢し、眼が霞んで讀書を廢し、爲す事もなく端坐してゐると、心も靜で
至つて暇である。折しも雞は埒に就いて垣根のあたりが小暗くなり、疎に生えた林木の間に雪が斑に
映じ、實に幽閑孤獨の極である。閑靜を味ふには必ずしも山中に住むを要しない。

對酒示行簡

酒に對して行簡に示す

今日一樽酒。歡暢何怡怡。
 此樂從中來。他人安得知。
 兄弟唯二人。遠別恒苦悲。
 今春自巴峽。萬里平安歸。
 復有雙幼妹。笄年未結褵。
 昨日嫁娶畢。良人皆可依。
 憂念兩消釋。如刀斷羈縻。
 身輕心無繫。忽欲凌空飛。
 人生苟有累。食肉常如飢。
 我心既無苦。飲水亦可肥。
 行簡勸爾酒。停盃聽我辭。
 不歎鄉國遠。不嫌官祿微。

今日一樽の酒、歡暢何ぞ怡怡たる。
 此樂中より來る、他人安んぞ知るを得ん。
 兄弟唯二人、遠く別れて恒に苦だ悲む。
 今春巴峽より、萬里平安にして歸る。
 復た雙幼妹有り、笄年にして未だ褵を結ばず。
 昨日嫁娶し畢り、良人皆依る可し。
 憂念兩ながら消釋し、刀の羈縻を斷つが如し。
 身軽くして心に繫る無し、忽ち空を凌いで飛ばんと欲す。
 人生苟も累有れば、肉を食ふも常に飢うるが如し。
 我が心既に苦無し、水を飲むも亦肥ゆ可し。
 行簡爾に酒を勸む、盃を停めて我が辭を聽け。
 鄉國の遠きを歎せず、官祿の微なるを嫌はず。

但願我與爾終老不相離。

但願くは我と爾と、終老相離れざらんことを。

【字解】 一 怡怡、よろこぶ貌。 二 從中來、心の中から湧いて來る。 三 巴峽、地名。行簡は蜀にゐたが、舟で巴峽を下つて樂天の處へ來た。 四 笄年、女子の成年者をいふ。禮記に、女子十有五年にして笄すとある。結褵とは嫁すること。褵は香囊なり。詩經に、親結其笄とあり。褵は嫁して後佩ぶるものとす。 五 良人、をつと。 六 羈縻、縛つてある繩。

【題義】 酒に對して弟なる白行簡に示した詩である。

【詩意】 今朝お前と酒に對するのは實に愉快でたまらない。腹の中から喜がこみあげて來る。とても他人にはわかるまい。俺とお前とは、たつた二人の兄弟で、遠く別れて常に苦んでゐたが、今春巴峽から萬里の長途を無事にお前が歸つて來た。また二人の幼妹があつて皆成年に達してゐたが、先頃人に嫁し、各依るべき良人が定まつた。これで憂念が釋けて、繩目が解けたやうに身も心も軽くなり、空にも飛びあがりさうである。人には心に累があつては何を食つても旨くはない。俺は心に苦がないから、水を飲んでも肥えるであらう。今お前に盃をさす前に一應俺の辭を聽いてくれ。郷里を遠く離れてゐることは嘆ずるに足らぬ。又官祿の微少なことも嫌ひはせぬ。ただお前と永く離れずに一生を終りたいものだ。

詠懷

懷を詠ず

冉牛與顏淵。卞和與馬遷。

冉牛と顏淵と、卞和と馬遷と、

或罹天六極。或被人刑殘。

或は天の六極に罹り、或は人に刑殘せらる。

顧我信爲幸。百骸且完全。

我を顧みるに信に幸と爲す、百骸且つ完全なり。

五十不爲天。吾今欠數年。

五十天と爲さず、吾今數年を欠く。

知分心自足。委順身常安。

分を知れば心自ら足り、順に委すれば身常に安し。

故雖窮退日。而無戚戚顔。

故に窮退の日と雖も、而も戚戚の顔無し。

昔有榮先生。從事於其間。

昔榮先生有り、其間に從事す。

今我不量力。舉心欲攀援。

今我力を量らず、心を舉げて攀援せんと欲す。

窮通不由己。歡戚不由天。

窮通は己に由らず、歡戚は天に由らず。

命卽無奈何。心可使泰然。

命は卽ち奈何ともする無く、心は泰然たらしむ可し。

且務由己者。省躬諒非難。

且く己に由る者を務めよ、躬を省みること諒に難きに非ず。

勿問由天者。天高難與言。

天に由る者を問ふ勿れ、天は高くして與に言ひ難し。

【字解】(一)冉牛 孔子の弟子冉耕、字は伯牛。癩病に罹つた。顏淵は孔子の弟子顏回、天死した。(二)卞和 玉を楚王に獻じたが、誤つて石だと鑑定され、玉を欺いた罪で刑にせられた。(三)六極

書經に、威用三六極、一日凶短折、二日疾、三日憂、四日貧、五日惡、六日弱とある。【四】刑殘 殘は害なり。【五】委順 自然の運命に順應すること。【六】戚戚 憂ふる貌。【七】榮先生 榮啓期なり。孔子泰山に遊び啓期の鹿裘帶索、琴を鼓して歌ふを見、

問うて曰く、先生何をか樂むと。曰く吾が樂最も多し。天萬物を生ず。人を貴しとなす。吾人たるを得たるは一樂なり。男女の別、男は尊く女は卑し。吾男たるを得たるは二樂なり云々と。【八】由天者 天命、運命。

【題義】己の感慨を述べた詩である。

【詩意】冉伯牛・顏淵・卞和・司馬遷等は、或は天刑に罹り或は刑罰に罹つた。我自ら顧みるに刑罰を免れて身體は完全であり、又天刑を免れて五十近くまで生きてゐるのは實に幸福である。己の分を知り

天命に順へば心身共に安靜である。故に貶謫に遇つても憂愁するやうなことはない。昔榮啓期は此種の修養を積んだが、自分も己の力を量らずして其風を追求しようと思つてゐる。抑窮通は己に由るのではなくて天命に由るのである。喜憂は天命に由るのではなくて己に由るのである。天命は人力を以て奈何ともすべからず。心は泰然として安靜ならしめることが出来る。人は宜しく己に由るものを務むべきであつて、天命は天に任せて置くべきである。

夜琴

夜琴

蜀桐木性實。楚絲音韻清。

蜀の桐は木の性質なり、楚の絲は音韻清し。

調慢彈且緩。夜深十數聲。
入耳淡無味。愜心潛有情。
自弄還自罷。亦不要人聽。

調慢にして弾くこと且つ緩し、夜深けて十數聲。
耳に入りて淡くして味無く、心に愜うて潛に情有り。
自ら弄びて還た自ら罷む、亦人の聽かんことを要せず。

【題義】夜、琴を弾じて自ら樂むことを述べた詩である。

【詩意】蜀の桐は木の性質が緻密で、楚の絲は音色が澄んでゐる。ゆるやかに夜深けて獨りかきならせば、淡泊で何の味もなけれど、靜に聽けば仲仲風情がある。彈きたい時に彈いて飽きればやめ、ただ自ら樂むので、人に聽いてもらはうといふのではない。

山中獨吟

山中獨吟

人各有一癖。我癖在章句。
萬緣皆已消。此病獨未去。
每逢美風景。或對好親故。
高聲詠一篇。恍若與神遇。

人各一癖有り、我が癖は章句に在り。
萬緣皆已に消し、此病獨未だ去らず。
美風景に逢ひ、或は好親故に對する毎に、
高聲に一篇を詠じ、恍として神と遇ふが若し。

自爲江上客。半在山中住。
有時新詩成。獨上東巖路。
身倚白石崖。手攀青桂樹。
狂吟驚林壑。猿鳥皆窺覩。
恐爲世所嗤。故就無人處。

江上の客と爲りし自り、半山の中に在りて住す。
時有りて新詩成り、獨り東巖の路に上る。
身は白石の崖に倚り、手は青桂の樹を攀ぶ。
狂吟して林壑を驚かし、猿鳥皆窺覩す。
世の嗤ふ所と爲らんことを恐れ、故に人無き處に就く。

【字解】【一】章句 詩をいふ。【二】萬緣 多くの俗緣。【三】好親故 よき親戚故舊。【四】恍 うつとりとして心を失ふ貌。
【五】江上客 江州に貶せられたこと。

【題義】山中で獨り自作の詩を吟ずることを述べた詩である。

【詩意】人には皆それぞれ癖があるが、我が癖は詩である。多くの俗緣は凡て消え去つたが、ただ詩の病癖だけはまだ残つてゐる。よい景色や親しい人人に逢へば必ず一篇の詩を吟ずるが、その時は全く己を忘れて神と遇つたやうな心持がする。江州に貶せられてからは半は山中に住んだが、時に新詩が出来ると、獨りで東巖の路に上り往き、白石に倚り青桂を攀む、狂聲を張り揚げて其詩を吟ずる。猿や鳥が驚いて覗き込んでゐる。實は世人が笑ふであらうと氣遣つて、わざと人のゐない處で吟ずるのだ。

達理二首

理に達す二首

何物壯不老。何時窮不通。

何物か壯にして老いざる、何の時か窮して通せざる。

如彼音與律。宛轉旋爲宮。

彼の音と律との如し、宛轉して旋つて宮と爲る。

我命獨何薄。多悴而少豐。

我が命獨り何ぞ薄き、悴むこと多くして豊かなること少し。

當壯已先衰。暫泰還長窮。

壯なるに當りて已に先づ衰へ、暫く泰にして還長く窮す。

我無奈何。委順以待終。

我命を奈何ともする無し、順に委して以て終りを待つ。

命無奈何。方寸如虛空。

命我を奈何ともする無し、方寸虛空の如し。

曹然與化俱。混然與俗同。

曹然として化と俱にし、混然として俗と同じうす。

誰能坐此苦。齟齬於其中。

誰か能く此苦に坐し、其中に齟齬せんや。

【字解】

【一】宛轉 うつりかはる。宮は音律の名、五音の一。【二】委順 天命の自然に順應する。【三】方寸 心をいふ。

【四】曹然

暗昧の貌。化は自然の運行。【五】混然 混同する貌。【六】齟齬 くひちがふこと。苦惱すること。

【題義】

天理に通達して自然の運に任せることを述べた詩である。

【詩意】

如何なる物でも壯にして老いぬ物はなく、窮すれば何日かは又通ずるものである。譬へば音律が宮から徵商羽角の四音が出で、それから復宮に還るやうなものだ。が、我獨り何故かくは薄命

なのであらうか。壯なるべきに先づ已に衰へ、安泰なことは暫くで窮することが長い。けれども、天命はどうすることも出来ない。ただ運に任せて一生を終るまでのことだ。又運命と雖も我を苦めることは出来ない。余が心は虚空の如く平然としてゐる。余は自然の化に任せ世俗と態を同うし、苦の中に在つても其れが爲に心を悩ますことはしない。

〔一〕

〔二〕

舒姑化爲泉。牛哀病作虎。

舒姑化して泉と爲り、牛哀病んで虎と作る。

或柳生肘間。或男變爲女。

或は柳肘間に生じ、或は男變じて女と爲る。

鳥獸及水木。本不與民伍。

鳥獸及び水木、本民と伍せず。

胡然生變遷。不待死歸土。

胡然ぞ生れて變遷し、死して土に歸するを待たざる。

百骸是己物。尙不能爲主。

百骸は是れ己が物なり、尙ほ主と爲ること能はず。

況彼時命間。倚伏何足數。

況んや彼の時命の間、倚伏何ぞ數ふるに足らん。

時來不可遏。命去焉能取。

時來りて遏む可からず、命去りて焉ぞ能く取らん。

唯當養浩然。吾聞達人語。

唯當に浩然を養ふべし、吾達人の語を聞けり。

【字解】【一】舒姑 宣城記に、昔舒氏の女あり、父と薪を蓋山に析く。忽ち泉の處に坐し牽挽すれども動かす。父遽に家に告ぐ。還るに及んで唯清泉の湛然たるを見る、とある。【二】牛哀 淮南子に、牛哀病むこと七日、化して虎となる、とある。【三】柳 莊子至樂篇に、柳生其左肘とある。【四】時命 時運天命。【五】倚伏 禍福の互に相因つて至ること。老子に、禍兮福所倚、福兮禍所伏とある。【六】浩然 廣大なる氣象。【七】達人 事理に通達した人。

【詩意】舒姑は化して泉となり、牛哀は病んで虎となり、或は柳が肘に生じ、或は男が變つて女になる。此等の鳥獸水木は人間とは類を異にするものであるのに、死して土に歸するを待たずして、なせ變化往來するのであらう。又吾が身は己の所有物である。然るに其れさへ自分が主となつて自由にすることは出来ない。まして時運天命には禍福の相違があつて、紛紛として數ふるを待たないほど多い。時運か向いて來れば之を拒むことは出来ず、又天命が去れば之を捕へて置くことは出来ない。ただ宜しく浩然の氣を養つて禍福を以て喜憂をなさぬがよい。これは達人の言ふ所で、疑のない言葉だ。

湖亭晚望殘水

湖亭にて晩に殘水を望む

湖上秋次寥。湘邊晚蕭瑟。

湖上秋次寥たり、湖邊晩に蕭瑟たり。

登亭望湖水。水縮湖底出。

亭に登りて湖水を望めば、水縮つて湖底出づ。

清渟得早霜。明滅浮殘日。

清渟つて早霜を得、明滅びて殘日を浮ぶ。

流注隨地勢。窪坳無定質。

流注地勢に隨ひ、窪坳定質無し。

泓澄白龍臥。宛轉青蛇屈。

泓澄として白龍臥し、宛轉として青蛇屈す。

破鏡折劍頭。光芒又非一。

破鏡劍頭を折り、光芒又一に非ず。

久爲山水客。見盡幽奇物。

久しく山水の客と爲り、見盡す幽奇の物。

及來湖亭望。此狀難談悉。

湖亭に來りて望むに及び、此狀談じ悉し難し。

乃知天地間。勝事殊未畢。

乃ち知る天地の間、勝事殊に未だ畢きざるを。

【字解】【一】次寥 空虚なる貌。【二】蕭瑟 さびしき貌。【三】窪坳 くぼみたる處。【四】泓澄 深く清き貌。【五】宛轉 屈曲する貌。【六】勝事 すぐれた景色。

【題義】湖亭の上から夕方酒あがつた殘水を望見して作つた詩である。

【詩意】湖のほとりは秋色が清く、夕方は殊に物淋しい。亭に登つて湖を眺望すると水が乾て底が現れてゐる。清く流の停つてゐる所は霜が降つたやうで、光の消滅してゐる所は殘日を浮べたやうで、地勢に隨つて曲折し、或は窪く或は高くなつてゐる。深く澄んだ處は白龍の臥すが如く、宛轉としてゐる處は青蛇の屈するが如く、或は鏡の破れ劍の折れたるが如く、その光が様様である。自分は久しく山水の間に住んで珍らしい景色も見盡したが、今この湖亭から眺めた景色は千様萬態で一述べ盡

すことは出来^てない。以て天地間の奇勝は窮^きりなく多^{おほ}いことがわかる。

郭虚舟相訪

郭虚舟相訪^ふ

朝暖就^つ南軒。暮寒歸^{かへ}後屋。

朝暖^{あさあたたか}かにして南軒^{なんけん}に就^つき、暮寒^{くれさむ}くして後屋^{こうおく}に歸^{かへ}る。

晚酌一兩盃。夜棊三數局。

晚酌^{ばんしやく}一兩盃^{りやうはい}、夜棊^{やき}三數局^{さんすうきよく}。

寒灰埋^{うづ}暗火。曉焰凝^こ殘燭。

寒灰^{かんくわい}暗火^{あんくわ}を埋^{うづ}め、曉焰^{げうせん}殘燭^{ざんしよく}を凝^こらす。

不嫌貧冷人。時來同一宿。

貧冷^{ひんれい}の人^{ひと}を嫌^{きら}はず、時^{とき}に來^{きた}りて一宿^{しよく}を同^{おな}じうす。

【題義】郭虚舟の來り訪ひ、遂に一宿したことを述べた詩である。

【詩意】朝は日當りのよい南の軒に往き、日が暮れて寒くなれば後の家に歸り、晚酌を俱にして二三番棊を鬪はし、火を埋めて寢に就き、夜が明けても尙ほ燈がついてゐる。貧賤の人でも敢て厭はないので、時時來ては宿つて往く。

白樂天詩集 卷八

閒適四 古詩調凡二十七首

長慶二年七月自中書舍人出守杭州路次藍

溪作 自此後詩、俱赴杭州時作

長慶二年七月、中書舍人より出されて杭州に守たり、路藍溪に次りて作る

太原一男子。自顧庸且鄙。

太原の一男子、自ら顧みるに庸にして且つ鄙なり。

老逢不次恩。洗拔出泥滓。

老いて不次の恩に逢ひ、洗拔せられて泥滓を出す。

既居可言地。願助朝廷理。

既に言ふ可きの地に居る、朝廷の理を助けんことを願ふ。

伏閣三上章。戇愚不稱旨。

閣に伏して三たび章を上れども、戇愚にして旨に稱はず。

聖人存大體。優貸容不死。

聖人大體を存す、優貸して不死を容す。

閒適 長慶二年七月自中書舍人出守杭州路次藍溪作

鳳詔停舍人。魚書除刺史。

鳳詔舍人を停め、魚書刺史に除す。

冥懷齊寵辱。委順隨行止。

冥懷寵辱を齊うし、順に委して行止に隨ふ。

我自得此心。于茲十年矣。

我此心を得てより、茲に十年なり。

餘杭乃名郡。郡郭臨江汜。

餘杭は乃ち名郡、郡郭江汜に臨む。

已想海門山。潮聲來入耳。

已に想ふ海門の山、潮聲來りて耳に入るを。

昔予貞元末。羈旅曾遊此。

昔予貞元の末、羈旅して曾て此に遊ぶ。

甚覺太守尊。亦諳魚酒美。

甚だ太守の尊きを覺え、亦魚酒の美を諳んず。

因生江海興。每羨滄浪水。

因て江海の興を生じ、毎に滄浪の水を羨む。

尚擬拂衣行。況今兼祿仕。

尚衣を拂うて行かんと擬す、況んや今祿仕を兼ねるをや。

青山峰巒接。白日煙塵起。

青山峰巒接し、白日煙塵起る。

東道既不通。改轅遂南指。

東道既に通せず、轅を改めて遂に南指す。

自秦窮楚越。浩蕩五千里。

秦より楚越を窮め、浩蕩五千里。

聞有賢主人。而多好山水。

聞く賢主人有り、而して好山水多しと。

是行頗爲愜。所歷良可紀。
策馬渡藍溪。勝遊從此始。

是行頗る愜ふを爲す、歷る所良に紀す可し。
馬に策つて藍溪を渡り、勝遊此より始まる。

【字解】 一 太原一男子。白樂天自ら謂ふ。樂天は太原の人である。 二 不次。順序に因らない。 三 泥滓。泥土。 四 可。言地。天子を諫める地位。中書舍人になつたこと。 五 理。治なり。 六 閤。宮門なり。 七 驢。馬鹿正直。 八 聖人。聖天子。 九 優貸。罪をゆるすこと。 一〇 鳳詔。天子の詔。舍人は中書舍人。 一一 魚書。魚符なり。策書なり。刺史は州の長官。除は任命すること。 一二 冥懷。暗昧の心。 一三 委順。運命に任せる。 一四 餘杭。浙江省杭州。 一五 江汜。川のほとり。 一六 羈旅。旅行。 一七 太守。刺史なり。 一八 滄浪。水の色なり。 一九 浩蕩。遙遠の貌。

【題義】 長慶（穆宗の年號）二年七月、白樂天は中書舍人（長慶元年に、中書舍人知制誥に任ぜられた）から杭州刺史に轉任を命ぜられた。この詩は長安を出て杭州に往く時、藍溪（陝西省藍田縣の東南に在り。後の宿藍溪對月、參照）に宿つて作つた詩である。

【詩意】 吾は自ら顧みるに庸愚鄙陋の身である。それにも拘らず老年になつて不次の恩遇を蒙り、諫官の顯職に陞つたので、朝政を裨補しようと思ひ、三たび上書して意見を陳べたけれども、愚直なので天子の御意に叶はなかつた。然し特別の御憐憫を垂れ給うて誅戮を加へられず、中書舍人を免じて杭州刺史に任ぜられた。吾はもと寵辱を同一視し運に任せて行止する修養を積み、此心を悟り得てから既に十年になるから、遠地に轉任を命ぜられても格別意に介しない。殊に杭州は名勝の地で城郭

開道 長慶二年七月自中書舍人出守杭州路次藍溪作

が江濱に臨み、海門の山の潮聲が此處にゐても耳に聞えるやうに想はれる。(錢塘江の兩岸に龜、猪の二山があつて、南と北に相對峙すること門のやうである、潮汐が此二山に束ねられ勢極めて湍悍、萬馬の奔騰するが如くである。浙江の潮と稱して古來世に其名が高い)嘗て貞元の末に、一度杭州に遊び刺史の權勢のあるのも知り、魚や酒のよいのも知つてゐる。因つて江海の興が起つて官を退いて行つて遊ばうかと思つたのに、今官職を帯びて其地に往くことになつたのは勿怪の幸と謂ふべきである。ただ東の方の道は峯巒が連續して居り、且つ戰亂も起つて通れないから、方向を轉じて南を指して進むことにした。この秦(長安)から楚越に至るには、五千里の里程があるが、聞けば行先には賢主人もあり好山水もあるさうであるから、此行は頗る吾が意を得たもので、到處紀すべきものも多いであらう。馬に鞭つて藍溪を渡れば愈形勝の地に踏み込むわけだ。

【餘論】唐宋詩醇に、中間舊遊一層を以て襯となし、波を推し、瀾を助け、曲折あるを致す。白文公年譜に云ふ、河朔復亂れ、居易數上疏して其事を論ず、天子用ふる能はず、遂に外任を求む。蓋し穆宗荒縱、宰相蕭俛、杜元穎、崔植等、皆齷齪遠略無し、宜なり公の朝に居るを樂まざるや。時に汴軍亂れて路通せず、故に襄漢より任に赴く、とある。

初出城留別

初めて城を出でて留別す

朝從紫禁歸。暮出青門去。

朝には紫禁より歸り、暮には青門を出でて去る。

勿言城東陌。便是江南路。

言ふ勿れ城東の陌と、便ち是れ江南の路。

揚鞭簇車馬。揮手辭親故。

鞭を揚げて車馬簇り、手を揮ひて親故を辭す。

我生本無鄉。心安是歸處。

我生れて本郷無し、心安きは是れ歸處。

【字解】 一 出城。長安の都を出る。留別とは後に留まる人に贈りて別ること。 二 紫禁。天子の宮殿。 三 青門。長安城の東南の門。 四 親故。親戚故舊。

【題義】 初めて長安城を出でて親戚故舊に留別した詩である。

【詩意】 朝宮城から歸つて其夕方青門を出て長安を去ることになつた。ここは城東の巷たと言つて平氣でもゐられない。これから江南の杭州に往く門出だから、何となく感慨が深い。見送りの車馬が澤山來た。因つて手を揮つて故舊に暇を告げる。よく考へて見れば自分は何處が故郷と定まつた處はないのだから、氣樂な處が吾が落著くべき土地だ。杭州でも結構だ。

過駱山人野居小池

駱生棄官居 駱山人が野居の小池に過る

茅覆環堵亭。泉添方丈沼。

此、二十餘年 茅は環堵の亭を覆ひ、泉は方丈の沼に添ふ。

開通 初出城留別 過駱山人野居小池

紅芳照水荷。白頸觀魚鳥。

紅芳水を照す荷、白頸魚を觀る鳥。

拳石苔蒼翠。尺波煙杳眇。

拳石苔蒼翠、尺波煙杳眇。

但問有意無。勿論池大小。

但問ふ意有りや無や、池の大小を論ずる勿かれ、

門前車馬路。奔走無昏曉。

門前車馬の路、奔走昏曉無し。

名利驅人心。賢愚同擾擾。

名利人の心を驅り、賢愚同じく擾擾たり。

善哉駱處士。安置身心了。

善いかな駱處士、身心を安置し了る。

何乃獨多君。丘園居者少。

何ぞ乃ち獨り君を多とするのみならん。丘園居る者少。

【字解】 一 環堵。禮記に、儒は一畝の宮、環堵の室ありとある。註に、堵は長さ一丈高さ一尺、而して一堵を環るを方丈となすとある。 二 方丈。一丈四方。 三 荷。蓮花。 四 拳石。拳ほどの石。 五 杳眇。小暗きさま。 六 昏曉。朝暮。 七 擾擾。紛紛に同じ、數多き貌。 八 丘園。隱居の地。

【題義】 駱山人の隱居を訪うて作つた詩である。

【詩意】 茅葺の小亭があつて、其前に泉が小池に流れ注いでゐる。紅の芳しい蓮花が池の水を照し、白い頸の鳥が魚を狙つてゐる。小石には緑の苔が蒸し、煙波が水面を罩めてゐる。池の大小は問題ではない。唯之を賞する人の意が問題なのである。門前には車馬を驅りて名利に奔走する者が朝から晩

まで絶間がない。ただ駱處士は身心を安置して此處に隱居してゐる。實に見上げた態度である。余は唯獨り君の隱居を稱するばかりではない、世に隱居する者の少いのを嘆くのである。

宿清源寺

清源寺に宿す

往謫潯陽去。夜憩輞溪曲。

往に潯陽に謫せられて去るとき、夜輞溪の曲に憩ふ。

今爲錢塘行。重經茲寺宿。

今錢塘の行を爲し、重ねて茲寺を経て宿す。

爾來幾何歲。溪草二八綠。

爾來幾何歲ぞ、溪草二八の緑。

不見舊房僧。蒼然新樹木。

見ず舊房の僧、蒼然たり新樹の木。

虛空走日月。世界遷陵谷。

虚空日月を走らし、世界陵谷を遷す。

我生寄其間。孰能逃倚伏。

我が生其間に寄す、孰か能く倚伏を逃れん。

隨緣又南去。好住東廊竹。

緣に隨つて又南に去る、好住せよ東廊の竹。

【字解】 一 輞溪。輞谷ともいふ。陝西省藍田縣の西南に在り。王維の別荘の在りし處。清源寺、ここに在り。 二 錢塘。杭州なり。 三 新樹。新に植ゑた。 四 陵谷。山が變じて谷になる。 五 倚伏。禍福なり。卷七の達理二首を見よ。 六 好住。

健在といふが如し。

【題義】 輞溪の清源寺に宿して作つた詩である。

【詩意】 先年潯陽（江州）に流されて往く時にも輞溪の清源寺に休憩したことがあつたが、今度杭州へ赴任するに方り、重ねて此寺に宿ることになつた。あの時からでは最早十六年を経てゐるから、嘗てゐた僧などは見えず、新しく植ゑた木が蒼然と茂つてゐる。月日は休みなしに走り、世は陵谷の變を續けてゐる。其間に生を享けた我も禍福の推移を免れない。されば縁に隨つて南方の杭州に往くことになつた。東廊の竹よ無事であるよ。縁あらば又逢はうせ。

宿藍溪對月

藍溪に宿し月に對す

昨夜鳳池頭。今夜藍溪口。

昨夜鳳池の頭、今夜藍溪の口。

明月本無心。行人自回首。

明月本心無し、行人自ら首を回らす。

新秋松影下。半夜鐘聲後。

新秋松影の下、半夜鐘聲の後。

清影不宜昏。聊將茶代酒。

清影宜しく昏すべからず、聊か茶を將つて酒に代ふ。

【字解】

【一】 鳳池。鳳凰池の略。禁苑中の池沼。中書省の在る處。【二】 藍溪。一に藍橋に作る。【三】 行人。旅立つ人。樂天

自ら謂ふ。

【題義】 藍溪に宿し月に對して作つた詩である。この詩は文苑英華には宿藍橋題月と題してある。藍橋は陝西省藍田縣の東南に在る。蓋し藍水の上に架けてある橋だから藍橋といふのであらう。

【詩意】 昨夜は宮中の鳳凰池の畔で此月を見たが、今夜は藍溪の口で見る。月には何の心もないが、旅に出る身は感慨のあまり自然と仰ぎ見るやうになる。殊に秋夜の松の下、夜半の鐘の後に於て最も懐かしさを感じる。月の清光は酒を勧めて之を瀆すのは宜しくないから、酒の代りに茶を勧める。

自望秦赴五松驛馬上偶睡睡覺成吟

望秦より五松驛に赴く、馬上偶睡る、睡覺めて吟を成す

長途發已久。前館行未至。

長途發すること已に久し、前館行いて未だ至らず。

體倦目已昏。瞋然遂成睡。

體倦みて目己に昏く、瞋然として遂に睡を成す。

右袂尙垂鞭。左手暫委轡。

右袂尙ほ鞭を垂れ、左手暫く轡を委ぬ。

忽覺問僕夫。纔行百步地。

忽ち覺めて僕夫に問へば、纔に行く百歩の地。

閒適 宿藍溪對月 自望秦赴五松驛馬上偶睡睡覺成吟

形神分處所。遲速相乖異。形神處所を分つ、遲速相乖異す。

馬上幾多時。夢中無限事。馬上幾多時ぞ、夢中無限無き事。

誠哉達人語。百齡同一寐。誠なる哉達人の語、百齡一寐に同じ。

【字解】 一 望秦 地名であらう。全唐詩には秦望に作る。 二 臆然 疲れて眠る貌。 三 達人 道理に通じた人。

【題義】 望秦から五松驛に赴く間に、馬に乗つてゐて、うとうとと睡つたが、その睡から覺めて作つた詩である。

【詩意】 長途に向つて出發してから大分久しくなるが、まだ目的とする宿まで行き著けな。つい體が疲れて馬の上で睡つた。右の袖の所に鞭が下つて左手に暫く手綱を任せてある。驚き覺めて馬丁に問へば、僅に百歩ばかり進んだだけだといふ。身心の分明なると否とで、かくの如く遲速が異なるのである。馬上に睡つたのは僅の時間であるが、その間に色色な夢を見た。達人の言葉に百年の齡も一睡に同じだとあるが、實に其通りである。

鄧州路中作

鄧州路中の作

蕭蕭誰家村。秋梨葉半赤。

蕭蕭たり誰が家の村ぞ、秋梨葉半赤し。

漠漠誰家園。秋韭花初白。

漠漠たり誰が家の園ぞ、秋韭花初めて白し。

路逢故里物。使我嗟行役。

路に故里の物に逢ひ、我をして行役を嗟かしむ。

不歸渭北村。又作江南客。

渭北の村に歸らず、又江南の客と作る。

去鄉徒自苦。濟世終無益。

郷を去り徒に自ら苦む、世を濟ふ終に益無し。

自問波上萍。何如澗中石。

自ら問ふ波上の萍、何ぞ澗中の石に如かん。

【字解】 一 鄧州 河南省南陽府。 二 蕭蕭 風の聲。誰家は何處なり。 三 漠漠 布列の貌。 四 秋韭 韭はニラ。

【五】 行役 旅に出て役勤めする。 【六】 渭北村 渭水の北の村。長安の附近に在り、樂天は嘗て此に住んだ。

【題義】 鄧州の道中で作つた詩である。

【詩意】 何處の村か知らぬが秋風が吹いて梨の花が半色づいてゐる。又誰の園か知らぬが韭の花が眞白に咲き亂れてゐる。途中で故里の物を見ると、旅に出てゐる我が身が悲しくなる。況んや渭北の村に歸るのではなく、遠い江南の杭州へ行くのだから。世を濟ふ志も成らずに故郷を去つて難儀する我が身は波に漂ふ萍のやうだ。谷川の石の一處に安住してゐるのに劣ること萬萬である。

朱藤杖紫驄馬吟

朱藤杖紫驄馬吟

挂上山之上。

挂へて山の上へ上り、

騎下山之下。

騎りて山の下に下る。

江州去日朱藤杖。

江州より去りし日の朱藤杖、

忠州歸時紫驄馬。

忠州より歸る時の紫驄馬。

天生二物齊我窮。

天生二物を生じて我が窮を濟ふ、

我生合是栖栖者。

我が生は合に是れ栖栖たる者なるべし。

【題義】杖と馬とに就ての感想を述べた詩である。

【詩意】一は吾が身を挂へて山に登り、一は吾が身を乗せて山を下る。一は江州を去る時の記念の杖で、一は忠州から歸る時の記念の馬である。天は此二物を作つて我が窮を救ふのである。我は東西に奔走して安住の地を得ない者であるから。

桐樹館重題

桐樹館に重ねて題す

塔前下馬時。梁上題詩處。

塔前馬を下る時、梁上詩を題する處

慘淡病使君。蕭疎老松樹。

慘淡たり病使君、蕭疎たり老松樹。

自嗟還自哂。又向杭州去。

自ら嗟き還た自ら哂ふ、又杭州に向つて去ることを。

【字解】一、慘淡、痛ましき貌。使君は刺史の稱。病使君とは樂天自ら謂ふなり。二、蕭疎、さびしくまばらなこと。

【題義】嘗て桐樹館に詩を題したことがあつて、今度杭州刺史として赴任する途すがら又此に休憩したので、更に詩を題したのである。

【詩意】桐樹館の塔段の前で馬から下り、梁上に詩を題した。痛ましいいさまなる病刺史殿が、疎に淋しく立つてゐる老松に對し、深く感慨に打たれ、又杭州に向つて去ることを自ら嗟き又自ら嘲笑した。

過紫霞蘭若

紫霞の蘭若に過る

我愛此山頭。及此三登歷。

我此山頭を愛し、此に及んで三たび登歷す。

紫霞舊精舍。寥落空泉石。

紫霞の舊精舍、寥落たる空泉石。

開適 失藤杖紫驄馬吟 桐樹館重題 過紫霞蘭若

朝市日喧隘。雲林長悄寂。
猶存住寺僧。肯有歸山客。

【字解】 一 紫霞 山の名か。精舎は寺院。 二 寥落 荒れ果てた貌。 三 喧隘 こみあひてうるさきこと。 四 存 存問なり。

【題義】 紫霞山の寺院に過りて作つた詩である。

【詩意】 我は此山を愛して今日まで既に三回登つた。寺院は古び、泉石は荒れ、都會は騒がしいが山寺はいつ來て見ても静でよい。住寺の僧に挨拶して、俺も山寺に歸つて來たぞよと冗談を言つて見た。

感舊紗帽 帽即故李侍御所贈

舊紗帽に感ず

昔君烏紗帽。贈我白頭翁。

昔君が烏紗の帽、我が白頭の翁に贈る。

帽今在頂上。君已歸泉中。

帽は今頂上に在り、君は已に泉中に歸る。

物故猶堪用。人亡不可逢。

物は故りて猶ほ用ふるに堪へたり、人は亡すれば逢ふ可からず。

岐山今夜月。墳樹正秋風。

岐山今夜の月、墳樹正に秋風。

【字解】 一 烏紗帽 黒い紗で作つた帽子。 二 頂上 頭の上。 三 泉中 黄泉。地下。 四 岐山 山の名。 五 墳樹 墓の木。

【題義】 亡友李侍御から貰つた古帽子に感じて作つた詩である。

【詩意】 昔君は黒い紗の帽子を此白頭翁なる我にくれた。その帽子は今尙吾が頭上に在るが、君は既に地下の人になつてしまつた。物は古くなつても役に立つが、人は死ぬと再び逢ふことは出来ない。今夜岐山の上に輝く明月が秋風に吹かれる墓上の樹を淋しく照してゐる。

思竹窓

竹窓を思ふ

不憶西省松。不憶南宮菊。

西省の松を憶はず、南宮の菊を憶はず。

惟憶新昌堂。蕭蕭北窓竹。

惟だ憶ふ新昌の堂、蕭蕭たる北窓の竹。

窓間枕簟在。來後何人宿。

窓間枕簟在り、來後何人か宿する。

【字解】 一 西省 自註に、西省大院有松とある。 二 南宮 自註に、南宮本廳有菊とある。 三 新昌 今の浙江省紹興府新昌縣。 四 蕭蕭 風の聲。 五 枕簟 簟は竹で編んだムシロ。

【題義】 新昌縣の竹窓を思つて作つた詩である。

閑適 感舊紗帽 思竹窓

【詩意】西省の松や南宮の菊は格別思ひ出さないが、新昌縣の北窓の竹だけは、よく思ひ出す。あの窓の下の枕簟には、僕の來た後、何人が宿つたであらうか。

馬上作

馬上の作

處世非不遇。榮身頗有餘。
勳爲上柱國。爵乃朝大夫。
自問有何才。兩入承明廬。
又問有何政。再駕朱輪車。
矧予東山人。自惟朴且疎。
彈琴復有酒。但慕嵇阮徒。
闇被鄉里薦。誤上賢能書。
一列朝士籍。遂爲世網拘。
高有罾繳憂。下有陷穽虞。

世に處して遇はざるに非ず、身を榮する頗る餘有り。
勳は上柱國と爲り、爵は乃ち朝大夫。
自ら問ふ何の才か有りて、兩たび承明廬に入る。
又問ふ何の政か有りて、再び朱輪の車に駕する。
矧んや予は東山人、自ら惟ふに朴にして且つ疎なり。
琴を弾じて復た酒有り、但嵇阮が徒を慕ふ。
闇に郷里に薦められ、誤りて賢能の書を上る。
一たび朝士の籍に列り、遂に世網に拘せらる。
高きは罾繳の憂有り、下きは陷穽の虞有り。

每覺宇宙窄。未嘗心體舒。

毎に覺ゆ宇宙の窄きを、未だ嘗て心體舒かならず。

蹉跎二十年。領下生白鬚。

蹉跎たること二十年、領下白鬚を生ず。

何言左遷去。尙獲專城居。

何を言はん左遷し去ると、尙ほ專城の居を獲たり。

杭州五千里。往若投淵魚。

杭州五千里、往いて淵に投ずる魚の若し。

雖未脫罾組。且來泛江湖。

未だ罾組を脱せずと雖も、且つ來りて江湖に泛ぶ。

吳中多詩人。亦不少酒沽。

吳中に詩人多く、亦酒沽少からず。

高聲詠篇什。大笑飛杯盂。

高聲に篇什を詠じ、大に笑つて杯盂を飛ばす。

五十未全老。尙可且歡娛。

五十未だ全く老いず、尙ほ且く歡娛す可し。

用茲送日月。君以爲何如。

茲を用つて日月を送る、君以て何如と爲す。

秋風起江上。白日落路隅。

秋風江上に起り、白日落路隅に落つ。

回首語五馬。去矣勿踟躕。

首を回らして五馬に語り、去れ踟躕すること勿かれ。

【字解】【一】承明廬 漢代侍從の臣の居る所。【二】朱輪車 貴人の乗る車。【三】嵇阮 嵇康・阮籍。並に三國魏の酒徒。
【四】罾繳 あみ、いぐるみ。【五】陷穽 おとしあな。【六】蹉跎 つまづくこと。【七】專城居 地方長官の位。【八】罾組 罾は冠をとめるカンザシ。組は印綬。官職に喩ふ。【九】酒沽 賣る酒。【十】篇什 詩篇。【一一】五馬 太守の馬をいふ。【一二】

脚躑躅踏なり。

【題義】馬上で作り自己の感慨を述べた詩である。

【詩意】自分は世を渉るに於て決して不遇ではない。寧ろ身に餘る光榮を荷つた。勳等は上柱國となり位階は朝大夫となり、何の才もないのに再び侍従の臣となり、何の政績もなくして再び朱輪車に乗つた。是れ皆以て光榮となすに足るものである。況んや自分はもと東山の野人で、唯琴と酒とを好むの外何の取柄もないのが、誤つて郷里から推薦せられて進士の試験に及第し、朝士の列に加へられて世間の煩累に拘束せられることとなり、進んでは人の讒謗を憂へ、退いては人の構陷を慮り、天地の窮屈さを感じて、一刻も心のゆるまることになつた。かくて齷齪として二十餘年を送り、領の下に白い鬚が生えるやうになつた。今度杭州刺史に任せられたが、地方長官たる位を得たのであるから、決して左遷などと言ふべきではない。因つて喜んで五千里外の杭州へ行くこと、淵に赴く魚のやうである。これからは全く官職の羈を脱したわけではないが、江湖に泛んで暢暢とすることが出来る。且つ吳中（杭州は古の吳の地である）には詩人も多く酒も豊富にあるから、高聲に詩を吟じ大笑して杯盤を飛ばすことも出来る。五十といふ年齢はまだそれほど老衰してはゐない、まだまだ楽しみもある。まア詩と酒とを以て月日を送らう。諸君は吾が言を聞いて如何に思はるるか。定めて是認せらるるであらう。今や秋風が江上に起り夕日が路隅に傾いた。さア馬よ、躊躇せずと杭州を指して進み去らぬか。

秋蝶

秋蝶

秋花紫蒙蒙。秋蝶黃茸茸。
秋花紫にして蒙蒙、秋蝶黄にして茸茸たり。
花低蝶新小。飛戲叢西東。
花低れて蝶新小、飛び戯る叢の西東。
日暮涼風來。紛紛花落叢。
日暮れて涼風來り、紛紛として花叢に落つ。
夜深白露冷。蝶已死叢中。
夜深けて白露冷かに、蝶已に叢中に死す。
朝生夕俱死。氣類各相從。
朝に生じ夕に俱に死す、氣類各相從ふ。
不見千年鶴。多棲百丈松。
見ずや千年の鶴、多く百丈の松に棲むを。

【字解】一 蒙蒙 盛なる貌。二 茸茸 散亂する貌。

【題義】秋の蝶が花の萎むと共に死するのを見て、羽振のよい人に媚びて名利を求むる者の最後を諷した詩である。

【詩意】秋の花が紫に咲き亂れてゐる。黄色の蝶が花を目がけて羣り集る。日が暮れて涼風が吹く

と、花が紛紛と散り落ちる。夜が深けて白露が降ると蝶も死んでしまふ。花と蝶とは同氣相求むる仲間、朝に同じく生れて夕に俱に死する。此とは反對に、かの千年の齡を保つ鶴は多く百丈の松に身を寄せる。花のやうな輕薄なものには決して身を寄せない。

登商山最高頂

商山の最高頂に登る

高高此山頂。四望唯煙雲。

高高たり此山頂、四望唯煙雲。

下有一條路。通達楚與秦。

下に一條の路有り、楚と秦とに通達す。

或名誘其心。或利牽其身。

或は名其心を誘ひ、或は利其身を牽く。

乘者與負者。來去何紛紜。

乘る者と負ふ者と、來去何ぞ紛紜たる。

我亦斯人徒。未能出囂塵。

我も亦斯人の徒、未だ囂塵を出づる能はず。

七年三往復。何得笑他人。

七年に三たび往復す、何ぞ他人を笑ふことを得ん。

【字解】 一 紛紜 多き貌。 二 囂塵 俗世間。

【題義】 商山の頂に登つて感ずる所を述べた詩である。

【詩意】 此山の上から四方を見れば、すべて雲煙濛濛としてゐる。下に一筋の道があつて秦と楚とに通じてゐる。世間の人は名利に牽かれて、駕籠に乗る者もあれば其駕籠を昇る者もあり、往來が極めて頻繁である。かく申す僕も亦同類で、未だ全く塵世を脱却しきれず、七年の間に三度此道を往復した。他人を笑ふ資格はない。

枯桑

枯桑

道傍老枯樹。枯來非一朝。

道傍の老枯樹、枯れ來ること一朝に非ず。

皮黃外尙活。心黑中先焦。

皮は黃にして外尙ほ活し、心は黒くして中先づ焦す。

有似多憂者。非因外火燒。

多憂の者に似たる有り、外火に因つて燒くるに非ず。

【題義】 枯桑を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】 道の傍に枯れた桑の樹がある。昨日今日枯れたのではないらしい。皮は黃色で外から見れば生きてゐるやうだが、心は黒焦になつてゐる。名利の爲に憂ふる人も此と同じだ。外界の傷害に由るのではなくて、己の慾念の爲に自ら害するのである。

山路偶興

山路の偶興

筋力未全衰。僕馬不至弱。
又多山水趣。心賞非寂寞。
捫蘿上煙嶺。蹋石穿雲壑。
谷鳥晚仍啼。洞花秋不落。
提籠復攜榼。遇勝時停泊。
泉憩茶數甌。嵐行酒一酌。
獨吟還獨嘯。此興殊未惡。
假使在城時。終年有何樂。

筋力未だ全く衰へず、僕馬至つて弱からず。
又山水の趣多く、心賞寂寞に非ず。
蘿を捫つて煙嶺に上り、石を蹋んで雲壑を穿つ。
谷鳥晚に仍ほ啼き、洞花秋にも落ちず。
籠を提げ復た榼を攜へ、勝に遇うて時に停泊す。
泉に憩ふ茶數甌、嵐に行く酒一酌。
獨り吟じ還獨り嘯く、此興殊に未だ惡からず。
假使城に在る時も、終年何の樂有らん。

【字解】 一 僕馬 召使及び馬。 二 榼 酒樽。 三 勝 よい景色。 四 數甌 數椀。 五 城 長安を指す。

【題義】 山路を通る時に偶然感じた興味を述べた詩である。

【詩意】 吾が體力は未だ全く衰へず、召使や馬もさほど弱くはない。又山水の趣もあつて心の寂寞を慰めることも出来る。蘿を攀ちて煙罩めたる嶺に上り、石を蹋んで雲深き壑を通り、谷に啼く鳥の聲

を聴き、秋にも落ちない花の色を賞し、籠と樽とを携へて、よい景色に遇へば宿泊し、泉の所では數椀の茶を飲み、嵐の前には一酌して勇氣をつけ、獨りで吟嘯するのも決して悪くはない。たとひ長安の都に在るとも、一年中何の樂みもない。それよりも山路の旅の方が遙に勝つてゐる。

山雉

山雉

五步一啄草。十步一飲水。
適性遂其生。時哉山梁雉。
梁上無罾繳。梁下無鷹鷂。
雌雄與羣雛。皆得終天年。
嗟嗟籠下雞。及彼池中鴈。
既有稻梁恩。必有犧牲患。

五歩に一たび草を啄み、十歩に一たび水を飲む。
性に適うて其生を遂ぐ、時なる哉山梁の雉。
梁上に罾繳無く、梁下に鷹鷂無し。
雌雄と羣雛と、皆天年を終ふことを得ん。
嗟嗟籠下の雞、及び彼の池中の鴈。
既に稻梁の恩有れば、必ず犠牲の患有り。

【字解】 一 時哉山梁雉 論語に、山梁雌雉、時哉時哉とある。時哉は時を得たるを贊するなり。山梁は山路に架けた橋。 二 罾繳 網や、いぐるみ。

【題義】 山中の雉の呑氣なことを羨んだ詩である。

【詩意】 五歩あるいては草を啄み、十歩あるいては水を飲み、氣の向くままにして生を送る山梁の雉は、時を得たものである。橋の上には網も矢もなく、橋の下には鷹もゐないから、雌も雄も雛も皆揃つて天年を全うすることが出来る。此に反して籠の中に飼はれてゐる雞や池の中に飼はれてゐる雁は、人の稻梁の恩を受けて生きてゐるから、いつかは其人の犠牲にならなければならない。

初下漢江舟中作寄兩省給舍

初めて漢江を下る舟中の作、兩省の給舍に寄す

秋水漸紅粒。朝煙烹白鱗。秋水紅粒を漸し、朝煙白鱗を烹る。

一食飽至夜。一臥安達晨。一食飽いて夜に至り、一臥安くして晨に達る。

晨無朝謁勞。夜無直宿勤。晨に朝謁の勞無く、夜は直宿の勤無し。

不知兩掖客。何似扁舟人。知らず兩掖の客、何ぞ扁舟の人に似ん。

尙想到郡日。且稱守土臣。尙ほ想ふ郡に到る日、且つ稱す土を守る臣と。

猶須副憂寄。恤隱安疲民。猶ほ須く憂寄に副ひ、恤隱して疲民を安んずべし。

暮年庶報政。三年當退身。暮年庶はくは政を報じ、三年當に身を退くべし。

終使滄浪水。濯吾纓上塵。終に滄浪の水をして、吾が纓上の塵を濯はしめん。

【字解】 一 漢江 川の名。漢水ともいふ、北より南に流れ漢口の所で長江に入る。二 兩省 門下省と中書省。白樂天は嘗て左拾遺となり門下省に屬し、後中書舍人となり中書省に屬した。給舍は給事中と中書舍人。三 漸紅粒 米をとぐこと。四 白鱗 白い魚。五 朝謁 參朝して天子に拜謁すること。六 直宿 宿直に同じ。七 兩掖 兩省に同じ。宮殿の左右の傍垣に在るを以てかくいふ。八 扁舟 小舟。扁舟人とは樂天自ら謂ふ。九 到郡 杭州に到る。一〇 憂寄 天子の寄託。一一 恤隱 めぐみ、いたむ。一二 暮年 滿一周年。一三 滄浪水 漢水の別名。孟子に、滄浪之水清兮、可以濯吾纓とある。一四 纓上塵 冠の紐の塵。

【題義】 漢水を下る時舟の中で作り、門下・中書二省の給事中・中書舍人たる人人に寄せた詩である。

【詩意】 川の水で米をといで飯を炊き、川の白い魚を煮てたべ、飽くまで食ひ安らかに眠り、朝謁や宿直の勤勞もない。兩省に奉仕する諸君は、恐らく舟中の我のやうに呑氣なわけには行くまい。更に杭州に到著すれば、土を守るの臣と稱して威張つてゐられるのであるから、聖天子の寄託に副ひ疲民を救ふことを務め、一年の後には相當の治績を擧げて天子に報告し、三年の後には首尾よく引退し、滄浪の水で冠の紐の塵を濯ひたいものだ。

自蜀江至洞庭湖口有感而作

蜀江より洞庭湖の口に至り、感有りて作る

江從西南來。浩浩無旦夕。

江は西南より來り、浩浩として旦夕無し。

長波逐若瀉。連山鑿如劈。

長波逐うて瀉ぐが若く、連山鑿ちて劈ぐが如し。

千年不壅潰。萬姓無墊溺。

千年壅潰せず、萬姓墊溺無し。

不爾民爲魚。大哉禹之績。

爾の民を魚と爲さず、大なる哉禹の績。

導岷既艱遠。距海無咫尺。

岷を導く既に艱遠なり、海に距る咫尺無し。

胡爲不訖功。湖水斯委積。

胡爲ぞ功を訖へず、湖水斯に委積する。

洞庭與青草。大小兩相敵。

洞庭と青草と、大小兩ながら相敵ふ。

混合萬丈深。森茫千里白。

混合して萬丈深く、森茫として千里白し。

每歲秋夏時。浩大吞七澤。

每歲秋夏の時、浩大にして七澤を呑む。

水族窟穴多。農人土地窄。

水族窟穴多く、農人土地窄し。

我今尙嗟嘆。禹豈不愛惜。

我今尙ほ嗟嘆す、禹豈に愛惜せざらんや。

邈未究其由。想古觀遺跡。

邈として未だ其由を究めず、古を想うて遺跡を觀る。

疑此苗人頑。恃嶮不終役。

疑ふ此苗人の頑、嶮を恃みて役を終へず。

帝亦無奈何。留患與今昔。

帝も亦奈何ともする無し、患を留めて今昔に與ふ。

水流天地內。如身有血脈。

水の天地の内に流るるは、身に血脈有るが如し。

滯則爲疽疣。治之在鍼石。

滯れば則ち疽疣と爲る、之を治むること鍼石に在り。

安得禹復生。爲唐水官伯。

安んぞ得ん禹復た生れ、唐の水官の伯と爲り、

手提倚天劍。重來親指畫。

手に倚天の劍を提げ、重ねて來りて親しく指畫し、

疏河似剪紙。決壅如裂帛。

河を疏すること紙を剪るに似、壅を決すること帛を裂く

滲作膏腴田。踢平魚鼈宅。

滲して膏腴の田と作し、踢みて魚鼈の宅を平にし、

龍宮變閭里。水府生禾麥。

龍宮閭里に變じ、水府禾麥を生じ、

坐添百萬戶。書我司徒籍。

坐ながら百萬の戸を添へ、我が司徒の籍に書せん。

【字解】【一】浩浩 廣大なる貌。【二】壅潰 ふさがりついで。【三】萬姓 百姓なり。墊溺は、おぼれること。【四】導岷 書經の禹貢篇に、岷山導江とある。【五】距海 書經の益稷篇に、予決九江距四海とある。【六】青草 湖名。湖南省湘陰縣の

北百里に在り、南は湘水に接し、北は洞庭湖に通ず。【七】七澤 司馬相如の賦に、臣聞楚有七澤云云とある。【八】苗人 南方の蠻族。【九】疽疣 はれもの。【一〇】倚天劍 劍の名。【一一】指畫 指圖する。【一二】膏腴 肥沃なり。【一三】司徒 官名。

開適 自蜀江至洞庭湖口有感而作

【題義】長江を下つて洞庭湖の口に至り大禹疏鑿の功を思ひ感ずる所あつて此詩を作つたのである。

【詩意】長江は西南より來り、朝から晩まで休みなく、連山の間を劈いて瀉ぐが如く浩浩と流れてゐる。千年の間壅がることも潰ゆることもなく、百姓が溺没の患を免れたのは、禹の治水の功績に由るのである。禹は遠く艱難を冒して岷山から長江を導き海に至るまで水路を通じたのに、なせ其功を終へずして湖水に水を蓄へるやうにしたのであらうか。而も洞庭と青草と孰れ劣らぬ二大湖を置き、深さも深く廣さも廣く、毎年夏から秋にかけて、其水が溢れ出し、魚類が山窟に住み、耕地が狭められる。我が今日尙ほ嗟嘆するくらゐだから、禹も定めて遺憾に思つたであらう。併し太古は邈として今其由を知ることは出来なむ。ただ遺跡を觀て古を想ふに過ぎない。多芬この地方にゐた苗人が頑固で、嶮を恃んで禹の命に従はないので、流石の大禹も奈何ともすることが出来ないので、今日まで患害を留むるに至つたのであらう。水が天地の内に流れるのは、人の身體に血脈があるのと同じで、それが停滞すれば病氣になるから、鍼石を以て之を療治しなければならぬ。願はくは禹が再び此世に生れて來て、唐の治水の長官となり、河を決すること紙を剪るが如く、壅を通ずること帛を裂くが如く、踢んで魚鼈の居を平げ、潤して肥沃の田地となし、龍宮や水府を陸地となして禾黍を種る、我が唐の領土を殖すやうにあらしめたいものだ。

【餘論】唐宋詩醇に、議論奇闢、筆力亦渾勁、題と相稱ふ。集中此種絶た少し。頗る昌黎(韓愈)に近

し。其源亦杜甫の劍門の一篇より脱胎す。と評してある。又歐北詩話に、香山(白樂天)に洞庭湖を過ぐる詩あり。謂へらく、大禹水を治む。何ぞ盡く諸水を驅りて直に之を海に注がずして此大浸(大湖)を留めて湖南千里の地を占むる。若し水を去つて陸と作さば、又數百萬の生靈を活し司徒の籍に増入すべし。豈に禹の時苗頑にして命を用ひず、遂に此役を興す能はざりしかと。此れ書生の見、好んで議論をなして行ふべからざる者なり。萬山の水、奔騰して下る。其中途必ず停滯の處あり、始めて衝溢して患をなさず。江西の鄱陽あり、江南の巢湖、洪澤湖、太湖あり、時に隨つて容納し以て其勢を緩うす。故に害をなすこと較少し。黄河の水は地の停蓄するなし。遂に歳歳患をなす。若し蜀江をして峽を出でて後即ち衆水を挟み直に東海に趨らしめば、其間吳楚經由の地、横溢衝決、將に更に黄河より甚しき者あらんとす。香山ただ議を發し以て其詩才を騁せて有識に笑はれんことを知らざるなりと論じてゐるのは、治水論としては兎も角も、詩を論ずる言としては稍拘泥に過ぎる。

初領郡政衙退登東樓作 自後詩到杭州後作

初めて郡を領し、政衙より退き、東樓に登りて作る

鰥惇心所念、簡牘手自操。鰥惇心に念ふ所、簡牘手自ら操る。

開適 初領郡政衙退登東樓作

何言符竹貴。未免州縣勞。

何ぞ符竹の貴きを言はん、未だ州縣の勞を免れず。

賴是餘杭郡。臺榭遶官曹。

賴に是れ餘杭郡、臺榭官曹を遶る。

凌晨親政事。向晚恣遊遨。

晨を凌いで政事を親らし、晩に向つて遊遨を恣にする。

山冷微有雪。波平未生濤。

山冷にして微く雪有り、波平にして未だ濤を生ぜず。

水心如鏡面。千里無纖毫。

水心鏡面の如く、千里纖毫無し。

直下江最闊。近東樓更高。

直下江最も闊く、近東樓更に高し。

煩襟與滯念。一望皆遁逃。

煩襟と滯念と、一望すれば皆遁逃す。

【字解】

【一】鯨。よるべなき孤獨の人。【二】簡牘。役所の文書。【三】符竹。わりふ。符を割いて命を下す。因つて詔命を符竹といふ。【四】臺榭。樓閣といふが如し。官曹は役所。【五】纖毫。すこしの汚れ。【六】煩襟。煩悶。

【題義】

初めて餘杭郡（即ち浙江省杭州府）に到りて刺史の職を領し、郡の役所から退出して東樓に登つて作つた詩である。此から後の詩は杭州に到着してから後の作である。

【詩意】

鯨寡孤獨の民には特に哀憐を加へ、文書は必ず自ら取調べて敢て部下に任せない。身は地方官たるを免れないのだから、詔命を蒙つたからとて己の尊貴に誇るやうなことはしない。幸なことに

は餘杭郡には役所の附近に樓閣が多いので、朝役所に出て事務を執れば、夕方は其處に往つて遊ぶことが出来る。今この東樓から眺めると、山は寒げに見えて少しく雪が積り、川は穩に流れて荒濤も立たず、鏡の如く澄んで千里纖塵を留めない。殊に此樓の下は最も川幅の廣い所で、又此樓は役所の東方の最も近い處に在る。この樓に登つて一望すれば煩悶も何も忽ち一掃されてしまふ。

清調吟

清調吟

索索風戒寒。沈沈日藏耀。

索索として風寒を戒め、沈沈として日耀を藏す。

勸君飲濁醪。聽我吟清調。

君に勸む濁醪を飲み、我が清調を吟するを聽かんことを。

芳節變窮陰。朝光成夕照。

芳節窮陰に變じ、朝光夕照と成る。

與君生此世。不合長年少。

君と此世に生れ、合はずして年少を長す。

今晨從此遊。明日安能料。

今晨此遊に従ふも、明日安んぞ能く料らん。

若不結跏禪。即須開口笑。

若し結跏の禪ならずんば、即ち須く口を開いて笑ふべし。

【字解】

【一】索索。風の聲。【二】沈沈。小暗き貌。【三】濁醪。濁酒。【四】芳節。花咲き鳥啼く好季節。【五】結跏。あぐらをかいて坐禪すること。

【題義】清調は樂曲の一。其曲に苦寒行。豫章行等の名あり。

【詩意】風が索索と吹いて寒さを警戒し、日は耀を藏めて晝尙ほ暗い。どうか濁酒を酌んで我が清調吟を聴いてくれ。春の好季節も忽ち變じて窮陰となり、朝日の光も忽ち夕日となる世の習である。君と此世に生れあはせたが、久しく相合ふこともなくて互に老境に入つてしまつた。今朝は此處で俱に遊ぶとも、明日はどこでどうなるか知れたものではない。こんな離合聚散定めなき人世であるから、坐禪でも組んで一切空と悟りきるか、然らずば浮世三分五厘と諦めて、口を開いて大笑するよりほかはない。

狂歌詞

狂歌詞

明月照君席。白露霑我衣。
勸君酒杯滿。聽我狂歌詞。
五十已後衰。二十已前癡。
晝夜又分半。其間幾何時。
生前不歡樂。死後有餘貲。

馬用黃墟下。珠衾玉匣爲。
焉ぞ黃墟の下、珠衾玉匣を用ふるを爲さん。

【字解】【一】已後。以後に同じ。【二】餘貲。餘財。【三】黃墟下。黃泉の下。死後。【四】玉匣。玉の箱。

【題義】人生の果敢なきを述べ、時に及んで行樂すべきことを説いた詩である。
【詩意】今年も早や涼秋の候となり、明月が席を照し、白露が衣を霑すやうになつた。先づ滿を引いて我が狂歌を聴いてくれ。人は五十になれば老衰し、二十前は癡に過ぎない。盛の花は二十から五十年までだ。その三十年が間に夜が半分あるから、樂みを盡せるのは残る十五年だ。高が知れたものではないか。だから生前に歡樂を盡さなければ、徒に死後に餘財を残すことになる。死んだ後では珠の衾や玉の箱があつても、何の役にも立たぬではないか。

郡亭

郡亭

平旦起視事。亭午臥掩關。
除親簿領外。多在琴書前。
況有虛白亭。坐見海門山。

閒適 狂歌詞 郡亭

潮來一凭檻。賓至一開筵。

潮來りて一たび檻に凭り、賓至りて一たび筵を開く。

終朝對雲水。有時聽管絃。

朝を終ふるまで雲水に對し、時有りて管絃を聽く。

持此聊過日。非忙亦非閑。

此を持して聊か日を過ごし、忙に非ず亦閑に非ず。

山林太寂寞。朝闕空喧煩。

山林太だ寂寞たり、朝闕空しく喧煩。

唯茲郡閣內。囂靜得中間。

唯茲郡閣の内、囂靜中間を得たり。

【字解】【一】平旦。朝。【二】亭午。正午。掩關は門を閉ぢること。【三】簿領。簿書を取調べること。【四】虛白。莊子人間世篇に、虛室生白、吉祥止止とある。日光の能く照すこと。【五】海門。前の長慶二年七月、自中書舍人、出守杭州を見よ。

【六】檻。欄干、てすり。【七】郡閣。郡亭。

【題義】餘杭郡の役所の亭に閑坐する興趣を述べた詩である。

【詩意】朝起きて事務を執り、正午になれば門を閉ぢて閑居する。簿書を取調べるより外は、多くは琴書を弄んでゐる。殊に此亭は日光がよく當つて明るく、海門の山を坐ながら見ることが出来るから、潮がさして來たと謂つては欄干に凭り（杭州の潮のことは前に述べた）客が來たと謂つては酒筵を設け、或は雲や水を眺めたり、管絃を弄したりして、閑ならず忙ならず、快き日を過ごしてゐる。山中に隱居すれば、あまりに寂寞に過ぎ、朝廷に居れば、あまりに騒がし過ぎるが、この郡亭は丁度その

中間で、あつらへむきである。

詠懷

懷を詠ず

昔爲鳳閣郎。今爲二千石。

昔は鳳閣の郎と爲り、今は二千石と爲る。

自覺不如今。人言不如昔。

自ら覺ゆ今に如かずと、人は言ふ昔に如かずと。

昔雖居近密。終日多憂惕。

昔近密に居ると雖も、終日憂惕多し。

有詩不敢吟。有酒不敢喫。

詩有れども敢て吟せず、酒有れども敢て喫せず。

今雖在疎遠。竟歲無牽役。

今疎遠に在りと雖も、歳を竟るまで牽役無し。

飽食坐終朝。長歌醉通夕。

飽食して坐して朝を終へ、長歌して酔ひて通夕。

人生百年內。疾速如過隙。

人生百年の内、疾速なること過隙の如し。

先務身安閑。次要心歡適。

先づ身の安閑を務め、次に心の歡適を要す。

事有得而失。物有損而益。

事は得て失ふ有り、物は損して益する有り。

所以見道人。觀心不觀跡。

所以に道を見る人、心を觀て跡を觀ず。

【字解】 鳳閣郎 中書舍人。 二千石 地方長官。 杭州刺史 となつたこと。 過隙 白駒の隙を過ぐるが如し。

【題義】 己の感懷を述べた詩である。

【詩意】 昔は中書舍人となり、今は杭州刺史となつた。自分では今の方がよいと思ふが、人は昔の方がよいと言ふ。昔は天子のお側に侍してはゐたが、いつも心に憂が絶えなかつた。詩を吟ずることも出来ねば、酒を飲むことも出来なかつた。今は疎遠に居るけれども、一年中これといふ拘束はなく、飽きるほど食べて酔歌してゐられる。人壽百歳と相場がきまつてゐるが、その速いことは白駒の隙を過ぐるが如しだ。だから先づ何よりも身體の安閑が大事で、次は心の快適だ。世間の事は得が損となり損が得となるのだ。故に道に通じた人は精神的に觀察して、形跡の上から判断を下さない。で、精神的に判断すれば、やはり杭州刺史の方がよいのだ。

立春後五日

立春後五日

立春後五日。春態紛婀娜。

立春の後五日、春態紛として婀娜たり。

白日斜漸長。碧雲低欲墮。

白日斜に漸く長く、碧雲低れて墮ちんと欲す。

殘氷坼玉片。新萼排紅顆。

殘氷玉片を坼き、新萼紅顆を排く。

遇物盡欣欣。愛春非獨我。

物に遇うて盡く欣欣、春を愛するは獨我のみに非ず。

迎芳後園立。就暖前簷坐。

芳を迎へて後園に立ち、暖に就いて前簷に坐す。

還有惆悵心。欲別紅爐火。

還つて惆悵の心有り、紅爐の火に別れんと欲す。

【字解】 婀娜 美しき貌。 紅顆 紅のかたまり。

【題義】 立春後五日の情景を述べた詩である。

【詩意】 立春から五日を経て、大分春めいて來た。日は段段に長くなり、空は段段低くなり、氷は玉片を坼き、新萼は紅花を開き、すべての物が欣欣としてゐる。春を愛するのは我のみではない。或は花に對して後園に立ち、或は前軒に坐して日光に浴する。今まで親んで來た爐火に別れるのが、何となく悲しいやうな氣もする。

郡中即事

郡中即事

漫漫潮初平。熙熙春日至。

漫漫として潮初めて平かに、熙熙として春日至る。

空闊遠江山。清明好天氣。

空闊として江山遠く、清明にして天氣好し。

閒適 立春後五日 郡中即事

外有適意物。中無繫心事。

外には意に適ふ物有り、中には心に繫る事無し。

數篇對竹吟。一杯望雲醉。

數篇竹に對して吟じ、一杯雲を望んで醉ふ。

行攜杖扶力。臥讀書取睡。

行くゆく杖を攜へて力を扶け、臥して書を読み取って睡を取る。

久養病形骸。深諳閒氣味。

久しく病める形骸を養ひ、深く閒なる氣味を諳んず。

遙思九城陌。擾擾趨名利。

遙に思ふ九城の陌、擾擾として名利に趨るを。

今朝是隻日。朝謁多軒騎。

今朝是れ隻日、朝謁軒騎多し。

寵者防悔尤。權者懷憂畏。

寵ある者は悔尤を防ぎ、權ある者は憂畏を懷く。

爲報高車蓋。恐非眞富貴。

爲に報ず高車蓋、恐らくは眞の富貴に非ざるを。

【字解】

【一】漫漫 廣廣としてゐる貌。【二】熙熙 やはらぐ貌。【三】九城陌 長安の都を指していふ。【四】擾擾 紛紛に同じ。【五】隻日 奇數の日をいふ。偶數の日を雙日といふ。唐の制度では、天子は隻日に朝を視ることになつてゐる。【六】軒騎 軒は車。【七】悔尤 くい、とがめ。【八】高車蓋 蓋は車の日覆。貴人をいふ。

【題義】

卽事とは現前の事物に就いて賦する詩をいふ。郡は杭州である。

【詩意】

今や潮が漫漫として平に、春光が融融として満ちてゐる。江山は空闊、天氣は晴明、身外には快適の物が多く、心中には何等の累がなく、竹に對して詩を吟じ、雲を望んで杯を舉げ、杖を曳いて

て行遊し、書を読んで睡を催し、閑適の氣味を十分に覺つた。翻つて長安の都を憶へば相變らず名利

に奔走する者が多いであらう。殊に今朝は奇數日で、天子出御の日であるから、朝謁の爲に車騎が右

往左往して、君寵ある者は人の尤を防がんとし、權力ある者は憂畏を抱いて安き心もあるまい。して

見れば高車駟馬に乗る人は、決して眞の富貴を得た者とは言へないのである。

白樂天詩集 卷九

感傷一 古調詩凡五十五首

西明寺牡丹花時憶元九

西明寺の牡丹花の時元九を憶ふ

前年題名處。今日看花來。

前年名を題する處、今日花を看來る。「の暗に催すを。」

一作芸香吏。三見牡丹開。

一たび芸香の吏と作り、三たび牡丹の開くを見る。

豈獨花堪惜。方知老暗催。

豈に獨り花の惜むに堪ふるのみならんや、方に知る老

何況尋花伴。東都去未廻。

何ぞ況や花を尋ぬる伴、東都に去つて未だ廻らず。

詎知紅芳側。春盡思悠哉。

詎ぞ知らん紅芳の側、春盡きて思悠なる哉。

【字解】元九 元は姓、九は排行。元稹なり。

【一】芸香吏 校書郎。芸香は紙魚をよける。因つて藏書の臺を芸臺といふ。

【二】尋花伴 花見に行つた仲間。元稹を指して言ふ。

【三】東都 洛陽。【四】紅芳 牡丹の花。【五】悠哉 憂思の貌。

【題義】西明寺の牡丹の花の咲く頃元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】先年俱に名を題した西明寺に今日牡丹の花を見に來た。自分は校書郎に任せられてから、丁度三回この花の開くのを見た。この花の又散るのを見ては愛惜の情に堪へないが、それは唯花を惜むのみではなく、一方には己の段段に老いるのを惜むのである。まして共に花を尋ねた親友元稹は、洛陽に去つて未だ還らないので、春の盡きるのを惜むと同時に、元稹を思慕する情に堪へない。元稹はかくとは知らずにあるであらうか。

傷楊弘貞

楊弘貞を傷む

顔子昔短命。仲尼惜其賢。

顔子昔短命、仲尼其の賢を惜む。

楊生亦好學。不幸復徒然。

楊生亦學を好む、不幸にして復た徒然り。

誰識天地意。獨與龜鶴年。

誰か識る天地の意、獨り龜鶴に年を與ふるを。

【字解】【一】顔子 孔子の弟子顔回。【二】仲尼 孔子の字。【三】復徒然 一本に今復然に作る。

【題義】楊弘貞の天死を惜んだ詩である。

【詩意】昔顔回は短命であつたので、孔子は其の賢にして夭折したことを惜んだが、楊弘貞も好學の人でありながら不幸にして天死した。此の如き人を若死させて鶴や龜に長壽を與へる天意は、誠に理解に苦まざるを得ない。

權攝昭應。早秋書事寄元拾遺兼呈李司錄

權攝昭應たるとき、早秋事を書し元拾遺に寄せ、兼ねて李司錄に呈す

夏閏秋候早。七月風騷騷。

夏閏にして秋候早く、七月風騷騷。

渭川煙景晚。驪山宮殿高。

渭川煙景晚れ、驪山宮殿高し。

丹殿子司諫。赤縣我徒勞。

丹殿に子は諫を司り、赤縣に我徒に勞す。

相去半日程。不得同遊遨。

相去ること半日程、遊遨を同じうするを得ず。

到官來十日。覽鏡生二毛。

官に到つて來た十日、鏡を覽るに二毛を生ず。

可憐趨走吏。塵土滿青袍。

可憐む可し趨走の吏、塵土青袍に滿つ。

郵傳擁兩驛。簿書堆六曹。

郵傳兩驛を擁し、簿書六曹に堆し。

感傷 傷楊弘貞 權攝昭應早秋書事寄元拾遺兼呈李司錄

爲問綱紀掾何必使鉛刀(一三) 爲に問ふ綱紀の掾、何ぞ必ずしも鉛刀を使はん。

【字解】(一) 權攝昭應 昭應は縣名、今の陝西省臨潼縣。權攝とは暫時職位を代理すること。(二) 元稹 元稹を指す。元稹は元和の初左拾遺となつた。(三) 李司錄 錄は祿の訛、司祿は官名。班祿の事を掌る。(四) 渭川 川の名。(五) 驪山 山の名。山に宮殿あり。(六) 丹殿 朱塗の宮殿。(七) 赤縣 帝都に近き縣。(八) 二毛 白髮。(九) 青袍 官服。(一〇) 郵傳 宿次馬車。(一一) 六曹 府州の佐吏六曹に分る。功曹・倉曹・戶曹・兵曹・法曹・士曹是れなり。(一二) 綱紀掾 政治を佐くる屬官。李司錄を指す。(一三) 鉛刀 鈍才の人に喩ふ。

【題義】白樂天が整屋縣尉と、臨時に昭應縣尉とを兼ねてゐた時、事を書して左拾遺元稹に寄せ、兼ねて李司錄に呈した詩である。

【詩意】夏閏があつたので秋の來るのが早く、七月になつたばかりで秋風がさわがしく、渭川の煙景を隔てて驪山宮の高く聳えてゐるのが見える。君は左拾遺として朱殿の中に諫諍の事を司り、僕は縣尉として昭應縣に苦勞してゐる。君と僕との居る處は相去ること僅に半日程であるが、共に遊樂することも出來ねば、僕は此官に就いてから十日にしかならないが、鏡にうつして見ると既に白髮が生え、小役人として驅けまはつてゐるので塵に官服が汚れる。而も驛傳に乗つて整屋と昭應との二縣をかけ持ちしてゐるので、簿書が堆積して整理がつかない。因つて李司錄殿に御尋ね申すが、私のやうな鈍才を御使ひにならずとも、他に人があるで御座らう。

新栽竹

新に竹を栽う

佐邑意不適。閉門秋草生。邑に佐として意適せず、門を閉づれば秋草生ず。

何以娛野性。種竹百餘莖。何を何てか野性を娛ましむる、竹を種うること百餘莖。

見此溪上色。憶得山中情。此溪上の色を見、山中の情を憶ひ得たり。

有時公事暇。盡日遶欄行。時有りて公事の暇、盡日欄を遶つて行く。成らずと。

勿言根未固。勿言陰未成。言ふこと勿れ根未だ固からずと、言ふこと勿れ陰未だ

已覺庭宇內。稍稍有餘清。已に覺る庭宇の内、稍稍として餘清有るを。

最愛近牕臥。秋風枝有聲。最も愛す牕に近く臥せば、秋風枝に聲有るを。

【字解】(一) 佐邑 縣尉となる。(二) 盡日 終日。(三) 稍稍 やや。段段に。

【題義】新に竹を栽ふたことを述べた詩である。

【詩意】縣尉となつたが氣に食はないので、門を閉ぢて秋草の生ずるに任せてゐる。吾が野性を娛ましむる爲に百餘本の竹を種ふた。この溪上の竹の色を見て山居の情味を憶ひ、公事の暇には欄干を遶つて竹を見て歩いてゐる。根はまだ固まらず深い陰を成すほどでもないが、既に庭中に清涼の氣を添

へたやうに思ふ。殊に窓に近く臥せば、秋風の聲を聞けるのが甚だ嬉しい。

秋霖中過尹縱之仙遊山居

秋霖中、尹縱之が仙遊の山居に過る

慘慘八月暮。連連三日霖。

慘慘たり八月の暮、連連たり三日の霖。

邑居尙愁寂。況乃在山林。

邑居だも尙ほ寂を愁ふ、況んや乃ち山林に在るをや。

林下有志士。苦學惜光陰。

林下に志士有り、苦學して光陰を惜む。

歲晚千萬慮。併入方寸心。

歲晚れて千萬慮、併せて方寸の心に入る。

巖鳥共旅宿。草蟲伴愁吟。

巖鳥旅宿を共にし、草蟲愁吟に伴ふ。

秋天牀席冷。雨夜燈火深。

秋天牀席冷かに、雨夜燈火深し。

憐君寂寞意。攜酒一相尋。

君が寂寞の意を憐み、酒を攜へて一たび相尋ぬ。

【字解】

【一】秋霖 秋のながあめ。

【二】仙遊 山の名。後の寄題蓋屋廳前雙松一を見よ。

【三】慘慘 いたみなしむ貌。

【題義】

秋霖の降り續く時、仙遊寺の山居に尹縱之を訪うて作つた詩である。

【詩意】

何となく人の心を悲ましめる八月の末に、三日間雨が降りつづいて、町に居てすら寂寞を感じるのだから、山林の中に隠居してゐては尙更であらう。林下に志士あり尹縱之といふ。光陰を惜んで苦學してゐるが、年は取り彼此と苦勞も多く、それが爲に心を掻き亂されてゐる。而も巖鳥と共に宿し草蟲と愁吟する状態で、誰あつて慰める者もなく、秋雨の冷なる夜獨り寒燈に對してゐる。因つて余は君の寂寞を慰めてやらうと思つて、酒を携へて尋ねて來た。

寄江南兄弟

江南の兄弟に寄す

分散骨肉戀。趨馳名利牽。

分散して骨肉戀ひ、趨馳して名利牽く。

一奔塵埃馬。一汎風波船。

一は塵埃の馬を奔らせ、一は風波の船を汎ぶ。

忽憶分手時。惘默秋風前。

忽ち憶ふ手を分つ時、惘默す秋風の前。

別來朝復夕。積日成七年。

別來朝復た夕、日を積んで七年と成る。

花落城中池。春深江上天。

花は落つ城中の池、春は深し江上の天。

登樓東南望。鳥滅煙蒼然。

樓に登つて東南を望めば、鳥滅して煙蒼然たり。

感傷 秋霖中過尹縱之仙遊山居 寄江南兄弟

相去復幾許。道里近三千。相去ること復た幾許ぞ、道里三千に近し。
平地猶難見。況乃隔山川。平地すら猶ほ見難し、況んや乃ち山川を隔つるをや。

【字解】 一 骨肉 兄弟なり。

【題義】 江南に往つてある兄弟に寄せた詩である。

【詩意】 南北に分散して兄弟相思うてあるが、これも名利の爲に牽かれてである。余は馬に跨つて塵埃の間に奔走し、汝は船を泛べて風波の上に漂泊してある。秋風の前に默然として相別れたのも早や七年の昔となつた。今この長安では花が散つてあるが、江南は既に春も深けたことであらう。樓に登つて東南を眺めても、雲煙が蒼然としてあるばかりで、汝の影も形も見えない。相距ること殆ど千里。平地ですら見難いのに、況んや山川を隔ててあるのであるから、さうあるべき筈である。

曲江早秋 二年作

曲江の早秋 二年の作

秋波紅蓼水。夕照青蕪岸。

秋波紅蓼の水、夕照青蕪の岸。

獨信馬蹄行。曲江池四畔。

獨り馬蹄に信せて行く、曲江池の四畔。

早涼晴後至。殘暑暝來散。

早涼晴れて後至り、殘暑暝れ來つて散す。

方喜炎燠銷。復嗟時節換。

方に喜ぶ炎燠の銷するを、復た嗟く時節の換るを。

我年三十六。冉冉昏復旦。

我が年三十六、冉冉として昏れて復た旦く。

人壽七十稀。七十新過半。

人壽七十稀なり、七十新に半を過ぐ。

且當對酒笑。勿起臨風歎。

且く當に酒に對して笑ふべし、臨風の歎を起すこと勿れ。

【字解】 一 青蕪 青草の荒地。 二 曲江 長安に在る池の名。樂天は此池の邊に住んでゐた。 三 炎燠 炎暑。 四 冉冉 漸く進む貌。

【題義】 曲江の早秋の情景を述べた詩で、元和二年、年三十六の時の作である。

【詩意】 紅の蓼の花の咲き亂れてある池には小波が立ち、青い草の生えた岸には夕日が照してある。獨り馬に任せて曲江のまはりをさまよへば、日が暮れると共に暑熱が去る。暑さの去るのは嬉しいが、又時節の換るのは嗟かましい。一日一日と年月を重ねて余も今や三十六になつた。七十まで生きる人は稀だといふが、余は既に其半を過ぎたのである。酒でも飲んで笑つて暮さう。秋風に對して嘆息しても仕方がない。

寄題整屋廳前雙松

兩松自仙遊
山移植縣廳
整屋廳前の雙松に寄題す
兩松は仙遊山より縣廳に移植す

憶昨爲吏日。折腰多苦辛。

憶ふ昨吏たりし日、腰を折り苦辛多きを。

歸家不自適。無計慰心神。

家に歸りて自ら適はず、心神を慰するに計無し。

手栽兩樹松。聊以當嘉賓。

手づから兩樹の松を栽る、聊か以て嘉賓に當つ。

乘春日一漑。生意漸欣欣。

春に乗じて日に一たび漑すれば、生意漸く欣欣たり。

清韻度秋在。綠茸隨日新。

清韻秋に度りて在り、綠茸日に隨ひて新なり。

始憐澗底色。不憶城中春。

始めて憐む澗底の色、憶はざりき城中の春。

有時晝掩關。雙影對一身。

時有りて晝關を掩ひ、雙影一身に對す。

盡日不寂寞。意中如三人。

盡日寂寞たらず、意中三人の如し。

忽奉宣室詔。徵爲文苑臣。

忽ち宣室の詔を奉じ、徵されて文苑の臣と爲る。

閑來一惆悵。恰似別交親。

閑に來りて一たび惆悵し、恰も交親に別るるに似たり。

早知煙翠前。攀翫不逡巡。

早く知る煙翠の前、攀翫して逡巡せざるを。

悔從白雲裏。移爾落囂塵。

悔ゆらくは白雲の裏より、爾を移して囂塵に落ししことを。

【字解】【一】整屋 縣の名。【二】嘉賓 よき客。【三】一漑 一たび水を灌ぐ。【四】清韻 清き松風の音。【五】綠茸 緑の芽。【六】宣室 宮殿なり。【七】文苑臣 儒臣。集賢校理となつたこと。【八】逡巡 ためらふこと。

【題義】寄題とは其地に往かずして題詠すること。此詩は白樂天が縣尉となつてゐた整屋縣廳の前の二本の松を詠じたのである。

【詩意】憶へば先年整屋縣尉を勤めてゐた時は、膝を屈して上官に服事せねばならないので、家に歸つて來ても尙ほ不愉快で、心を慰める方便がなかつた。因つて手づから二本の松を栽て之を賓客となし、春に乗じて毎日水を灌いだので大分いきいきとして來て、秋になつては清らかな松風の音を立て、新芽が日増に吹いて來た。始めは谷底に操を守る青松の色を愛して、城中の花などは、念頭に置かないやうになり、時としては晝も門を閉ぢて二本の松に對してゐると、終日少しも淋しさを感せず、人のやうに思はれて、樹木とは思はれなかつた。所が忽ち詔命に由つて集賢校理に任せられて、整屋を去ることになつて親友に別れるやうな悲しさを感じた。かくて永く攀ぢ翫ぶことが出來ないことを知り、白雲の間から俗界に移し植ゑたことを悔いた。

翰林院中感秋懷王質夫

王居仙
遊山

感傷 寄題整屋廳前雙松 翰林院中感秋懷王質夫

翰林院中、秋に感じ王質夫を懷ふ 王は仙遊山に居る

何處感時節。新蟬禁中聞。何處にか時節を感じる、新蟬を禁中に聞く。

宮槐有秋意。風夕花紛紛。宮槐秋意有り、風夕花紛紛。

寄跡鴛鴦行。歸心鷗鶴羣。跡を寄す鴛鴦の行、心を歸す鷗鶴の羣。

唯有王居士。知予憶白雲。唯王居士有り、予が白雲を憶ふを知る。

何日仙遊寺。潭前秋見君。何れの日か仙遊寺、潭前秋君を見ん。

【字解】【一】翰林院 役所の名。この時白樂天は翰林學士であつた。【二】禁中 禁裡。【三】鴛鴦行 役人の行列。【四】王居士 居士は處士に同じ、王質夫を指して言ふ。

【題義】翰林院に於て秋に感じ王質夫を懷うて作つた詩である。

【詩意】自分は何處に於て秋の來たことを感じてゐるかといへば、肩の凝る禁裡に於て新蟬の聲を聞いてゐる。宮殿の庭に在る槐の樹にも秋意が漂ひ、風の夕に紛紛と散る花を見ても感慨を催さざるを得ない。殊に我は役人の仲間には加はつてゐるが、心は江湖に悠遊する鷗鶴を慕ふ者であるが、我が此眞意を知る者は唯王居士だけである。いつか仙遊寺に往つて、秋潭の前に王君と語り合ひたいものだ。

禁中月

禁中の月

海上明月出。禁中清夜長。

海上明月出で、禁中清夜長し。

東南樓殿白。稍稍上宮墻。

東南樓殿白く、稍稍として宮墻に上る。

淨落金塘水。明浮玉砌霜。

淨金塘の水に落ち、明玉砌の霜に浮ぶ。

不比人間見。塵土汚清光。

人間の見るに比せず、塵土清光を汚す。

【字解】【一】禁中 禁裡。清夜は一に秋夜に作る。【二】稍稍 少しづづ。段段に。【三】金塘 御溝の堤。【四】玉砌 玉を敷いたミギリ。【五】人間 俗世間。

【題義】禁裡の月は俗世間で見る月とは自ら別な感じのすることを述べた詩である。

【詩意】海上から明月が躍りあがつて、禁中の秋の夜長を照し、先づ東南の方の樓殿が明るくなつたと思ふ間に、刻一刻に宮殿の墻の上に月光が這ひ上り、冴えた光が御溝の水にうつり、玉敷の庭の霜に浮び、俗界で見る塵に汚れた色とは、殆んど比べものにはならない。

贈賣松者

松を賣る者に贈る

一束蒼蒼色。知從澗底來。

一束蒼蒼の色、知んぬ澗底より來るを。

感傷 禁中月 贈賣松者

斷掘經幾日。枝葉滿塵埃。斷掘幾日をか經たる、枝葉塵埃に滿つ。
不買非他意。城中無地栽。買はざるは他の意に非ず、城中地の栽うる無ければなり。

【字解】【一】蒼蒼 青きこと。【二】斷掘 きり、ほる。

【題義】松を賣る者に贈つた詩で、暗に俗界には我が身を置くに適する地のないことを嘆じたのである。

【詩意】一束の青青とした松は、深く俗界を離れた澗の底から持つて来たものだ。根掘にして来て間もないのに、早くも枝葉が塵埃にまみれてしまった。憐れむべき此松を買つてはやりたいが、この長安城中には此松を栽ふるにふさはしい清らかな土地がないから、買ふのはやめた。

初見白髮

初めて白髮を見る

白髮生一莖。朝來明鏡裏。

白髮一莖を生ず、朝來明鏡の裏。

勿言一莖少。滿頭從此始。

一莖少しと言ふこと勿れ、滿頭此より始まる。

青山方遠別。黃綬初從仕。

青山方に遠く別れ、黃綬初めて從仕す。

未料容鬢間。蹉跎忽如此。

未だ鬢間に容るることを料らざるに、蹉跎たること忽ち此の如し。

【字解】【一】黃綬 黄色の印綬。【二】蹉跎 時を失ふ貌。

【題義】初めて頭髪の白くなつたのを見て歲月の移り易きことを嘆じた詩である。

【詩意】朝、鏡を見て一驚を喫した。白毛が一本生えてゐる。一本だからよいなどと安心してはゐられない。滿頭盡く白くなる前提であるから。自分は遠く青山に別れて来て、初めて宮中に仕へることになつた。まだ鬢の間に白毛などが生えようとは思ひもよらなかつたのに、事志の如くならず、忽ち此の如く老衰してしまつた。

別元九後詠所懷

元九に別れて後所懷を詠す

零落桐葉雨。蕭條槿花風。

零落す桐葉の雨、蕭條たり槿花の風。

悠悠早秋意。生此幽閑中。

悠悠たる早秋の意、此幽閑の中に生ず。

況與故人別。中懷正無悰。

況んや故人と別れて、中懷正に悰み無し。

勿云不相送。心到青門東。

云ふこと勿れ相送らずと、心は青門の東に到る。

感傷 初見白髮 別元九後詠所懷

相知豈在多。但問同不同。相知豈に多きに在らんや、但問ふ同じきと同じからざ同心一人去。坐覺長安空。同心一人去つて、坐に覺ゆ長安の空しきを。[る]とを。

【字解】【一】元九 元稹なり。九は排行。【二】零落 おちる。【三】蕭條 物淋しき貌。【四】悠悠 憂ふる貌。【五】故人 舊友。元九を指す。【六】中懷 心中。【七】青門 長安城の東南の門。【八】相知 知友。【九】同心 同心の友。

【題義】元稹に別れて後、己の感慨を述べた詩である。

【詩意】桐の葉にバラバラと雨が落ち、槿花にソヨソヨと風が吹き、物淋しき秋の風情が此靜寂の中に漂つてゐる。殊に君と別れて後は心中正に樂まない。君の去るのを見送りはしなかつたが、心は君に伴つて青門の東まで行つた。友達といふものは敢て數の多いことを要しない。ただ意氣の投合するか否かが問題なのである。今君が去つてからは長安が空あきになつてしまつたやうな氣がする。

禁中秋宿

禁中の秋宿

風翻朱裏幕。雨冷通中枕。

風は翻す朱裏の幕、雨は冷なり通中の枕。

耿耿背斜燈。秋牀一人寢。

耿耿として斜燈に背き、秋牀一人寢ぬ。

【字解】【一】通中枕 漢官儀に、尚書郎臺中に入直すれば官青練日綾被帷帳畫通中枕を供すとある。【二】耿耿 心の安んぜざる貌。【三】秋牀 秋のれどこ。

【題義】宮殿中の秋夜宿直の情味を述べた詩である。

【詩意】秋風が緋色の裏のついた幕を翻し、雨が通中枕頭に冷氣を送る時、燈を背にして獨り淋しく牀上に臥してゐると、何となく心が落著かない。

早秋曲江感懷

早秋曲江の感懷

離離暑雲散。嫋嫋涼風起。

離離として暑雲散じ、嫋嫋として涼風起る。

池上秋又來。荷花半成子。

池上秋又來り、荷花半は子を成す。

朱顏易消歇。白日無窮已。

朱顏消歇し易く、白日窮已無し。

人壽不如山。年光急於水。

人壽は山の如くならず、年光は水より急かなり。

青燕與紅蓼。歲歲秋相似。

青燕と紅蓼と、歲歲秋相似たり。

去歲此悲秋。今秋復來此。

去歲此に秋を悲み、今秋復た此に來る。

【字解】【一】曲江 前に見ゆ。【二】離離 雲の長く續く貌。【三】嫋嫋 風の吹く貌。【四】荷花 蓮の花。【五】

朱顔 紅顔に同じ。わかき顔色。【六】窮已 きはまりやむ。【七】青蕪 青青と茂つた草。

【題義】曲江のほとりに住み、早秋に遇ひ感慨を述べた詩である。

【詩意】今や曲江のほとりは暑天の雲が散じて涼風のそよぐ秋となり、池の蓮の花も半は實を結んだ。歲月は窮り已むことなく流れ去り、紅顔はいつしか老い朽ちてしまふ。人壽は山のやうに停止してゐるものではなく、年月は水の流よりも速である。青い草原や紅の蓼はいつの秋でも同じ色を呈してゐるが、人は年年歳歳同じ姿ではゐない。自分は去年此處で秋を悲んだが、今年も亦ここへ來て秋を悲んでゐる。

寄元九

元九に寄す

身爲近密拘。心爲名檢縛。
月夜與花時。少逢杯酒樂。
唯有元夫子。閒來同一酌。
把手或酣歌。展眉時笑謔。
今春敍御史。前月之東洛。

身は近密に拘せられ、心は名檢に縛せらる。

月夜と花時と、杯酒の樂みに逢ふこと少なり。

唯元夫子のみ有り、閒に來りて一酌を同じうす。

手を把りて或は酣歌し、眉を展べて時に笑謔す。

今春御史に敍せられ、前月東洛に之く。

別來未開顔。塵埃滿樽杓。

別來未だ顔を開かざるに、塵埃樽杓に滿つ。

蕙風晚香盡。槐雨餘花落。

蕙風晚香盡き、槐雨餘花落ちぬ。

秋意一蕭條。離容兩寂寞。

秋意一に蕭條、離容兩つながら寂寞。

況隨白日老。共負青山約。

況んや白日に隨つて老い、共に青山の約に負けるをや。

誰識相念心。鞞鷹與籠鶴。

誰か識らん相念ふ心、鞞鷹と籠鶴と。

【字解】【一】近密 天子の左右に侍すること。【二】名檢 名儀なり。【三】御史 官名。監察御史。【四】東洛 洛陽。長安の東に在る故かくいふ。【五】開顔 笑ふこと。【六】蕙風 蕙は香草の名。【七】蕭條 物淋しき貌。【八】離容 離居の容姿。【九】鞞鷹 鞞は鞞に同じ、革にて作り腕に巻きて鷹をとまらせるもの。

【題義】洛陽に居る親友元稹に寄せた詩である。

【詩意】自分は左拾遺として天子の左右に侍する爲に、いつも身が拘束せられ、心は官職の爲に常に繫縛せられて、月夜にも花時にも十分に酒を飲んで樂むことも出来なかつたが、ただ君が長安にゐる時時來てくれるので共に酒杯を銜み、酣歌笑謔して樂むことが出来た。所が君は今春監察御史に任ぜられ先月洛陽に去つたので、君に別れてからは獨り愁に鎖されて酒樽にも塵が積るやうになつた。今や蕙香も盡き槐花も落ち、秋の淋しさがあたりを支配して、君も僕も寂寞として離別を悲んでゐる。

始末である。況んや一日一日と老い込んで、共に青山に隱退しようといふ約束も遂げられない。東西に別れて相念ふ心は、丁度鞆の上の鷹か籠の中の鶴のやうだ。

春暮寄元九

春暮元九に寄す

梨花結成實。燕卵化爲雛。
時物又若此。道情復何如。
但覺日月促。不嗟年歲徂。
浮生都是夢。老小亦何殊。
唯與故人別。江陵初謫居。
時時一相見。此意未全除。

【字解】【一】時物 時節の物。【二】故人 舊友。【三】江陵 元和五年監察御史元稹を貶して江陵十曹となす。

【題義】春の末に元稹に寄せた詩である。

【詩意】今や梨の花も既に實となり、燕の卵も雛と化した。すべての物皆變移したが、君の道情は如何であるか。ただ日の短いことを感じて歲月の去ることは悲まないのであらう。何となれば浮生は夢で老少不常であるから。併し舊友（白樂天自ら謂ふ）と別れて江陵に謫居することであるから、時時相見て相慰めたいものだといふ考へは恐らく未だ全く除き去れずに居るであらう。

早梳頭

早に頭を梳る

夜沐早梳頭。牕明秋鏡曉。
颯然握中髮。一沐知一少。
年事漸蹉跎。世緣方繚繞。
不學空門法。老病何由了。
未得無生心。白頭亦爲夭。

【字解】【一】颯然 衰ふる貌。【二】蹉跎 時を失ふ貌。【三】繚繞 身にまとひつく。【四】空門法 佛法なり。その教世界一切皆空なるを説く故。【五】無生心 生命慾を超脱した心。王維の詩に、欲知除老病、惟有學無生とある。

【題義】朝早く頭髪を梳り感慨を述べた詩である。

【詩意】夜髪を洗ひ翌朝鏡に對して之を梳るに、手に握つて見ると洗ふたびに少くなり、歲月空しく

去つて功業立たず、世間の係累が徒に我が身にまとうてゐる。ただ佛理を學んで老病死の惱を擺脫すべきである。無生心を悟得しなければ、たとひ白頭になるまで生きても、尙ほ天死したやうにしか思はぬであらう。

出關路

關路を出づ

山川函谷路。塵土游子顔。

山川函谷の路、塵土游子の顔。

蕭條去國意。秋風生故關。

蕭條たり國を去るの意、秋風故關に生ず。

【字解】

【一】函谷 關所の名。【二】游子 行旅の人。【三】蕭條 物淋しき貌。【四】故關 古き關所。函谷關を指す。

【題義】

長安を去り函谷關を出る時の情景を述べた詩である。

【詩意】

山と川との錯綜してゐる函谷關をば旅塵に汚れた游子がトボトボと出る。折しも秋風が古關を吹き、都を去る身をして坐に淋しさを感せしめる。

別舍弟後月夜

舍弟に別れし後の月夜

悄悄初別後。去住兩盤桓。

悄悄たり初めて別れて後、去住兩つながら盤桓たり。

行子孤燈店。居人明月軒。

行子孤燈の店、居人明月の軒。

平生共貧苦。未必日成歡。

平生貧苦を共にし、未必必ずしも日に歡を成さず。

及此暫爲別。懷抱已憂煩。

此に及んで暫く別を爲し、懷抱已に憂煩。

況是庭葉盡。復思山路寒。

況んや是れ庭葉盡き、復た山路の寒きを思ふをや。

如何爲不念。馬瘦衣裳單。

如何ぞ念はざるを爲さん、馬瘦せて衣裳單なり。

【字解】

【一】舍弟 弟なり。行簡を指すか。【二】悄悄 憂ふる貌。【三】去住 去る者も留まる者も。盤桓は、徘徊といふが如し。【四】行子 旅路に在る人。【五】居人 留まりて家に在る人。【六】懷抱 心の思。

【題義】

月夜に旅中に在る弟を憶つて作つた詩である。

【詩意】

一たび相別れてからは、去つた弟も留まる我も、俱に愁を抱いて徘徊してゐる。去つた弟は孤燈の影淋しき旅店に我を憶ひ居るであらう。後に留まる我は明月の光さやけき軒の下に弟を偲んでゐる。平生貧苦を共にして歡樂を成す日もなかつたが、今や暫の別をなし、益心を痛ましめる。況んや庭前の木の葉の落ち盡したのを見て、弟の旅する山路の寒さを推察すれば、瘦馬に跨り薄著をしてゐる弟を憐まざるを得ない。

新豐路逢故人

新豐の路にて故人に逢ふ

塵土長路晚。風煙廢宮秋。

塵土長路の晚、風煙廢宮の秋。

相逢立馬語。盡日此橋頭。

相逢うて馬を立てて語る、盡日此橋の頭。

知君不得意。鬱鬱來西遊。

知んぬ君が意を得ず、鬱鬱として西に來りて遊ぶを。

惆悵新豐店。何人識馬周。

惆悵す新豐の店、何人か馬周を識らん。

【字解】【一】新豐 縣名。今の陝西省臨潼縣の東北に在る。故人は舊友。【二】盡日 終日。【三】馬周 唐人。學を嗜み詩春

秋を善くす。中郎將常何の家に舍す。貞觀中百官に詔して得失を言はしむ。何は武人にして學に涉らず。周條二十餘事を爲る。太宗

怪み問ふ。何曰く、家客馬周之を爲ると。召して與に語り大に悦び、監察御史に拜す。

【題義】新豐縣の途中で長安の都に往かうとする舊友に逢つて作つた詩である。

【詩意】塵深く秋風寒く廢宮の跡淋しき新豐縣で偶然舊友たる君に遇ひ、馬を立てて終日橋の袂で語り合つた。志を得ないので憂愁を抱き西の長安に往かうとする君の眞意もよくわかつた。併し今の世には馬周を知つて拔擢するやうな人はない。誠に悲しむべきことだ。

金鑾子晬日

金鑾子の晬日

行年欲四十。有女曰金鑾。

行年四十ならんと欲し、女有り金鑾と曰ふ。「ふ能はず。

生來始周歲。學坐未能言。

生れて來始めて周歲、坐することを學べども未だ言

慙非達者懷。未免俗情憐。

慙らくは達者の懷に非ざるを、未だ俗情の憐みを免れず。

從此累身外。徒云慰目前。

此れより累身の外、徒に云に目前を慰せん。

若無天折患。則有婚嫁牽。

若し天折の患無くんば、則ち婚嫁の牽有り。

使我歸山計。應遲十五年。

我が歸山の計をして、應に十五年を遅からしめん。

【字解】【一】晬日 子生れて一歳なるを晬といふ。【二】達者 天理に通達した人。【三】累身 身をわづらはす。【四】天折

【題義】樂天の女金鑾子が生れて一周年を経た時に作つた詩である。

【詩意】吾年四十に近くなつて一女子を擧げ金鑾と名づけた。既に生後一周年を経て、坐することは出来るやうになつたが、まだ物を言ふことは出来ない。吾は天理に通達した身でないから、俗人の常で妄りに愛情に驅られる。今後は此子が吾が身を累すでもあらうが、又吾が目前の慰安にもなるであらう。若し幸に天死せずに育てば行くゆく結婚といふ親としての義務も負はねばならぬ。それが爲に我が隱居の計畫も、十五年ほど晚れることになる。

青龍寺早夏

青龍寺の早夏

塵埃經小雨。地高倚長坡。

塵埃小雨を經、地高うして長坡に倚る。

日西寺門外。景氣含清和。

日は西す寺門の外、景氣清和を含む。

閑有老僧立。靜無凡客過。

閑にして老僧の立てる有り、靜にして凡客の過ぐる無し。

殘鶯意思盡。新葉陰涼多。

殘鶯意思盡き、新葉陰涼多し。

春去來幾日。夏雲忽嵯峨。

春去りて來幾日ぞ、夏雲忽ち嵯峨たり。

朝朝感時節。年鬢暗蹉跎。

朝朝時節を感じ、年鬢暗に蹉跎す。

胡爲戀朝市。不去歸煙蘿。

胡爲ぞ朝市を戀ひ、煙蘿に去り歸らざる。

青山寸步地。自問心如何。

青山寸步の地、自ら問ふ心如何。

【字解】【一】長坡 長丘。【二】清和 初夏の氣。

【三】夏雲 夏の夕立雲。嵯峨は山の高く聳ゆる貌。

【四】年鬢 年貌といふが如し。年漸く老ゆれば鬢髮漸く白し。故に衰老の意に用ふ。蹉跎は志の成らぬこと。

【題義】初夏の頃に青龍寺に寓して境内の景趣や自己の感懷を述べた詩である。

【五】煙蘿 雲煙のたなびく蔓草。

【詩意】雨あがりて塵埃の洗ひ去られた長い丘の上に青龍寺が立つてゐる。折しも日は寺門の西に傾き、四圍の景色は清和の氣を含んでゐる。如何にも閑靜で、ただ老僧の立つてゐるのを見るのみで、

俗人などは一人もゐず、殘鶯の春を惜む心も盡きて、新葉が色濃く茂つてゐる。春が去つてからまだ間もないのに、空には奇峰の如き夏雲が聳えてゐる。此等の景色を見て毎日時節の推移に心を驚かすと共に、老衰して事の志と違ふことを嘆いてゐる。ああ吾はなせ朝市に牽戀して、山の中に隱遁しないのであらうか。今この境内を僅ばかり歩いて見て、自らどんな氣がするかを問うた。寸歩の青山ですら此程快いのであるから、俗界の羈絆を遁れて隱居したならば、如何ばかり愉快を感じるであらう。

秋題牡丹叢

秋牡丹叢

秋牡丹叢に題す

晚叢白露夕。衰葉涼風朝。

晚叢白露の夕、衰葉涼風の朝。

紅艷久已歇。碧芳今亦銷。

紅艷久しく已に歇き、碧芳今亦銷す。

幽人坐相對。心事共蕭條。

幽人坐して相對し、心事共に蕭條。

【字解】【一】蕭條 物淋しきこと。

【題義】一時花の盛には幾多の人を酔はしめた牡丹も秋となつては見る影もなく寂れてゐることを述べた詩である。

【詩意】白露が降り涼風の吹く秋となつては、盛の花と稱美された牡丹も、僅に衰葉を留むるのみで、色も香も既に銷え失せ、ただ幽人（樂天自ら謂ふ）が此に對して淋しく同病相憐んでゐる。

勸酒寄元九

酒を勸めて元九に寄す

薤葉有朝露。槿枝無宿花。
君今亦如此。促促生有涯。
既不逐禪僧。林下學楞伽。
又不隨道士。山中煉丹砂。
百年夜分半。一歲春無多。
何不飲美酒。胡然自悲嗟。
俗號消愁藥。神速無以加。
一杯驅世慮。兩杯反天和。
三杯卽酩酊。或笑任狂歌。

陶陶復兀兀。吾孰知其他。

陶陶復た兀兀、吾孰ぞ其他を知らん。

況在名利途。平生有風波。
深心藏陷穽。巧言織網羅。
舉目非不見。不醉欲如何。

【字解】【一】元九 元稹なり。【二】薤葉 おほにらの葉。古詩に薤上朝露何易晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸とある。【三】宿花 宵越しの花。槿花は一朝にして萎む。【四】促促 短き貌。【五】楞伽 佛經の名。【六】丹砂 不老長生の仙藥。【七】百年 古來人壽を百年と假定す。【八】胡然 何故にの意。【九】天和 自然の調和。【一〇】兀兀 動かざる貌。

【題義】酒を勸める意を述べて元稹に寄せた詩である。
【詩意】薤葉の上の朝露は忽ち晞あがり、槿の枝に宵越しの花はない。君の壽命も此と同じで瞬く間に過ぎてしまふ。君は禪僧に伍して佛理を修することもせず、又道士に就いて仙藥を煉ることもしなから、老病死苦の惱なきを得ないであらう。まして古來人壽百歳といふが、その半分の五十年は夜だから覺めて樂むことは出來ず、また一年の中にも花咲く春ばかりではなく、霜枯の秋もあれば冬もある。だから考へて見れば氣がくさくさして酒でも飲んで紛らすより外はない。なせ酒も飲まずによくよしてゐるのだ。酒は俗にも謂ふ通り愁を掃ふ玉箒で、これほど速效のある妙藥はないのだ。一杯やれば世の煩を一掃し、二杯やれば自然の調和に復歸し、三杯やれば酣笑狂歌し、ただ陶然として

世間の萬事を忘れてしまふ。況んや名利を争ふ官界にゐて、世間の風波に身を寄せてゐると、或は奔走を設けて人を陥れようとする陰謀家もあれば、言を巧にして人を欺瞞しようとする權略家もあつて、目を擧ぐれば滔滔たる天下皆此類である。酒にでも酔つてゐなければ、どうして此世が涉られよう。

曲江感秋 五年作

曲江にて秋に感ず

沙草新雨地。岸柳涼風枝。

沙草新雨の地、岸柳涼風の枝。

三年感秋思。併在曲江池。

三年感秋の思、併せて曲江の池に在り。

早蟬已嘹唳。晚荷復離披。

早蟬已に嘹唳、晚荷復離披す。

前秋去秋思。一一生此時。

前秋去秋の思、一一生此時に生ず。

昔人三十二。秋興已云悲。

昔人三十二、秋興已に云に悲む。

我今欲四十。秋懷亦可知。

我今四十ならんと欲す、秋懷亦知る可し。

歲月不虛設。此身隨日衰。

歲月虚しく設けず、此身日に隨ひて衰ふ。

暗老不自覺。直到鬢成絲。

暗に老いて自ら覺らず、直に鬢の絲を成すに到る。

【字解】【一】曲江 前に見ゆ。【二】嘹唳 鳴く聲。【三】晚荷 時すぎた蓮花。離披は十分に開くこと。【四】昔人 晉の潘岳を指す。年三十二の時秋興賦を作り秋懷を述べた。【五】秋懷 秋のおもひ。【六】成絲 白毛になること。

【題義】曲江の邊に住んで秋に感じて作つたのである。元和五年の作であるといふ。

【詩意】曲江の邊の雨あがりの沙草や涼風に舞ふ柳枝を見て、秋の愁を感じること既に三回であるが、今年も秋が環つて来て蟬が鳴き蓮花が開くのを見聞して、年年秋を悲む情が又ここに蘇つた。昔潘岳は三十二の時に秋興賦を作つて秋を悲んだが、今吾は四十に垂んとしてゐるのだから、秋を悲むのも當然である。歲月は人を待たず、此身は日を逐うて衰へる。いつとはなしに老い行くのも知らず、ほんやりしてゐる間に、忽ち兩鬢が白くなつてしまふ。

酬張太祝晚秋臥病見寄 張太祝が晚秋病に臥して寄せられしに酬ゆ

高才淹禮寺。短羽翔禁林。

高才禮寺に淹り、短羽禁林に翔る。

西街居處遠。北闕官曹深。

西街居處遠く、北闕官曹深し。

君病不來訪。我忙難往尋。

君病んで來り訪はず、我忙しくして往き尋ね難し。

差池終日別。寥落經年心。

差池たる終日の別、寥落たる經年の心

感傷 曲江感秋 酬張太祝晚秋臥病見寄

露濕綠蕪地。月寒紅樹陰。
況茲獨愁夕。聞彼相思吟。
上歎言笑阻。下嗟時歲侵。
容衰曉窗鏡。思苦秋絃琴。
一章錦繡段。八韻瓊瑤音。
何以報珍重。慚無雙南金。

露は濕す綠蕪の地、月は寒し紅樹の陰。
況んや茲獨愁の夕、彼の相思の吟を聞くをや。
上には言笑の阻るを歎じ、下には時歳の侵すを嗟す。
容は衰ふ曉窗の鏡、思は苦し秋絃の琴。
一章錦繡の段、八韻瓊瑤の音。
何を以てか珍重に報いん、慚づらくは雙南金無きを。

【字解】【一】張太祝 太祝は官名。張籍は貞元十五年、進士の第に登り、太常寺太祝を授けられ、久しうして祕書郎に遷る、詩を作り樂府に長じ警句多し。【二】禮寺 太常寺なり。禮儀を掌る官署。【三】禁林 天子の宮城。【四】北闕 宮城なり。【五】差池 齟齬して合はぬ貌。【六】寥落 さびしき貌。【七】綠蕪 綠の草原。【八】錦繡段 錦の織物。【九】八韻 十六句より成る古詩。瓊瑤は美玉。【一〇】珍重 珍品といふが如し。【一一】雙南金 美金なり。

【題義】張籍が病中白樂天に詩を寄せたので、白樂天が其れに酬いた詩である。

【詩意】君は優れた才能を有するにも拘らず、久しく太常寺太祝といふ微官に淹滞し、我は短才の身を以て却つて天子の左右に奉侍してゐる。君は遠く西街に住んで病に臥し、我は宮中奥深き處に居て職務の爲に忙しいので、互に往來問尋することも出來ず、終日相別れてゐると數年も會はずにゐるや

うな物淋しさを感ずる。況んや今は晩秋のことなれば、白露の綠の草原を濕し、寒月の紅樹の陰に輝くのを見て獨り愁ふる時も、君が相思の情を籠めた詩を讀んでは尙更ら感慨を深うする。君の詩は始には久しく談笑の機會を得ないことを嘆き、終には歲月の迫るのを嗟き、曉の鏡に對しては容貌の衰ふるを悲み、秋琴を弾じては苦しき思を寄せてゐることが述べてある。實に錦の織物にも比すべき玉の如き立派な詩である。かかる珍重すべき立派な詩に對し、何を返禮として贈るべきか。我に美金でもあらば贈ることも出來るが、其の持合せのないのが慚かしい。

立秋日曲江憶元九

立秋の日曲江にて元九を憶ふ

下馬柳陰下。獨上隄上行。
故人千萬里。新蟬三兩聲。
城中曲江水。江上江陵城。
兩地新秋思。應同此日情。

馬より下る柳陰の下、獨り隄上に上りて行く。
故人千萬里、新蟬三兩聲。
城中曲江の水、江上江陵の城。
兩地新秋の思、應に此日の情を同うすべし。

【字解】【一】故人 舊友。元稹を指していふ。【二】江陵 時に元稹は江陵士曹に貶せられてゐた。

【題義】立秋の日に長安の曲江で、江陵に謫居する元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】曲江の柳の陰で馬から下り、堤上の上つて獨り行き、新蟬の聲を聞いて遠方に謫居する君を憶うた。我は長安の曲江に居り、君は南方の江陵に居り、居は南と北とに隔れども、同じく秋に遇うて、同じく悲嘆の情を抱いてゐるであらう。

早朝賀雪寄陳山人

早朝して雪を賀し陳山人に寄す

長安盈尺雪。早朝賀君喜。

長安盈尺の雪、早朝君が喜を賀す。

將赴銀臺門。始出新昌里。

將に銀臺門に赴かんとし、始めて新昌里を出づ。

上堤馬蹄滑。中路蠟燭死。

堤を上りて馬蹄滑に、路に中つて蠟燭死ゆ。

十里向北行。寒風吹破耳。

十里北に向つて行けば、寒風吹いて耳を破る。

待漏午門外。候對三殿裏。

待漏す午門の外、候對す三殿の裏。

鬚鬢凍生冰。衣裳冷如水。

鬚鬢凍りて氷を生じ、衣裳冷なること水の如し。

忽思仙遊谷。暗謝陳居士。

忽ち思ふ仙遊の谷、暗に謝す陳居士。

暖覆褐裘眠。日高應未起。

暖に褐裘に覆はれて眠り、日高うして應に未だ起きず。

「ざるべし。」

【字解】【一】銀臺門 宮門の名。唐時翰林院は此門内に在つた。【二】新昌里 長安の街名。【三】待漏 漏は水時計。羣臣の參朝する者、漏刻移りて宮門の開くを待つこと。午門は宮城の正門。【四】仙遊 山の名。卷九の寄題盤屋廳前雙松の註に見ゆ。

【五】陳居士 居士は處士に同じ、題の陳山人なり。

【題義】曉に參内して雪の降つたことを賀し奉り、因つて仙遊山中に隱居する陳山人に寄せた詩である。

【詩意】長安の都には深さ一尺に盈つる大雪が降つたので、曉に參内して御喜を陛下に申し上げようと思ひ、銀臺門を指して新昌里の宅を出た。曲江の堤を上れば馬の蹄が雪にすべり、途中で蠟燭の火が消えてしまつた。更に十里の道を北に進めば寒風が吹きすさんで耳が裂けるやうである。午門の外に時の到るを待ち、それから宮殿に昇つて賀詞を述べたが、兩鬢には氷がはり衣裳は水に浸したやうになつた。フト浮世をよそに仙遊山中に隱居して暖な褐裘に覆はれ、日の高く上るまで寢てゐる陳山人に對して、敢て一言を呈したい氣持になつた。

初與元九別後。忽夢見之。及寤而書適至。兼寄

桐花詩。悵然感懷。因此寄 元九初 謫江陵

初めて元九と別れて後忽ち夢に之を見る、寤むるに及んで書適至り、兼ね

感傷 早朝賀雪寄陳山人 初與元九別後悵然感懷因此寄

て桐花の詩を寄す。悵然として感懐す。因つて此を以て寄す。元九初めて江陵に謫せらる

永壽寺中語。新昌坊北分。

歸來數行淚。悲事不悲君。

悠悠藍田路。自去無消息。

計君食宿程。已過商山北。

昨夜雲四散。千里同月色。

曉來夢見君。應是君相憶。

夢中握君手。問君意何如。

君言苦相憶。無人可寄書。

覺來未及說。叩門聲冬冬。

言是商州使。送君書一封。

枕上忽驚起。顛倒著衣裳。

開緘見手札。一紙十三行。

上論遷謫心。下說別離腸。

心腸都未盡。不暇敘炎涼。

云作此書夜。夜宿商州東。

獨對孤燈坐。陽城山館中。

夜深作書畢。山月向西斜。

月下何所有。一樹紫桐花。

桐花半落時。復道正相思。

殷勤書背後。兼寄桐花詩。

桐花詩八韻。思緒一何深。

以我今朝意。憶君此夜心。

一章三遍讀。一句十回吟。

珍重八十字。字字化爲金。

【字解】【一】永壽寺 寺の名。【二】新昌坊 長安の街名。【三】悠悠 遙なる貌。藍田は縣名。長安の東南九十里に在る。【四】

感傷 初與元九別後悵然感懷因此寄

●食宿程 ねとまりする日程。【五】 商山 山名。【六】 冬冬 門をたたく聲。【七】 手札 自筆の手紙。【八】 陽城 驛名。前に見ゆ。【九】 殷勤 ねんころなること。【一〇】 八韻 韻字の八字あること。即ち十六句より成ること。【一一】 八十字 十六句の五言古詩なれば八十字になる。

【題義】 元和五年に元稹が江陵に貶せられて長安を去つてから、白樂天が彼を夢に見た。その夢が寤めると元稹から手紙が来て、同時に自作の桐花の詩をも寄せた。因つて慨然として感ずる所あり、此詩を作り、以て元稹に寄せたのである。

【詩意】 君と永壽寺内で語り合ひ、新昌坊北で別れ、歸つてからボロボロと涙を流した。それは君の冤非を恨む公義から出た涙であつて、君の貶謫を悲む私情から出た涙ではない。君は遙遙と藍田縣を過ぎ去り、爾來音信不通であつた。併し君の行程を推測すれば既に商山の北を過ぎたであらう。昨夜は雲が散つて月色千里を照す良夜であつて、僕も君と同じく明月を仰いだか、其夜の夢に君と相見た。君が僕を憶ふ心が通じて我が夢となつたのであらう。僕は夢の中で君の手を握り、君が心中の思を問へば、君は「友を憶ふ情が深いが、さて心中の思を吐き盡して訴へるほどの友がない」と言つた。夢が覺めてまだ人にも語らないうちに門を叩く聲が聞え、「商州から來た使者で御座る」と言つて君から一封の手紙を置いて行つた。驚いて起きあがり倒に著物を著て、封を切つて見ると一枚の紙に十三行に書いてあり、始には遷謫の意を論じ、終には別離の悲を説いてある。いくら述べても盡きぬほど

悲嘆の情に鎖されてゐるので、寒暖の挨拶などを書く暇はなかつた。中に「商州の東なる陽城驛の山館に宿り孤燈に對して此手紙を認めた。認め畢つた時は大分夜も深けて山月が西に傾き、月の下に一本の桐の木があつて紫の花を著けてゐた。桐花の半落つる時復た相思の情に驅られて桐花の詩を作り、丁寧の手紙の裏に書き添へて君に寄せる」と書いてある。桐花の詩は十六句から成り、極めて情思の深い作であつて、此詩を讀んで君の當夜の心を能く察することが出来る。遂に一章を三回通讀し一句を十回も吟じた。實に金玉にも比して珍重すべき好詩である。

【餘論】 舊唐書本傳に、居易（樂天）は河南の元稹と相善し。同年に制舉に登り、交情隆厚なり。稹監察御史より謫せられて江陵府士曹掾となる。翰林學士李絳、崔羣、上（憲宗皇帝）の前に於て稹の無罪を面論し、居易は累疏して切諫すれども報せられずとある。唐宋詩醇には、一意百折、往復纏綿、極めて平、極めて曲、愈淺く愈深し。兩人覲面對話するも此親切なきを覺ゆるなり。杜甫の李白に於ける、居易の元微之に於ける、皆友誼中の最も篤き者なり。故に兩集中の贈答の詩、眞摯なること乃ち爾り。悲事不悲君の一句、從前の上章論救私情に係らざるを見る。此れは是れ篇中の眼目」と評してある。

和元九悼往

感舊蚊

元九の往を悼むに和す

舊蚊に感

美人別君去。自去無處尋。

美人君に別れ去る、去つてより尋ぬるに處無し。

舊物零落盡。此情安可任。

舊物零落し盡す、此情安んぞ任ふ可けんや。

唯有襯紗幌。塵埃日夜侵。

唯襯紗幌有り、塵埃日夜侵す。

馨香與顔色。不似舊時深。

馨香と顔色と、舊時の深きに似ず。

透影燈耿耿。籠光月沈沈。

影を透して燈耿耿、光を籠めて月沈沈。

中有孤眠客。秋涼生夜衾。

中に孤眠の客有り、秋涼夜衾に生ず。

舊宅牡丹院。新墳松柏林。

舊宅牡丹の院、新墳松柏の林。

夢中咸陽淚。覺後江陵心。

夢中咸陽の淚、覺めて後江陵の心。

含此隔年恨。發爲中夜吟。

此隔年の恨を含み、發して中夜の吟と爲る。

無論君自感。聞者欲沾襟。

君が自ら感ずるに論無し、聞者襟を沾さんと欲す。

【字解】【一】舊物。形見の品。【二】樹紗幌。即ち蚊帳。【三】耿耿。明なる貌。【四】沈沈。奥深き貌。【五】新墳。新しき墓。【六】咸陽。秦の都。唐の長安なり。【七】江陵。郡名。元稹の謫せられてゐる地。

【題義】

元稹が長安にゐた頃に蓄へて置いた美人が死んで、形見の蚊帳が残つてゐたが、江陵に謫せられてから此蚊帳を見て美人の長逝を悼む詩を作つた。此詩は白樂天が其れに和韻したのである。

【詩意】

美人が「たび君を後にして死んでからは、天にも地にも尋ぬべき處なく、形見の品さへ段段に散失するやうになつたことは、堪へ難い心の悲であらう。ただ一つ共に寝た蚊帳が残つてゐるが、それも塵に汚れて、在りし日の色の香の深きには似もやらず。燈をすかし月を籠めて中に一人寝の男がゐて、秋の夜寒を嘆きながら、昔は牡丹の花の咲き誇る小院に、花と容姿を競つてゐたのが、今は松柏の茂つた墓の主となつてしまつたことを偲び、夢に思を長安に馳せて、身は江陵に謫居し、此恨を舍んで夜中に美人の長逝を悼む詩を作つた。其詩を讀めば君が自ら感動するは言ふまでもなく、聞く人までも襟を沾さずにはゐられない。

重到渭上舊居

重ねて渭上の舊居に到る

舊居清渭曲。開門當蔡渡。

舊居清渭の曲、門を開けば蔡渡に當る。

十年方一還。幾欲迷歸路。

十年方に「たび還れば、幾んど歸路に迷はんと欲す。

追思昔日行。感傷故游處。

追思す昔日の行、感傷す故游の處。

挿柳作高林。種桃成老樹。

挿柳高林と作り、種桃老樹と成る。

因驚成人者。盡是舊童孺。

因つて驚く成人の者、盡く是れ舊童孺。

試問舊老人。半爲遠村墓。

試に問ふ舊老人、半ば遠村の墓と爲る。

浮生同過客。前後遞來去。

浮生過客に同じく、前後遞に來去す。

白日如弄珠。出沒光不住。

白日珠を弄するが如く、出沒光住らず。

人物日改變。舉目悲所遇。

人物日に改變す、目を舉げて所遇を悲む。

回念念我身。安得不衰暮。

回念して我身を念へば、安んぞ衰暮せざるを得ん。

朱顏銷不歇。白髮生無數。

朱顏銷して歇まず、白髮生じて數無し。

唯有山門外。三峰色如故。

唯有り山門の外、三峰色故の如し。

【字解】

【一】渭上 渭水のほとり。渭水は長安に在る。

【二】蔡渡 わたし場の名。

【三】挿柳 自分がもと挿した柳。

【四】種桃 嘗て植ゑた桃。

【五】朱顏 紅顏に同じ。若い顔色。

【題義】

樂天は貞元の末に渭水の上に卜居し、其後他に居を移したが、元和六年母の喪に服する爲に渭上に退居した。その時の作であらう。

【詩意】吾がもとの住居は渭水の曲に在つて、門を開けば丁度蔡渡と相對してゐる。十年ぶりで還つて見ると、大分様子が變つて殆ど道に迷ひさうだ。昔散歩したことを思ひ遊んだ處を見などして無量の感慨を起した。見れば自分の挿して置いた柳が高い林となり、手づから植ゑた桃が大木になつてゐる。殊に驚いたことは今の成人は皆昔の子供であり、昔の老人は半は村のまはりに散在する墓の主になつてゐることだ。人生は旅人と同じで往來先後定めなく、月日は曲取りの珠のやうで、ちらりとする間に過ぎ去つてしまふ。人も物も日に變り改まり目を舉げて見れば驚き悲まざるを得ない。吾が身の老衰したのも不思議はない。紅顏は去つて跡なく白髪のみいや増しに生える。ただいつ見ても變らないのは山門の外の山峰のみである。

白髮

白髮

白髮知時節。暗與我有期。

白髮時節を知り、暗に我と期する有り。

今朝日陽裏。梳落數莖絲。

今朝日陽の裏、數莖の絲を梳落す。

家人不慣見。憫默爲我悲。

家人見るに慣れず、憫默して我が爲に悲む。

我云何足怪。此意爾不知。

我云ふ何ぞ怪むに足らん、此意爾知らず。

凡人年三十。外壯中已衰。
 但思寢食味。已減二十時。
 況我今四十。本來形貌羸。
 書魔昏兩眼。酒病沈四肢。
 親愛日零落。在者仍別離。
 身心久如此。白髮生已遲。
 由來生老死。三病長相隨。
 除却無生念。人間無藥治。

凡そ人年三十なれば、外壯なるも中已に衰ふ。
 但寢食の味を思ふに、已に二十の時に減れり。
 況んや我今四十、本來形貌羸る。
 書魔兩眼を昏うし、酒病四肢を沈め、
 親愛日に零落し、在る者も仍は別離するをや。
 身心久しく此の如し、白髮生ずること已に遅し。
 由來生老死、三病長く相隨ふ。
 無生の念を除却すれば、人間に藥治無し。

【字解】【一】無生念 卷九の早梳頭の無生心に同じ。

【題義】白髮の生じたことから、人は宜しく生死を超越すべきことを述べた詩である。

【詩意】白髮はチャンと時節を心得てゐて、我と舊約でもあるものの如くに我が頭上にやつて來た。今朝日あたりのよい處で髮を梳つてゐた所が、バラバラと五六本白髮が落ちた。家族の者は始めて見たので、皆びつくりして物も言はずに先づ我が老衰を悲んだ。因つて我はかう言つて聞かせた。白髮

が生えるのは敢て怪むに足らない。お前等は其譯を知るまいから言つて聞かせるが、一體人は三十になれば、外見は達者なやうでも中は既に衰へてゐるのだ。だから睡眠や飲食の快味を考へて見ても、二十歳頃よりは遙に劣つてゐる。まして我は今年四十であつて、本來が瘦せ枯れてゐる所へ、讀書魔の爲に兩眼を昏まし、飲酒病の爲に身體を損じ、親友は日に日に死亡し、生き残つてゐる者は遠く離れて遇ふ機會もないといふ状態であるから、寧ろ白髮の生え方が遅いくらゐるのである。由來人は生老死といふ三厄を帯びてゐるのだから、佛理を悟つて生死の界を超越するがよいので、それを措いては他に治療藥はないのだ」と。

秋日

秋日

池殘寥落水。窗下悠揚日。
 嫋嫋秋風多。槐花半成實。
 下有獨立人。年來四十一。

池には殘る寥落の水、窗下悠揚の日。
 嫋嫋として秋風多く、槐花半實と成る。
 下に獨り立てる人有り、年來四十一。

【字解】【一】寥落 荒れ果てて凄じき貌。【二】悠揚 日の没せんとする貌。【三】嫋嫋 秋風の音。

【題義】秋日獨居無聊の狀を寫した詩である。

【詩意】荒れ果てて水の涸れた池、今にも沈まんとする夕日、秋風に吹かれる槐の花は半實になつてゐる。この景色に對して獨り立ちさまよつてゐる人がある。年の頃は四十一で最早盛の春も過ぎてゐる。

將之饒州江浦夜泊

將に饒州に之かんとして江浦に夜泊す

明月滿深浦。愁人臥孤舟。

明月深浦に滿つるとき、愁人孤舟に臥す。

煩寃寢不得。夏夜長於秋。

煩寃して寢ね得ず、夏夜秋よりも長し。

苦乏衣食資。遠爲江海游。

衣食の資に乏しきに苦み、遠く江海の游を爲す。

光陰坐遲暮。鄉國行阻修。

光陰坐ながら遲暮、鄉國行くゆく阻修。

身病向鄱陽。家貧寄徐州。

身病んで鄱陽に向ひ、家貧にして徐州に寄る。

前事與後事。豈堪心併憂。

前事と後事と、豈に心の併せ憂ふるに堪へんや。

憂來起長望。但見江水流。

憂へ來りて起つて長望すれば、但江水の流るるを見るのみ。

雲樹藹蒼蒼。煙波淡悠悠。

雲樹藹として蒼蒼たり、煙波淡として悠悠たり。

故園迷處所。一念堪白頭。

故園處所に迷ふ、一念白頭なるに堪へたり。

【字解】一 饒州 江西省鄱陽縣の地。江浦は江蘇省江浦府に屬す。二 愁人 愁ある人。樂天自ら謂ふ。三 煩寃 心に煩悶すること。四 遲暮 年よること。五 阻修 遠く隔たること。

【題義】この詩は貞元十五年頃の作で、饒州に赴かんとして江浦に舟泊した景況を述べたのである。年譜に據れば、樂天の兄の幼文が江西省の浮梁縣主簿となり、樂天は之に従行したとあるから、其時に作つたのであらう。當時家族の徐州（今の江蘇省銅山縣）にゐたことは詩中にも述べてある。

【詩意】明月の隈なく深浦を照す時、孤舟に臥せば、心が憂悶して眠られず、夏の夜が秋の夜よりも長く感ぜられる。何とかして生活の資を得たいと思つて江海の旅に出たが、徒に年を取るばかりで、足ごとに郷里が遠くなるのが心細い。而も身は病を抱いて鄱陽に向ひ、家族は徐州に寄託してゐるので、あとさきの事を考へると、どちらを向いても憂愁に堪へない。起つて郷里の方を望めば、ただ江水の流れるのを見るばかりで、陸地は雲樹蒼蒼として眼を遮り、水上は煙波遠くして窮りなく、故郷は終に見ることが出來ず、一念爲に頭髮を白くする。

思歸

時初爲 校書郎

歸を思ふ

時に初めて校書郎と爲る

養無晨昏膳。隱無伏臘資。

養ふに晨昏の膳無く、隱るるに伏臘の資無し。

感傷 將之饒州江浦夜泊 思歸

遂求及親祿。僮俛來京師。遂に親に及ぶの祿を求め、僮俛して京師に来る。
 薄俸未及親。別家已經時。薄俸未だ親に及ばず、家に別れて已に時を經。
 冬積溫席戀。春違采蘭期。冬は溫席の戀を積み、春は采蘭の期に違ふ。
 夏至一陰生。稍稍夕漏遲。夏至一陰生じ、稍稍として夕漏遲し。
 塊然抱愁者。長夜獨先知。塊然として愁を抱く者、長夜獨り先づ知る。
 悠悠鄉關路。夢去身不隨。悠悠たる鄉關の路、夢に去れども身は隨はず。
 坐惜時節變。蟬鳴槐花枝。坐に惜む時節の變ずるを、蟬は鳴く槐花の枝。

【字解】【一】晨昏 朝夕なり。【二】伏臘 伏は夏、臘は冬の物日。【三】僮俛 勉強する貌。【四】溫席 袁山松後漢書に、羅威の母年七十、天寒ければ常に身を以て席を溫め、而る後其處を授くとある。【五】采蘭 晉書皇甫謐傳に、謐著述を以て務となす。武帝頻に詔を下し 敦迫す。謐上疏して云く、陛下榘を披きて蘭を採り、并せて蒿艾を收む云云とある。【六】稍稍 段段少しづつ。夕漏は日の暮れる時刻。【七】塊然 孤立の貌。【八】悠悠 遙なる貌。

【題義】郷里に歸りたいといふ情を述べた詩で、貞元十八年、初めて校書郎を授けられた頃の作である。

【詩意】親を養はうとすれば朝晩供すべき食膳がなく、隱居して仕へまいとすれば生活の資力がない。

遂に官に就き親にまで及ぶ所の俸祿を食まうと志して長安の都に来て、官には就いたが至つて薄俸であるから親にまでは及ばず、家を離れて久しく時を送り、冬は親を戀ひ慕つて席を溫めんことを欲し、春は採蘭の期に違つて昇進も出来ないである。今や夏至になつて陰氣が生じ（夏至には陽氣が極まつて陰氣が生じ、冬至には陰氣が極まつて陽氣が生ずると周易にある。）段段日の暮れるのが少しづつ早くなつて、夜の時間のたつのがだんだん遅くなるのであるが、愁を抱いて獨居する身には夜の長くなることが人より先に分るのである。幾山川を隔つる郷里には夢では歸ることが出来ても身は夢と伴はない。槐の枝に鳴く蟬の聲を聞くにつけても、坐に時節の移るのが惜まれる。

冀城北原作

冀城北原の作

野色何莽蒼。秋聲亦蕭疎。野色何ぞ莽蒼、秋聲亦蕭疎。
 風吹黃埃起。落日驅征車。風吹いて黃埃起り、落日征車を驅る。
 何代此開國。封疆百里餘。何の代にか此に國を開く、封疆百里餘。
 古今不相待。朝市無常居。古今相待たず、朝市常居無し。
 昔人城邑中。今變爲丘墟。昔人城邑の中、今變じて丘墟と爲る。

感傷 冀城北原作

昔人墓田中。今化爲里閭。
 昔人墓田の中、今化して里閭と爲る。
 廢興相催迫。日月互居諸。
 廢興相催迫し、日月互に居諸す。
 世變無遺風。焉能知其初。
 世變じて遺風無し、焉んぞ能く其初を知らん。
 行人千載後。懷古空躊躇。
 行人千載の後、古を懷うて空しく躊躇す。

【字解】【一】冀城 冀州の古城。今の河南省臨漳縣の西南に在る。【二】莽蒼 草の色。【三】蕭疎 淋しき貌。【四】征車 行旅の車。【五】居諸 居も諸も助辭なり。詩經邶風日月篇に、日居月諸、照臨下土とある。【六】行人 旅人。白樂天自ら謂ふ。千載は千年。

【題義】冀州城北の野原を過ぎ感ずる所ありて此詩を作つた。

【詩意】野原が青青と茂り、秋風が淋しく吹いて塵埃を立ててゐる處を、夕日の前に車を走らせて道を急ぐ。ここに、冀州城を建てて百里の境域を治めたのは遠い昔のことであらうが、歲月は移り易り朝市も常住のものではないから、昔城邑であつた所が今は變じて丘墟となり、昔墓地であつた所が今は化して城邑となり、興廢常なく日月去來し、變遷して跡を留めないで、誰も明に其初を知る者はない。今吾千載の後に此地を過ぎ、古を懷うし空しく低回顧望するのみである。

客路感秋寄明準上人

客路秋に感じ明準上人に寄す

日暮天地冷。雨霽山河清。
 日暮れて天地冷に、雨霽れて山河清し。
 長風從西來。草木凝秋聲。
 長風西より來り、草木秋聲を凝らす。
 已感歲倏忽。復傷物凋零。
 已に歳の倏忽なるを感じ、復た物の凋零するを傷む。
 孰能不慳悽。天時牽人情。
 孰か能く慳悽せざらん、天時人情を牽く。
 借問空門子。何法易修行。
 借問す空門の子、何の法か修行し易く、
 使我忘得心。不教煩惱生。
 我をして心を忘れ得しめ、煩惱をして生ぜしめざる。

【字解】【一】倏忽 迅速なること。【二】凋零 凋落なり。【三】慳悽 いたみなしむ。【四】空門子 佛僧をいふ。明準上人を指して言ふ。

【題義】旅の途中に在りて秋の淋しさに感じ、明準上人に寄せた詩である。

【詩意】今や日暮れ雨霽れて天地山川が殊に清冷を加へた。折しも西の方から風が吹いて來て、草木が秋の聲を立ててゐる。この色を見、この聲を聞けば、歲月の迅速なるに感じ、萬物の凋落を傷み、人をして心を痛ましめる。天時は此の如く人情を牽くのである。因つて上人に尋ねるが、我をして吾が心を忘れしめて、煩惱を起さしめないやうにするには、どの教法が最も修行し易いであらうか。

游襄陽懷孟浩然

襄陽に遊びて孟浩然を懷ふ

楚山碧巖巖。漢水碧湯湯。

楚山碧にして巖巖、漢水碧にして湯湯。

秀氣結成象。孟氏之文章。

秀氣結んで象を成すは、孟氏の文章なり。

今我諷遺文。思人至其鄉。

今我遺文を諷し、人を思つて其郷に至る。

清風無人繼。日暮空襄陽。

清風人の繼ぐ無く、日暮れて襄陽空し。

南望鹿門山。藹若有餘芳。

南鹿門山を望めば、藹として餘芳有るが若し。

舊隱不知處。雲深樹蒼蒼。

舊隱處を知らず、雲深うして樹蒼蒼たり。

【字解】一 襄陽 湖北省の縣名。二 孟浩然 唐の襄陽の人、少くして節義を好み鹿門山に隱る。年四十のとき京都に遊び、嘗て大學に於て詩を賦す。一座嘆服す。開元二十八年卒す。三 巖巖 高く聳ゆる貌。四 湯湯 水の盛に流るる貌。五 孟氏 孟浩然。

【題義】孟浩然の故郷なる襄陽に遊んで孟浩然を追懷した詩である。

【詩意】襄陽に来て見ると楚山が巖巖と聳え立ち、漢水が湯湯と流れてゐる。この山水秀麗の氣が凝つて現れたものが即ち孟浩然の詩である。余は其遺篇を讀んで追慕の情に堪へず、其郷里なる襄陽に來たのであるが、今は誰も其風を承け繼ぐ者がなくて、襄陽のあたりは蕭條として日の暮れたやう

である。ただ南の方の鹿門山を望み見れば、今尚ほ餘芳を存するやうに思はれる。併し其の隱居した場所は知る由もなく、樹木が蒼蒼として雲に聳ゆるばかりである。

秋暮西歸途中書情

秋暮西歸途中書情

秋暮西歸の途中情を書す

耿耿旅燈下。愁多常少眠。

耿耿たる旅燈の下、愁多くして常に眠少し。

思鄉貴早發。發在雞鳴前。

郷を思つて早發を貴ぶ、發すること雞鳴の前に在り。

九月草木落。平蕪連遠山。

九月草木落ち、平蕪遠山に連る。

秋陰和曙色。萬木蒼蒼然。

秋陰曙色に和し、萬木蒼蒼然たり。

去秋偶東遊。今秋始西旋。

去秋偶東遊し、今秋始めて西旋す。

馬瘦衣裳破。別家來二年。

馬瘦せ衣裳破れ、家に別れて來二年。

憶歸復愁歸。歸無一囊錢。

歸を憶つて復歸を愁ふ、歸つて一囊の錢無し。

心雖非蘭膏。安得不自然。

心は蘭膏に非ずと雖も、安んぞ自ら然えざるを得ん。

【字解】一 耿耿 明なる貌。二 平蕪 平野。三 蒼蒼然 青青としてゐる貌。四 西旋 西に歸る。五 蘭膏 蘭